

祖國

昭和二十六年四月二十五日發行
昭和二十五年一月十二日第三種郵便物認可

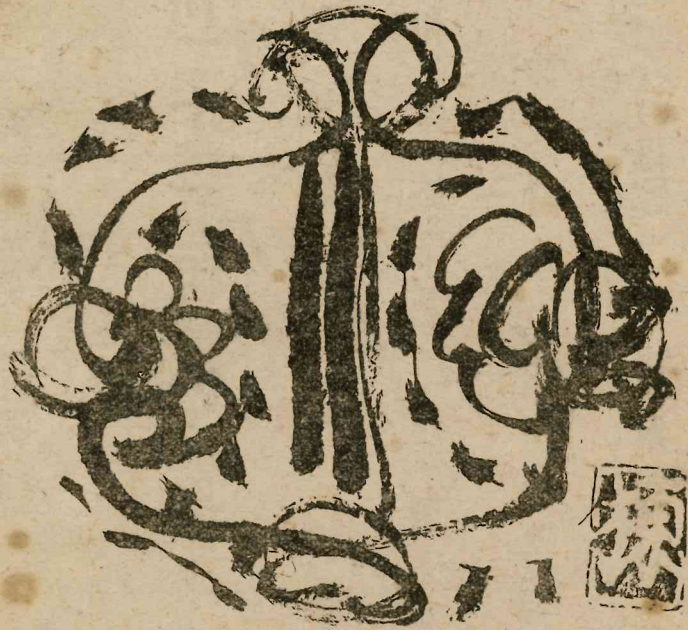


五月號



祖 國 (第三卷 第五號)

昭和二十六年五月號



新旧指導要領をつなぐ

奈良女高師附属中学各科研究会編集

最新 中學ワークブック

| | | | | |
|---------------|------|------|---|--------------------|
| 数 学 (1.2.3年用) | 各B 5 | 各84頁 | 各 | 1.2年 55円 3年 60円 |
| 社 会 (1.2.3年用) | 各B 5 | 各56頁 | 各 | 50円 |
| 理 科 (1.2.3年用) | 各B 5 | 各56頁 | 各 | 50円 |
| 職業家庭 (全 1 卷) | B 5 | 64頁 | | 50円 |
| 保健体育 (全 1 卷) | B 5 | 56頁 | | 40円 |

日本國語協議会中学部長武藤辰男先生監修

國 語 (1.2.3年用) 各A 5 各80頁 各 50円

元文部省教科書編纂官森規現男先生監修

さんすうワークブック

上卷 (小学1.2.3.4.5.6年用) 各B 5 各40頁 (14年40円其他35円)

廣島大学教授 戸田 清先生

高 校 数 學 へ の 出 發 A 5 50頁 45円

現行教科書單元準據

奈良女高師附属中各百科研究会編集

中學 社會科 ワークブック

(1.2.3年用) 各B 5 各64頁 各45円

中學 理科 ワークブック

(1.2.3年用) 各B 5 各56頁 各45円

日本國語協議会中学部長武藤辰男先生監修

中學 國語科 ワークブック

(1.2.3年用) 各B 5 各64頁 各50円

奈良女高師附属中各科研究会、武藤辰男先生編集

中學ワークブック總まとめ編

(社会科、理科、國語科) 各科共B 5 80頁 各50円

大 好 評 發 賣 中

發 行 所 株 式 會 社 吉 野 書 房

京 都 市 上 京 区 新 町 通 丸 太 町 上 ル

祖 國 五月號目次 第三卷(通卷) 第五号(二十号) 表紙・カッ卜 棟 方 志 功

創刊二十號と祖國の成果……………(四)

科學問答……………(七〇)

大和の旅……………淺野 晃(五〇)

戦 後 吟……………田中克己(三四)

ふたかみの花嫁……………堀内民一(三八)

廢絶の歴史の精神……………山科雄護(四〇)

花の散るころ……………岩崎昭彌(六二)

東西文化の差違と融合……………北 吟 吉(二四)

祖 國 正 論……………(六)

家の觀念と新民法……………地方選舉に當つて

紀元節の復活……………宗教心の衰退か

愛國心の本質……………藝術の世界性

アジアのナショナリズムの歪曲……………贗 札 時 代

「眞の愛國者」の徒黨化……………近 來 の 朗 報


健全なものを求める傾向……………兇惡犯罪の真相

人物批評の根據




戦後吟

田中克己



北支那のなつめ林にわがいのち棄つべかりしをかへり來しはや
石の上ふるきふみよみ老いなんと思ふころもつきにけるかも
山の辺にうすあかりさし松の木のごすゑほのぼの明けそめにけり
たゝかひに出でゆくわれと知りしときすなはち身をばまかせしひとか
むらさきのひともと摘みてかざしにすいつの日またも会はむをとめぞ
吉野なる山のなぞへのふたもとのひの木となりてわれらをらまし
おほらみの潮のごとくすさまじくとどろくむねはわれのみぞ知る
くさぐさとむかし思へばたのしまずかゝる日ゆゑに老いゆくらしも
とらへんとすれば飛び立つ鳥われとつれなくいひてなれば笑まひぬ
鳥見山の北のふもとにわが住みてあづまの方をおもふあさひぬ
山かげの小さき家にありり切りふたりすすへるゆめをわが見ぬ
秋草にならびあしときオキコウ奥様と呼ばれしひとをいつか忘れむ
ますらをのぞみをたちてをとめ子と歌かはさむと思ふこのごろ



おもふことなき世なりせば山の辺のみはかを守りてあらずしものを
山の霧下り來るすちのゆふぐれはたゞひとりして住めるがごとし
疲れたる旅びのごとひとつとつ火めざしてあゆむわれをあはれめ
木かげにてひととひととく歌の本こひうたおほくしるしたりける
みづみづし瓜のごとくにをとめらが高まるむねをわれは知らずも
秋立てる大和國原ひととゆき道のきはみに消えゆかましを
春あさき春日の野辺に若菜つむをとめをぐなと見られてましを
妻子すて梅雨ににこれる上水にしづみし友をひとは語れる
新しきこひの歌をば作らむと舌きゲーテの歌をよみあつ
いそのかみふるへてすがるをとめゆゑこのさかしきも耐へむとはいふ
わかのぞみ成らぬさだめと思ひ知る野に咲く花の日にやくるころ
わがごとくをとめとあたる時すぎてこの塚ぬちに眠るひとはや
このをとめなよにならにうちなびきひとにたよらむその日あらすな
奈良山のこのて柏のふたおもてつくるをとめに祭りてぞ來し
わたのはら八十島かけて漕ぎ出でてかへらぬひとをわれは忘れず
かの腫けふもまぶたに思へどもちちははゆゑにあふことはなし
三室戸の杉の木の間ひとめをぢふるへつゝあに抱かれしをとめ

問 ブルノーとガリレイとは、どういふ点で違ふのですか。

答 御承知のやうに、キリスト教の神学は初期の間はプラトン哲学、新プラトン哲学の影響を受けてゐました。古代末期の不安の時代において、個人の魂の救済を使命とする宗教としては、新プラトン派の思想につながるのには当然でせう。

ところが、やがてキリスト教は、単に個人的信仰としてではなく、文化と政治の一切を統べてヨーロッパに君臨する、カトリシズムの形態をとるに至りました。ここにおいてその神学も、宇宙の一切のものを統一する合理的、組織的な体系の樹立といふことに重きがおかれるやうになり、哲学としても、アリストテレスの説が尊重されるやうになつてきました。かくして、アリストテレスの哲学に基いて、スコラ神学が作られるに至つたのです。さうして、これは爾來中世ヨーロッパを支配する思想となり、これ以外の立場は皆異端として、教会の權威によつて排除されたのです。

かやうな次第で、教会の權威に対する反抗、スコラ哲学に対する攻撃は、勢ひアリストテレスの哲学への攻撃といふ形をとるのです。この攻撃には二つの方向があり、一つは、アリストテレスの説に代るに、当時ビザンツの亡命者やサラセンの学者によつて傳へられた新プラトン派の系統に属する哲学を以て、スコラ哲学に対抗する説を唱道しようといふ動きで、ブルノーで代表される人文主義者がこれに属します。スコラ哲学の動きのとれない合理主義を打破するのに、新プラトン派の審美的、神秘主義的な傾向が喜ばれたのです。

もう一つの方向は、科学的な観測や考察に基き、アリストテレスの学説が事実と反することに氣つき、この点からアリストテレスの学説

を批判したコペルニクス、ガリレイたちの科学者の業績です。彼らの説は、スコラ神学の基礎を危くするものとして、教会によつて禁止されたことは衆知の通りですが、コペルニクスやガリレイは、その発見した科学上の学説によつて、キリスト教の信仰を攻撃しようとしたのではなくして、スコラ神学の中にあるアリストテレスの自然観が事実と反するといふことを、自説に対する學者の信念から主張したにすぎないのです。彼らの説を教会攻撃に利用したのは彼ら自身でなく、スコラ神学に代る世界観を提唱しようとしてゐた人文主義者たちです。

問 それはちやうどダーウインの進化論が、ダーウインにおいては、控目に、科学的に、実証される(と彼が信じた)範圍内で述べられてゐたのを、スペンサー、ハックスレー、ヘッケル等によつて、啓蒙主義的な思想宣傳の強力な武器として、廣く社会現象にまでその觀念をひろげて利用されたのに似てゐますね。

答 もつとも、ダーウインの進化論の着想には、はじめからマルサスの人口論の影響があることでもわかるやうに、その比較的少い実証的成果の部分よりは、着想の背後にある唯物思想の方が、世人の関心を引くのはやむをえないと言へます。

進化論は、科学としての十分実証的な基礎を以て出発したといふよりは、少数の事実と、それを説明する巧妙な着想とからなる、一つの臆説として出発したのです。最近には、進化に関する科学的なデータが次第にふえてきつつあるやうですから、進化論は、最近やうやく科学にならうとしかけてゐるところでせうしかし今でも科学上の定説と言ひうるものに落着くほどの実証性には、まだ欠けてゐるやうです。

編集後記

○こゝに我が「祖國」が二十号を世に送るに當つて、連合國軍最高司令官が更迭されるに至つた。この時に於て我々日本人は夫々その心の隅に新なる決意を味つた。それは文字でもつて云ひ現せるものでもなく、又軽々と口に出して云ふ可きでない。日本人の夫々が我が身に云ひ聞かせ、そして明日への決意として胸に秘めて置く可きである。我々はもう何が起らうとも周章ない。何が來やうとも驚かない。まして幽靈にも迷はされることはない。

○マッカーサー元帥は日本を去るに當つて別に何も言ひ残しては行かなかつた。彼は武人である。「この上はさのみ異議を申すに及ばず」と云つて戰場へ赴けた古人が思ひ出だされる。武人が戰場以外の場所に於て、やぶれるといふことの悲痛さを歴史は更めて我々の眼に見せてくれたのだ。

と云ふことは匹敵するだけの論據をもたないのと、保身、便乗、營利の精神からだ。彼等がかう云ふ、拳に出たのは、変動する時勢を察して轉向を始めたからだ。彼等は易々として轉向する醜狀を自ら反省する事もなく、卑劣なる罵言を呈し始めた。その心情は察するに餘りある。これが彼等の世上の常套手段なのだ。我々は何ら痛痒を感じない。不節操と追従と便乗をモットーとする之等チャイナリズムの馬脚を現すのも又遠くないだらう。

○今日の日チヤイナリズムの不定見と輕薄さに関係なく、アジアの情勢は一層深刻化するだらう。其の時國民は、その傳統と氣質によつて自ら決意と体制を整へるであらう。言ひ換へれば今日のチャイナリズムに國民は用事がない。又信用もしてゐない。

○最近「祖國」とその刊行本に對し卑屈なる批判をなすチャイナリズムが激増した。その批判は勿論第一義的なものに於てではない。彼等は第一義的論点で議論を斗はすだけの勇氣がない。勇氣がない

まさき會同人

- 栢木喜一
奥西保
玉井一郎
奥西幸
高島賢司
柳井三千比呂
大井靖雄

「祖國」第三卷 第五號 五月號

定價 五十圓 送料 三圓

昭和六年 四月十五日印刷

昭和六年 五月一日發行

編輯兼 玉井一郎

印刷所 大阪府西淀川區御幣島 中四丁目二番地

印刷所 近畿印刷株式會社

印刷所 京都府上京區新町通り

發行所 さいはら木町下ル 電話(上)三六九一 振替京都七〇一七

問 ブルーノとガリレイとは、どういふ点で違ふのですか。

答 御承知のやうに、キリスト教の神学は初期の間はプラトン哲学、新プラトン哲学の影響を受けてゐました。古代末期の不安の時代において、個人の魂の救済を使命とする宗教としては、新プラトン派の思想につながるのには当然でせう。

ところが、やがてキリスト教は、単に個人的信仰としてではなく、文化と政治の一切を統べてヨーロッパに君臨する、カトリシズムの形態をとるに至りました。ここにおいてその神学も、宇宙の一切のものを統一する合理的、組織的な体系の樹立といふことに重きがおかれるやうになり、哲学としても、アリストテレスの説が尊重されるやうになつてきました。かくして、アリストテレスの哲学に基いて、スコラ神学が作られるに至つたのです。さうして、これは爾來中世ヨーロッパを支配する思想となり、これ以外の立場は皆異端として、教会の權威によつて排除されたのです。

かやうな次第で、教会の權威に対する反抗、スコラ哲学に対する攻撃は、勢ひアリストテレスの哲学への攻撃といふ形をとるのです。この攻撃には二つの方向があり、一つは、アリストテレスの説に代るに、当時ピザンツの亡命者やサラセシの学者によつて傳へられた新プラトン派の系統に属する哲学を以て、スコラ哲学に対抗する説を唱道しようといふ動きで、ブルーノで代表される人文主義者がこれに属します。スコラ哲学の動きのそれな合理的主義を打破するのに、新プラトン派の審美的、神秘的な傾向が喜ばれたのです。

もう一つの方向は、科学的な観測や考察に基き、アリストテレスの学説が事実と反することに気づき、この点からアリストテレスの学説

を批判したコペルニクス、ガリレイたちの科学者の業績です。彼らの説は、スコラ神学の基礎を危くするものとして、教会によつて禁止されたことは衆知の通りですが、コペルニクスやガリレイは、その発見した科学上の学説によつて、キリスト教の信仰を攻撃しようとしたのではなくして、スコラ神学の中にあるアリストテレスの自然観が事実と反するといふことを、自説に対する学者の信念から主張したにすぎないのです。彼らの説を教会攻撃に利用したのは彼ら自身でなく、スコラ神学に代る世界観を提唱しようとしてゐた人文主義者たちです。

問 それはちやうどダーウインの進化論が、ダーウインにおいては、控目に、科学的に、実証される(と彼が信じた)範囲内で述べられてゐたのを、スペンサー、ハックスレー、ヘッケル等によつて、啓蒙主義的な思想宣傳の強力な武器として、廣く社会現象にまでその觀念をひろげて利用されたのに似てゐますね。

答 もつとも、ダーウインの進化論の着想には、はじめからマルサスの人口論の影響があることでもわかるやうに、その比較的少い実証的成果の部分よりは、着想の背後にある唯物思想の方が、世人の関心を引くのはやむをえないと言へます。

進化論は、科学としての十分実証的な基礎を以て出発したといふよりは、少数の事実と、それを説明する巧妙な着想とからなる、一つの臆説として出発したのです。最近には、進化に関する科学的なデータが次第にふえてきつつあるやうですから、進化論は、最近やうやく科学にならうとしかけてゐるところでせうしかし今でも科学上の定説と言ひうるものに落着くほどの実証性には、まだ欠けてゐるやうです。

編集後記

○こゝに我が「祖國」が二十号を世に送るに當つて、連合國軍最高司令官が更迭されるに至つた。この時に於て我々日本人は夫々その心の隅に新なる決意を味つた。それは文字でもつて云ひ現せるものでもなく、又軽々と口に出して云ふ可きでない。日本人の夫々が我が身に云ひ聞かせ、そして明日への決意として胸に秘めて置く可きである。我々は何が起らうとも周章ない。何が來やうとも驚かない。まして幽霊にも迷はされることはない。

○マッカーサー元帥は日本を去るに當つて別に何も言ひ残しては行かなかつた。彼は武人である。

「この上はさのみ異議を申すに及ばず」と云つて戰場へ赴せた古人が思ひ出だされる。武人が戰場以外の場所に於て、やぶれるといふことの悲痛さを歴史は更めて我々の眼に見せてくれたのだ。

○連合國軍最高司令官の更迭が行はれても「日本に対する米國の政策は変わらない」と云ふ言葉を掲げて、日本の政治家及チャーナリズムは一齊に國民への氣休めを要請した。其の言葉自体に間違ひはないだらう。そして政治家達は、このことについて何ら自主的政策を發表するでもなく、チャーナリズムは外客の写眞をとるに餘暇はないらしい。

○今日のチャーナリズムの不定見と輕薄さに關係なく、アジアの情勢は一層深刻化するだらう。其の時國民は、その傳統と氣質によつて自ら決意と体制を整へるであらう。言ひ換へれば今日のチャーナリズムに國民は用事がない。又信用もしてゐない。

○最近「祖國」とその刊行本に對し卑屈なる批判をなすチャーナリズムが激増した。その批判は勿論第一義的なものに於てではない。彼等は第一義的論点で議論を斗はずだけの勇氣がない。勇氣がない

と云ふことは匹敵するだけの論據をもたないのと、保身、便乗、營利の精神からだ。彼等がかう云ふ挙に出たのは、変動する時勢を察して轉向を始めたからだ。彼等は易々として轉向する醜狀を自ら反省する事もなく、卑劣なる罵言を呈し始めた。その心情は察するに餘りある。これが彼等の處世上の常套手段なのだ。我々は何ら痛痒を感じない。不節操と追従と便乗をモットーとする之等チャーナリズムの馬脚を現すのも又遠くないだらう。

○創刊二十号を出すに當つて特輯号にしたい企画をたてたが、同人各自、皆自分の業務に忙殺されて意を得ず、十頁の増頁を以てその趣意に換へた。亦最近各地から多數の御寄稿を頂き、その整理選択に喜しい悲鳴をあげてゐる状態である。今後共相交らずの御寄稿御援助を賜り度。北吟吉氏は戦前に本誌と同名の雑誌「祖國」を發刊された誼で今回御寄稿を賜つた次第である。

(奥西幸)

まさき會同人

榎木喜一
奥西保
玉井一郎
奥西幸
高島賢司
柳井三千比呂
大井靖雄

「祖國」第三卷 第五號 五月號

定價 五十圓
送料 三圓
昭和六年 四月五日印刷
昭和六年 五月一日發行

編輯兼 玉井一郎
發行人 大坂市西淀川區御幣島
中四丁目二番地

印刷所 近畿印刷株式會社
印刷人 嶋田勝治
京都市上京區新町通り

發行所 まさき會祖國社
さばら木町下ル
電話(上)三六九一
振替京都七〇一七

祖國

昭和二十六年八月二十五日印刷納本
 昭和二十六年九月一日發行（毎月一回發行）
 昭和二十五年一月十二日第三種郵便物認可



雜草堂

九月號

詩人全書 第一部（東洋） 未完

- | | |
|-----------|---------|
| 白 秋 詩 抄 | 北原白秋著 |
| 春 夫 全 詩 抄 | 藤田春夫著 |
| 白 羊 宮 | 吉田精二著 |
| 宮澤賢治詩抄 | 河田泣菫著 |
| 藤 村 詩 選 | 日夏耿之介解説 |
| 鷗 外 詩 集 | 草野心平編 |
| 萩原朔太郎詩抄 | 藤藤春夫編 |
| 室生犀星詩抄 | 森 鷗 外著 |
| 天 地 有 情 | 保田與重郎編 |
| 以下 續 刊 | 室生犀星著 |
| | 乾 直 基解説 |
| | 土井晩翠著 |

東京都千代田区神田鎌倉町六
 發行所 株式会社 酣燈社
 振替東京二九四九七七番



祖國社刊

絶對平和論

B 6 二百六十九頁
 價二〇円七三〇円

「独立」の指環者の第一の資格は何
 それは毅然たる自主の精神である。
 第二の資格は何ぞ。
 自主の精神を支へ守る自主の思想である。
 第三の資格は何ぞ。
 自主の思想を自ら表現しうる種々の能力である。
 一言に云へば？
 一言に云へば東洋の覺醒である。

日本に祈る

B 6 二八九頁
 定價二五〇円

石川啄木

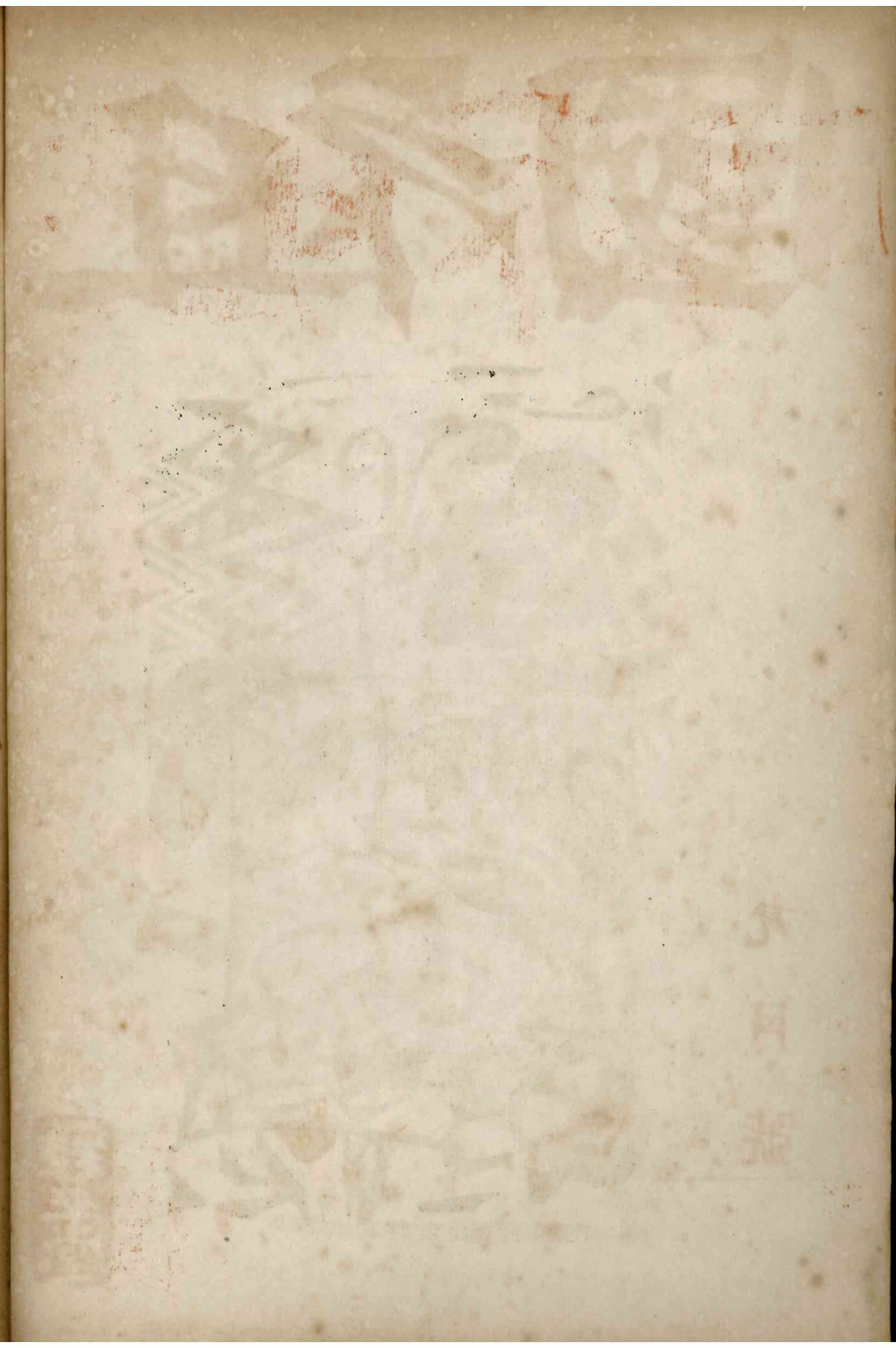
B 6 一九二頁
 定價一六〇円

祖 國 五 月 號 第 三 卷 第 五 號

定價 五十圓

祖 國 (第三卷 第九號)

昭和二十六年九月號





祖 國 九月號目次 第三卷 (通十四卷)

表紙・カット 棟 方 志 功

祖 國 正 論 (四)

東 洋 の 祈 り

講 和 へ の 希 望

講 和 の 意 義

講 和 全 權 團 に 與 ふ

ア ナ タ ハ ン の 勇 士

文 化 功 勞 者 年 金 に つ い て

藝 術 と 科 學

文 學 と 批 評

空 中 散 亂 歌 吉 村 淑 甫 (二四)

草 炎 知 念 榮 喜 (二五)

六 月 の ま ご は し 小 高 根 二 郎 (二六)

年 少 吟 田 中 克 己 (二六)

自 然 の 精 神 史 堀 内 民 一 (二六)

——本居宣長の風景觀——

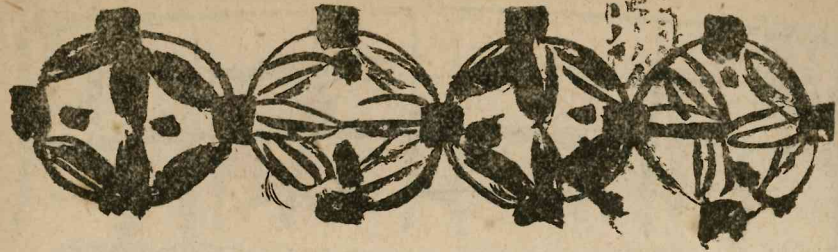
志 那 禰 祭 松 山 秀 美 (三)

人 斬 り 彦 齋 (二) 今 東 光 (四)

年 少 吟

田 中 克 巳

あけほのの光のなかに目ざめるぬなをかなしむと吾はのこされし
咳すればのど痛むゆゑ浅田蛤こゝろ幼くのみてねむるも
ほのほのと空にかゝれる雲ありぬそこに咲き見ゆ白梅の花
このこひはつひにはかなし梅檀のいまだ芽ふかぬ枝に実ありて
夏草に紅のはな光りぬをとめとわかれたびゆくわれは
雨あとのにごりはふかし奈良井川いく山川をあつめたりけむ
身はしばし仙藏院にとどまりてゆふくれがたはひとを恋ふるも
北風にむかひてわれは歩みしが髪ことごとくうしろになびく
空のいろ淡蒼くしてきはみなしきみ葬ることを念々にもつ
正元もなるべくなりし海港はこのあしもとにひろがりである
冬花のマーガレットの白ければきみに買はんとかねておもひき



うつしよのからだ爛汚にちかづけはくちいろどりしひとはありける
みはふりの教會の窓のそとゆきし白猫のことも忘れざらむよ
三輪山の尾の間の谷や檜の木の下に佛をすゑたてまつる
群松のこぬれうごかぬしつけさやとほくのとよみいまはやみたり
蒼々とひろこれる空見つめてあり誰のまなこかかゞやき出つる
青山のちらばり立てる國原はわがかなしきがおくつきどころ
娼婦らの若きを見しが三月のなげきなりとはひとに知らゆな
山吹の咲くやぶかげのにはたつみ光りてゆくは春の魚かも
ゆふなぎさ波のうねりも深ければ率ある犬は海にむかひぬ
かなしきは遍照光の消ゆる見つゝちちははの國にわかれいつるも
ほのほのと味噌汁のにはひながれたり朝啼く虫に地震はふりたれ
わが窓に穉咲きぬと告げに来しとつくに近き十九のをとめ
ゆくさをまじめに思へばなみだ出つゆでたまごをば食はざりにけり
はこべらは花をたもちぬいつくにか雲雀ひそみて鳴く日となりぬ
この村はにれの高木の多くあるけふをはじめて屋根にのぼれり

して、寶物、大名物、中興名物、名物並、上之部の五部にわけ、最上のものから實に五百十八點まで此に記載したものであつた。その中で二十二盃の井戸茶盃のうち、天下の三井戸と稱せられた大名物の井戸茶盃が三つある。即ち喜左衛門、細川、加賀である。就中、彦齋は出雲の國の手結浦で細川井戸のことを思ひ浮べてゐたのであつた。

この細川井戸といふのは細川三齋公が珍重されたもので、後に仙台の伊達家に傳はり、更に江戸深川の豪商冬木喜平次の有に歸し、安永七年に江戸の道具商伏見屋甚兵衛の手から三百兩で不味公が入手されたものであつた。それ故に細川井戸と稱はれるのである。高さ三寸一分、徑五寸六七分。

彦齋は手結浦に来て、細川家の御茶道の氣質があらはれた。藩祖の御愛用になつた名器が、この山陰の御藏におさまつてゐるのかと思ふと、細川井戸でお點茶してみたくなるのであつた。

『それも茶盃のこととしてな』
『えつ。茶盃……』

『左様。井戸茶盃のことでした』

河田はあまりの返答に、きよんととして彦齋の眼の色をうかがつた。

李朝の初めから中期頃まで、慶尚南道あたりで焼かれた井戸茶盃は、室町末期頃から將來され、利休の佗茶の主要な役割を果したのであつた。何故、井戸といふのか、この名稱の考證は知らない。けれども茶を嗜むほどの人は、井戸茶盃を以て最上のものとしてゐるのである。彦齋も如何にも自分の返答が突飛なのに氣がついて、遂に苦笑して仕舞つた。

『あなたも呑氣ぢやねえ』

河田は感心したのか、あきれたのか、彦齋と井戸茶盃に就て話し合はうとはしなかつた。その間も仲間が出たり入つたりして、やがて夜になると、追手の警戒に不寝番を置いて、浅い眠りに落ちて行つた。白々とした夜明け、一艘の舟に乗り込んだ一行は、ひそかに手結浦を解纜した。彼等は昂然と眉をあげて長門の國を望んだ。

續

編輯後記

◎約六十日間、胸部疾患のため、大阪の病院に入院、玉井一郎の診断にて加療中の保田與重郎先生は、このほど治療退院された。あと一二月安静療法をつゞけられる由である。はじめ一ヶ月ほどの入院の見込みであつたが、醫師大事をとつて今日に至つた。一日も早い御全快をお祈りする次第である。

◎同じく高知の吉村淑甫氏、年來胸を病んで臥床中であるが、昨今の御病状いかゞであらうか。この夏が大切な時期と思つてゐると、先般のお便りにあつたが、近來の猛暑にお案じ申しあげてゐる。涼風來とともに、うれしいおしらせに接したいものである。

◎猛暑と云へば、文字どほりうだるやうな京のあつさを物ともせず、八月十五、六日、棟方志功先生人落せられた。小生残念ながら

所用あつてお迎へ出来なかつたが、きげば十六日夕べ大文字の精霊送り火を見物され、宴上「人斬り彦齋必殺の構へ」を演じて、並み居る猛者連を驚倒せしめられ、愈々益々當るべからざる勢ひであつたと云ふ。迅雷一過、今ごろはいつことで、かの生の叫びをあげてゐられることであらうか。

◎棟方畫伯が、「東洋の哀愁」と形容された「人斬り彦齋」は、霽然たる反響のなかに、今先生の麗筆いよいよ冴えて、次々と續稿されてゐる。先人の志の最深所は、かうしたありがたい機縁の堆積によつて、生々とうけつがれてゆく。

戦後衰滅した日本の小説はこゝに失はれて久しかつた経世の血を恢復したのだ。文人の述志が、あまねく目にふれた人の心に生き、その行爲に變貌し、その胸底に火を分つと云ふ、文章の眞の機能を確認せしめたのである。

◎三重縣四日市の土木工事出張中の奥西幸は、小閑を盗んでとさ／＼歸洛し、雑誌發行をたすけ、八面六臂の活躍をつゞけてゐる。

柳井三千比呂は七月東京に遊學、秋には作州に歸る豫定である。ぼつ／＼舊知をたづね、詩稿を繕いてゐる。連作の詩「華嚴章」をかきついでゐる。

栢木喜一は農事につとめるかはら、大和の祭禮について筆をとりはじめた。新秋また、各地の友人を誘つて大和紀行をもくろんでゐる。

奥西保は先日盜難に遭つて、原稿を失つたが、數年來の構想をまとめるべく、目下崇神天皇紀の研究にうちこんで元氣である。

知念榮喜氏は沖繩の産、慷慨の人、若き流球人の悲志をかみしめつ、その心を一篇の小説に結晶したいと努めてゐる、と最近お便りがあつた。

◎讀者諸賢より、暑中御見舞に接しましたが、多忙にまぎれて失禮を重ねてゐる向多く、紙上にあつく御禮申し上げ、時候柄皆様御自愛をお祈りいたします。
(高島)

- 祖國社同人
- 栢木喜一
 - 奥西保
 - 玉井一郎
 - 奥西幸
 - 高鳥賢
 - 柳井三千比呂
 - 大井靖雄
 - 北原利子

「祖國」第三卷 九月號

定料價 五拾圓

昭和二十六年八月二十五日印刷
昭和二十六年九月一日發行

編輯兼發行人 玉井一郎

京都市下京区松原通り
油小路上ル

印刷所 松崎印刷株式會社
印刷人 松崎秀雄

京都府上京区新町通
さばらぎ町下ル

發行所 まさき會社
電話上三六九一
振替京都七〇一七

祖國

七 月 號



昭和二十七年六月二十五日印刷納本
昭和二十七年七月一日發行
昭和二十五年一月十二日第三種郵便物認可

昭和二十六年八月二十五日印刷納本
昭和二十六年九月一日發行
昭和二十五年一月十二日第三種郵便物認可

祖 國 九 月 號 第 三 卷 第 九 號

定價 五十圓

新 刊

滿 鮮 史 研 究 古 代 篇

文学博士 池内宏
東京大学名誉教授
学士院会員

池 内 宏 著

A五版 五七〇頁
本コース 裝禎
函入特製本

戦後の混乱漸く鎮まつた時、新しく眞の学問の價値が再認され出した。明治大正昭和を通じての我国諸学の中、自信を以て世界に推薦し得る一は東洋学であり、就中満洲朝鮮の歴史はその地の所在の故に我国学界の独壇場の観があつた。東京大学文学部教授学士院会員池内宏博士はこの満洲朝鮮の歴史に關しては数十年間、孜々として研究を進められ後進を導き敍上の趨勢を肇められるとともに、老成なほ筆を断たすその成果をこゝに示された。まことに不世出の才能を明かにされるとともに、また学の眞のありかたを自ら啓示してゐられるといつて謬りないであらう。史学といはずありとあらゆる学問に勤むる大方の人士に推薦する所以である。

定價 一、二〇〇円
送料 四〇円
京都市上京区新町通樺木町下ル

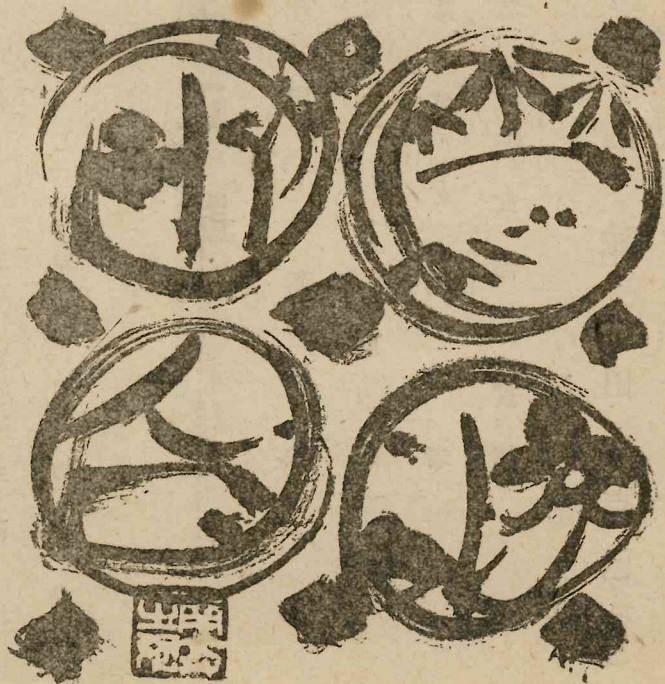
祖 國 社 刊

祖

國

(第四卷第六號)

昭和二十七年七月號



祖 國 七月號 第四卷 (通十二卷)

表紙・カット 棟方志功

祖 國 正 論 (四)

聖 旨 と 新 憲 法

日 本 と 東 京

暮 穴 を 掘 る 者

植 民 地 文 化 の 實 相

宣 傳 中 隊 田中克己 (四)

野 水 集 清水比庵 (三)

春 の 旅 知念榮喜 (三)

國家考察のための序説 (二)

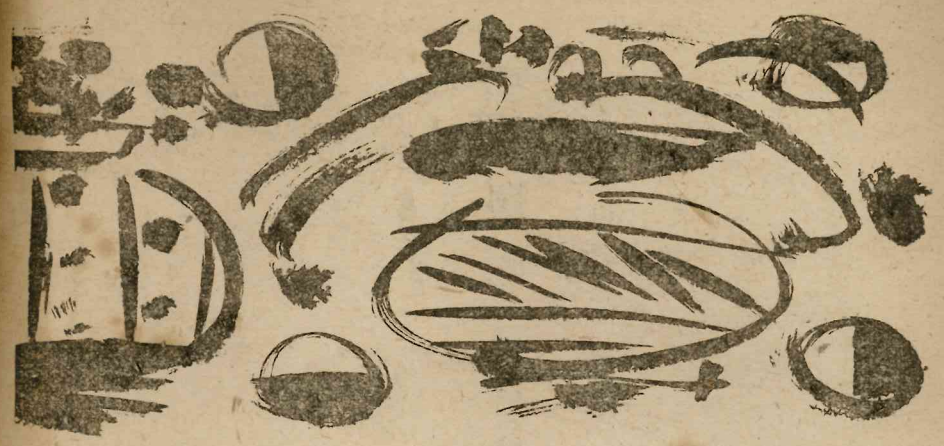
..... 近藤達夫 (三)

テラ・インコグニタ

..... 櫻岡孝治 (五)
林富士馬

吉野朝忠臣玉井西阿傳

..... 玉井榮治郎 (三)



我々の自身の負目として勇敢に背負つて立たねばならず、この不幸を不幸と思はず却つて次代を雄飛するための精神のたゝかひとして貫き突破せねばならない。それは、文化といふものの眞の姿であり、文化を思ふものの唯一絶対の生き方であるからだ。

顧みるに、明治以降の日本は西歐の文明機構の侵攻の波に洗はれ續けて来たのであつて、このことはアジア全般の運命に通ずる不幸といはねばならない。アジアは自らの喉嚨を世界列強の帝國主義的植民地争奪戦に對する警鐘として打ち鳴らさねばならなかつたのである。然しアジアの民族意識はかゝる脅威に對する屈服の拒否といふことにのみ發したものでなかつた。その本質は絶対優越の自覺にこそあれ斷じて比較文明史の判斷に基づいてのみあつたものではなかつた。幕末の日本は寄せ来る列國の正體を誤ることなく正確に見抜いてゐたのである。アジアは彼等の面前に於て既に自らを發見してゐたのである。

それは誇り高い傳説と豊かな人情の織り成す何千年の歴史として引き繼がれて来た精神の殿堂であつた。黒船の威力と舶來品の魅力といふもの以外に一體何ものがアジアにやつて来たといふのであらうか。然もアジアは黒船の威力を「大平の夢おどろかす蒸氣船……」と見るほどの餘裕を有つてゐたのであり、舶來品は贅澤品としてのみアジアの市場價值を興へられるに過ぎなかつたのである。文明を無用なる贅澤品とする我がアジアの生活の誇りこそ歐米文明に對する最大の抵抗であつた。然し世は必ずしも大平無事であつたわけではない。日本に於ては徳川三百年の封建を打破すべく國論は尊皇倒幕の大勢にあつたのであり、インドは反英抗爭に熾烈なる民族意識を以つて立ちあがつてゐたのであつた。さうしてこの時代の人たちは現代人よりも

はるかに文化人であり、堂々たる精神と高い見識を備へてゐたのである。徳川幕府の役人の中にも、ベルリの持つて来た舶來石鹼を一應鍋に入れて煮てみる程に實驗的であり慎重な心の動きを示し得た人があつた。これは笑へない問題を現代に投じてゐると思ふのである。現代は何と多くの舶來品を鷄呑みにしてゐることであらう。文明開化八十年の歴史は一體何の意味があつたのであらうか。隣國支那の現狀を見れば、彼の偉大なる漢民族の雄姿は既に見出すことができなればかりか、舶來のイデオロギイを以つて誇るべき彼等の傳統と國土を犯すの罪を敢へてしてゐることを悲しまないではゐられない。しかし、我が日本に於て再び全アジアを一つに結び合せ世界を壓する歴史の到來が約束せられてゐるのではないか。今はこのことを志として民族の悲願をこの一點に凝固して立つことが必要である。それこそ全アジアの運命であり、全アジアの運命の遂行者である我が日本の偉大なる使命であるからだ。

我が日本國の眞髓について悟りたいと思ふならば我が國史とその古典について深く學ぶところがなければならぬ。それは我々の日常の生活であることを要するのである。斯くして國家とは人間の作るものといふおぞましき觀念をきれいさつぱりと洗ひ落さねばならない。我が國はいはゆる國家といふものにするにすこしも似てゐない。國家といふさへも拒否するべきであらう。人力の如何ともし得ない神の創造に心を正して敬虔に深く思ふべきであらう。我が國は唯一絶対の國體に於て神と人との未分の高さを事實に於て保有するものである。然してこの絶対の事實は、民族の直觀に於て啓示の如く現はれる國史の精神であり、この精神の一點に集中する所、そこに我々は神を見るであらう。

(完)



宣傳中隊

櫻

田中克己

昭和十七年三月十八日、私はシンガポールのナツシム路の米人ビルグラムの舊邸にゐる馬來派遣軍司令部附宣傳中隊の報道小隊に配屬された。一月二十日に徵用を受けて大阪に入隊以來、おほかた二ヶ月目である。

小隊長は立教大學出の若い松井少尉、その補佐をしてゐるのは神戸商大出の三十近い橋本といふ曹長、その外に召集まへは新聞記者だつたといふ兵長、上等兵、二等兵が一人づゝゐるのが、なるほど報道小隊らしい。も一人、速記の出来る若い軍屬がゐて、これがラヂオで聞えて来るニュースを拾つてゐる。その外には雜役をする兵隊が二三名と小隊長の當番とである。こゝへ私たち徵用組が八人加はつた。朝日の記者、毎日の記者、讀賣の記者、大陸新報といふ新聞社にゐた平野といふ男を加へて記者が四人、外に印刷をやつてゐたのが二人、漫畫家の吉野弓亮と私だけは他の作家や漫畫家と別れてこゝに入れられたのである。

この日は、松井少尉に挨拶したあと、兵隊たちから箒を借りて私たちの室にあてられた、階上の廣間を掃除し、その一角にマットを敷きならべて寢室としただけで、日夕點呼に出て、すんだあと、兵隊たちを橋本曹長から紹介してもらひ、こちらでも自己紹介をすると暮れてしまつた。

一緒に寝ることになつた軍屬の中で、私と一番親しいのは、平野である。毎日

の記者であつた長澤は元陸軍中尉といふので、一ヶ月近い大阪での遊機中も、一月かゝつた輸送船の中でも、副官として輸送隊長のそばにつききりだつたので、殆ど話をしたことがない。朝日の記者だつた廣田はまだ若く、入社するとすぐ應召して中尉になつて歸つて来たところを徵用になつたので、まだ軍人のやうな感じのする、無口な少しも記者らしくない。讀賣の永田も無口、漫画家の吉野も無口、そのうへ輸送船の中で、私たちが將校待遇になつてゐたのに、下士官待遇とかで、ちがふところにゐたから、これも殆ど話をしてゐない。

平野とは、大阪の宿舍も同じで、たゞ／＼話しあつてゐる。船中でも同じ處である。二ヶ月のつきあひで私には大方わかつたつもりであつた。彼みづからの紹介するところでは、幕末の志士平野國臣の子孫で、東京の私立大學を出て、すぐ大陸新報に入り、その社長に氣に入られた。南京へは陥落の直後にゆき、書店にあつた岩波文庫を全部運んで来て、某大官の舊邸に入り、そのころの生活が今でもなつかしい。嘉定も杭州も紹興もみな知つてゐる。今度、徵用になつて来たとき、有金を全部かゝゝあに渡して来たので、現在囊中はこれだけだと、出して見せたのが一錢銅貨であつたので船中、自他ともに一錢達磨のあだ名で呼ばれてゐた。

實際、金がなかつた證據に、大阪の宿舍で夜中に臺所で大きな聲がするので、私が行つて見ると賄の親爺と平野の喧嘩だつたが、話をきいて見ると、人が寝静まつてから臺所へ酒をぬすみに入つてゐるのを見つけたのだといふ。これがはじめてでなく、前々からなるので賄の方では内々氣をつけてゐたところだつたといふ。私も赤面しながら、こゝへ来たのはこれがはじめてで、水を飲みに来たのを、難癖つけられたといひ張る平野の方をもなだめ、監督の下士官にも内緒

44

にしてくるやう賄にたのんで引取つたことがある。平野のその時の口ぶりが私にも信用出来なかつたからである。
そんなわけで私の方では平野にはあまり警戒もせず、どちらかといへば、強めてかゝつて、腹に何も無いあわて者くらゐに思つてゐる。そこへ彼を馬鹿にする理由が報道小隊へ入つてからもう一つふえた。彼のいままでの失敗談のいくつかを更につけ加へるなら、いつも何か政治的な動き方をして、それが成功しないといふ例を私は度々見てゐる。大阪で待機中も、彼はよく部屋々々をたづねまはつた。ひまつぶしのやうだが、話をきいてゐるとさうでなく、いままでの閱歷をことさらに述べ立てて、相手の注意を喚起しようとしてゐるのではないかと思へる。乗船してからはとりわけこの傾向が顯著になつて、彼はまづ將校室の他の將校にむやみに話しにゆく。その内容はとりどりが、いつも話は

「われ／＼は大東亞共榮圏の確立のために」

といふ結論である。私などにはそれがかたはら痛くてたまらないが、これにはよい相棒があつた。

二

私が徵用になつたのは一月十四日のことである。東京府知事からの速達で、珍らしいものが来たと思つて、あけて見ると、徵用令第何條により、「來る十六日東京日比谷の赤十字支社に出頭すべし」といふのであつた。その日ゆくと、百名位ゐたらうか、役人らしいのがあつて、厚生省何々課長と名乗り

「只今より指名點呼いたします。敬稱を略します」

といつて呼んでゆく。私は中程だつたが、私より先に田畔忠彦といふのがあつて、これが詩人の北川冬彦である。それにつゞいて長島文藏といふのがある。文藝評論家だと思つてきいてゐる。まもなく私、あとまた知らない名がつゞいて清水幾太郎、ずつとあとに三木清といふのがある。はゝあとと思ひながら、返事をした方へも向いて見ない。玉井是則といふのがある。火野葦平の本名である。これで點呼が終はると、役人は

「誠に御苦勞ですが、皆さまはこの度徵用令状をお受けになりました。たゞ今から令状をおわたししますから、受領印を押していただきます」

といふ。この時、長島は課長のところへ行つては

「私は東京帝國大學の講師をしてゐるものですから、大學の方で許してもらへなければ、徵用令状を受取るわけには参りません」といふ。釋やかないひ方だが、たゞ一人の異議申立てなので、皆きいてゐる。役人は

「さういふことを申されても手前どもの方はたゞ取次をしてゐるだけ、何とも申しかねます。一應お受取りいたゞいて、大學の方で相談していただくわけには参りませうか」

と、これも至極おだやかである。長島は何といふかと思つたら

「長島に氣をつけなさい」
とであつた。どういふ意味か、くはしく問ひたゞすひまもなく別れてしまつたが、私も十分、氣をつけてみようと思つてゐる。
しかし私は三十歳を出たばかりの若僧である。仕事は歴史と詩とで、それ以外は何もしらない。氣をつけろといはれて

「はい」

といつて引下つた。大體、私の學生のころ、彼は大學の助手をしてゐたので、顔は知らないでもない。小林秀雄が講演に来たとき、司會者を勤めたのおぼえてゐる。それだけのこともまあ、他の者よりは親しい感じがするのは當然であらう。

しかも令狀の指定してある通り、大阪城の紀州御殿といふのに集つ

45

で見ると、長島は大學でも異議がなかつたのか、ちやんと来てゐて、しかも隊わけの時には私と同じとなつた。これが馬來班だといふことは乗船まで秘密だつたが、清水幾太郎も来てゐて、班がちがひ同じく乗船後ビルマ班とわかつた。

こゝまではよかつたが、どうもこの先輩が田畔先輩とちがつて、私と合はない。私は好き嫌ひの強い男である。しかし長島に限つて嫌つたおぼえはないのだが、何か向ふの方で先輩らしくしない。大體、東京をたがけの送別會で同じく徵用になつた者の名をあげると、長島のことをみな

「あれは馬鹿だ」

といふ。それが利いてゐるのかもしれないが、學校の先輩といふよりは、好きな文學道の先輩としての氣持が起らない。その上、大阪で待機中に、東京から來た某氏が、私たちの隊まで寄つてくれて、別れぎ

の一言は

「長島に氣をつけなさい」

とであつた。どういふ意味か、くはしく問ひたゞすひまもなく別れてしまつたが、私も十分、氣をつけてみようと思つてゐる。

しかし私は三十歳を出たばかりの若僧である。仕事は歴史と詩とで、それ以外は何もしらない。氣をつけろといはれて

「はい」

神保光太郎

分はいつてから、主人がいつた。

「なあ、お前たちは幸せものだ。このおれを見る、學生時代の左翼運動が祟つて、いま青年團の團長をしたり、町會長をしたり、いろいろ評判をとりかへさうとしてゐるが、一向信用がない。それに比べるとお前たちは今後かへつて來たら、向ふで働いて來たといふので誰も指のさしやうがなくなる。羨ましいぞ。この氣持は——以外ほみなわかるだらう」

としみじみといつた。とりのけ者として名をあげられたのは私である。この主人のことはばに對して長島はうなづいて

「さうだとも。おれなどは今度徴用になる前でも奥羽地方の青年團の組織に行つてたんだか、どうも警戒されていけなかつた。ほんとに今度歸つたら随分その點で樂になると思ふ」

といふ。私はまた黙つて聞いてゐて、送る者も送られる者も、戦地へゆくといふことより、歸つて來てからのことばかり問題にしてゐるのは、どうしたわけだらうと不審がつてゐた。まだ比島ではバターン半島で作戦中、あとでわかつた行先のシンガポールは陥落になん／＼としてゐたが、新聞の傳へるところでは、英軍の抵抗が激しく、二三週間は激戦がつゞくだらうと報じてゐたのである。

もともと左翼の經驗をもつともたないでそんなちがひのあることなぞもとより私の知つたことではないが、私の知つてゐる長島は自由主義者である。自由主義者がそんなことで弱音を吐くなぞ私の想像しなかつたことであるし、戦地から歸還後、これを箔につけるつもりといふところで、私は大分考へさ／＼れた。私は徴用の令状をもらつた翌日、すぐ體重をはかつて見た。四十キロかつきり、わかり易くいふと十貫四百匁である。兵隊に行つたこともなければ、南方は十年まへに

のを聞くと、

「敵潜水艦三隻五島列島と男女群島の間にあり、一隻は撃沈したが他の二隻は目下搜索中」

といふのである。折柄玄海灘特有のピッチングとローリングで船酔ひ氣味の一行は一層顔色が蒼くなつた。

しかもその夜零時すぎ、沈没五分前、全員上甲板の合圖と教はつたばかりの警報がビッピッピーと三回鳴つた。私は早速くらがりて救命具をとり上げ、帯剣、さて隣に寝てゐる進藤はと見ると、宵から船酔ひの彼はじつとしたまゝである。

「おい早くしろ」

といふと、彼は私の方を向いて

「起き上れないんだ、僕はこゝで死ぬよ」

といふ。今でも思ひ出すと恥しいが、私は五分の時間を氣にしなから、これだけきくと

「さうか、そいぢやおれだけ行くよ」

と聲をかけたまゝ、他人の靴か自分のかたしかめもしないながら、夕方ぬいだ邊に手をやつて、手にふれたのを穿くと甲板に出た。二月の空はまだ寒く、星がまたたいてゐる。兵たちも上つて來たがみな黙つてゐる。そこへ聞きおぼえのある聲をはずませて

「船はもう沈んでますか」

といつて上つて來たのは平野であつた。答へはあつたかどうか、笑ふ者もみなかつたが、私の平野輕蔑はこれで一層強まつた。

しかし輕蔑されるのは平野だらうか。私は進藤とは永い間、詩の友だちである。同じ雑誌の編輯をして來て、丁度、徴用令状をもらつた翌日、その雑誌の編輯會といふことだつたので、これ幸ひと、新

臺灣へ行つたことがあるきりで、新聞や文學の傳へる瘴煙靈雨には全く自信がない。早速高島博士の「熱帯生活の常識」といふのを買つてよみ、もう町の藥屋では見つからなくなつてゐる塩酸キニーネを、從弟にたのんで一罐手に入れたきり、病氣はともかく戦死も覺悟してゐる。かへつてからの悪名や肩書のことなど、ゆめにも考へてゐない。大分ちがふなと思ふと同時に、こいつは信用出來ないと思ふ。

さて乗船すると、狭い棧敷のやうなところが將校用の室で、食事も運んでもらへる。他の徴用の連中が下士官兵と同じく、棚をしきられて飯上げをしてゐるのと大分ちがふ。たゞし、この連中も兵よりは優遇されてゐる證據には、下士官兵が除ごになつて、下部戦艦に入れられてゐるのに對し、將校と同じく甲板に二等近いところに入れられてゐるのである。この上部船室待遇のありがたさは、下關を出帆したその夜うら書きされた。

大體、乗船してすぐ渡されたのが、救命具一式で、そのつけ方もおそはる。かく／＼の信號があればこれを着けて、かくかくの信號があれば沈没まぢかいから海中に、とび込む。泳げない者も着けてあれば絶對沈まないし、敷時間もすれば驅逐艦なり、附近航行中の船舶が救助に來るからといふ説明をきゝながら、徴用の連中の顔色が變つたのもむりはないだらう。船員にきくと開戦まもなく敵潜水艦が現はれ、とりわけ玄海灘にはうよ／＼してゐて、被害も多い。われ／＼の出發がおくれたのも驅逐作戦の一段落を待つてゐたので、軍が徴用者を大切に考へてゐることもこれでわかるだらう云々、これは長島が例によつて聲をひそめて仕入れて來た情報なるものである。戦死覺悟の私も暗い早春の海を眺めて、寒さうだなど感じざるを得なかつた。

ところが出船すく、日夕の點呼を兵たちがやつたあと、會報といふ宿の喫茶店へゆくと、堀辰雄、津村信夫の二編輯同人のほか進藤は來てゐて、私より先に

「僕は徴用になつちやつてね」

といふ。

「そうか、僕もなんだ」

といつて、どうして令状わたしの時に氣がつかなかつたのかといふと、彼は現住所の所在縣廳で令状をわたされたのだといふ。まあ／＼仲好しが二人でゆくのだからと堀さんいひ、お互ひに安心し、大阪でも二人一室といふことになると思つて同室にしてみらふ。まもなく出發がおくれさうだとなると、西下して來た進藤夫人にも紹介され、出發の前には夫のことをたのみますといふことばを聞いてゐる。

「さうか、そいぢやおれだけ行くよ」

ぢやなかつたのだと氣がつく——まもなくどこからか、さつきの信號は信號機を修繕してゐる中に鳴り出したのだと傳はつて來て、何といふことなしにまた皆、船室へ歸つた——と私は進藤の顔を見るのもつらいくらゐ恥かしくて困つた。これからは二度とあんなことをしなからなと、私はみなから様子をきゝながら

「こゝで死ぬと思つたがなあ」

と呟いてゐるだけの彼に對し、心中であやまるだけだつた。

この事件のあと、われ／＼の乗船みどり丸といふ時速七ノットのボロ船は進路を變へて黄海の海岸寄りに走り、臺灣の高雄へつくまで十日かゝつた。支那海でも陸つたに迂回してゐたことは、沿岸警備に置かれてある船の線よりも西を走つてゐることでもわかつた。

この頃になると、海はすつかり穏やかになり、氣温もすつと高くなる。長島も退屈たまらぬやうな顔をして、甲板を歩きまはつてゐた

が、いゝ仕事を付けた。平野と相棒になつて船内ニュースの印刷にとりかゝつたのである。船長室でラヂオを聞き、そのニュースを速記して自ら鐵筆をふるひ、隣寫版をすらせる。それを配つてまはり、兵室や甲板で、得意の甲高い聲で「大本營發表……」とよむのは平野である。田畔や清水や進藤や私などの怠けぶりを何だかあてこすつてゐるやうにも見えるし、反面、帝大講師や文藝評論家ときいてゐるが、長島は案外、實務にも向くのだな、などと私は感心もした。

たゞ不快なのは夜になつての將校室での談話である。平野と長島とがリードして、馬來清後の計畫を立てる。大東亞共榮圈建設のためといふのが、いつもその理論の奥つけになる。「萬邦その處を得しむる」だの「英米帝國主義の重壓下にあへいでの南方諸民族」だの、「八紘一宇の御精神に則り」とかいふ紋切口上を、平野のカン高い聲と長島の太い聲との二重奏で毎日毎晩やられたのでは、艱難を覺悟で來た私もあまりいゝ氣持でない。おとなしく聞いてゐる進藤などを放つておいて、私は晝も夜も甲板へ出てゆく。

そこには船内で下士官以下の待遇を受けることになつた連中が、狭苦し二段部屋に耐へられなくなつていつも來てゐる。

三

この人たちは將校室の連中とちがつておとなしい。空まはりの共存共榮理論をがなり立てないで、だまつて何か考へてゐる様子である。だん／＼氣がつくと、馬來語の勉強をしてゐるのがある。私も仲間にに入れてもらふ。ところで聞いて見ると、馬來語をはじめといふのは、私だけである。馬來にあたといふのは、臺灣銀行のシンガポール

しもどした。

高雄に着いた。外出を許されてバナナや煙草をもつて歸つて來るのは、將校を主とする軍人だけである。私は舷側からそれを羨しげに眺めてゐるが仕方がない。夕方まへには「みどり丸」は波止場を離れて沖合に泊地をかへる。右手はるかに小琉球嶼が見える。左手の海岸にきり立つてゐるのは、西洋人がエーブ・ヒルと呼ぶ壽山、その右手には高雄の市街の灯がちら／＼しだし、ずつと向ふには脊梁山脈の峰々が夕日に照らされてゐる。私も詩が作りたくなつた。

この日 われ 海の大杯より

潮風のあたらしきを飲みほしぬ

かくて半日

ゆふべとなれば 岸の家々 灯をともし

晝の壯快はすでになし

ゆふべの哀愁が吾にヴェールをかけたれば

わが脳髓に妻と吾子と

明るき灯のもと 飯はみし

日常茶飯のかのうたげ

天上のうたげのごとく浮び出つ

傀儡大山の上はるか

積亂雲に夕映えのてり

高雄港外のむし暑き

ふるさとならば 七月と

いはまほしかる夕のひとまき

口ずさんでゐると、夕飯をおへた連中が上つて來て、長島も私のよこに立つた。同じく高雄の町を眺めながら、なんかフランス語の歌をう

支店の行員だつたのが、一人だけで、あとは蘭印で、數年ないし十數年ゐたのが、追放になつて内地へ歸つてゐたのが徴用でまたゆくのである。通譯に使はれるにちがひないといふので、馬來語の勉強をしてゐるといふ。歸つて一年そこ／＼ですつかり忘れてしまひましたといふ。覺えるに易く、忘れることも同じく早い語だといふ。パタビヤ、ストラバヤなど、この人たちがもゝた町の風景もなつかしげに語られる。それを聞いてゐる私のよこを「船中ニュース」を編輯するために通つた長島はデロツと見て注意した。

「救命具をつけてないぢやないか」

ふしぎさうな顔をする私に、彼は云つた

「輸送指揮官の命令で救命具は身邊から離すな、といふのが出てるぢやないか」

かういふと彼はヌタ／＼と行つてしまつた。東支那海も温州の東方とかで、水はきれいに波は穏やかだし、この日中に、敵潜水艦など出て來る筈はないと安心し切つてゐる、不用意な私に、萬一の注意をしてくれるのはありがたいが、「命令だ」といふ調子が、共榮圈論議のとくとも同じくちつとも自由主義者らしくないのが、肝にさはつた。もつとも潜水艦に關してはこの間にも一回だけ事件が起つた。船艦に對潜監視哨といふのがあつて、野砲を一門備付けて當時海上を見張つてゐる。私もその邊にゐると、兵隊が一人そこへ寄つて來て

「監視哨、あすこに潜水艦が見える」

といふ。哨兵はもとより私たちも「どれ／＼」とその邊を一心に見つめるが何も見えない。

「それそこぢやないか、そこだ／＼」

狂氣じみて叫ぶ兵隊を私たちは氣の毒さうな顔をして到頭、船室へ押

たつてゐる。突然、私の方を向いて尋ねた。

「君はかゝあと一週何回ぐらゐる寝るんだ」

馬鹿にした質問だが、私の詩と似たり通つたりのホームシックを彼も感じてゐるのだ。それをかういふ云ひ方で表はすのは、高等學校の學生のシニシズムを経験したものには、珍らしいことではない。私もすら／＼と答へる。

「さうだな、二回ぐらゐるかな」

長島はちよつと考へてからまじめなかほをして私をたしなめた。

「そりや多すぎるぞ」

多すぎるか少なすぎるかは、こつちの知つたことではない。私の出たらめな答に叱りつけた彼のまじめな顔付は今でも忘れられないからしるす。

夕映えの時間はほんの數刻で、星がまた／＼き出すと、長島とは別れて、船首へ行つてみる。今まで氣がつかなかつたが、もう私の船は北回歸線を過ぎてゐるのである。ひよつとしたら見えるのぢやないか。大犬星の首星シリウスその下のデルタ、エータ、エプシロンこの三つの星の角の二等分線——ある、私は歡聲をあげた。中國人のいはゆる南極老人星、アルゴ座の首星カノーパスを私はたうとう見ることが得たのである。子供のやうに喜ぶ私に、南十字星はどこに見えるかと尋ねる者がある。これは夏の星なので、今夜もずつとおそくなつてからでないといふと見られないことを説明して私の天文学の講義は終りを告げた。

四

高雄を出たのが二月二十四日の夜ふけ、三月二日になると右手に山

々が見えて来た。安南の山々ださうである。三日サンジャック港外假泊。大變な暑さである。澤山の艦船が碇泊してある。三日間こゝで待ったあと、「みどり丸」はサイゴン河を遡つた。やがて尖塔や大建物が見え出してあれがサイゴンだと教はるころ河のまん中で船はとまる。輸送指揮官は副官代理の長澤とランチに乗つて上陸してしまつた。また難詰か。それにタバコがもう切れてゐる。私はふと氣がついて長島のところへ行つた。

「僕、内地を出るときに饑別で佛印の金を少しもつてゐるので、買物にゆかうと思ふんだが、あんたも行かない」

「おれも出たいのは山々だが許可がないのでね」

「行く先はあるの」

「朝日新聞の支局へ行きたいんだ」

「行きませうよ」

人の悪い話だが、長島があないとフランス語で差支へる。私はむりやりに長島にも服装をとゝのへさせて、着剣させ、タラップのところに立つてゐる衛兵におじぎをすると道をあけてくれた。

向ふの安南人の漕ぐ小舟が見える。手でまねくがわからない様子である。

「小舟！」

呼ぶとやつて来る。何だ、十年まへのアテネ・フランスが役立つぢやないか。私と長島とはこれに乗り十仙を支拂ふと、のこり三十仙しかない。まよよ、歩き出すと衛兵所がある。こゝもお辭儀をして通りぬける。市の方へ行つてみよう、二人で相談して右手の方へゆく。紅い花や紫色の花が山ほど咲いてゐて、バナナやパイアを賣る店があるが買ふことも出来ない。だん／＼ゆくと市中らしくなる。朝日新聞を

長島が聞いてまはるが一向わからない。その中に長島が私を呼びとめる。

「も少しゆつくり歩いてくれ。おれはもう死にさうだ」

瘦せつづちの私と違つて、肥満した彼にはこの道の暑さは耐へがたいものらしい。私も氣がついてゆつくり歩く。正金銀行の支店が見つかる。二人で飛びこんできくと、朝日の支局のありかほどこそこで、いま丁度いいところがあるから自動車にのせてあげませうといふ。これに乗つて入口で下ろされ、二階へ上つてゆくと、もう長島まかせである。長島の名を知らない新聞記者はもくりにちがひないからである。しかし向ふにゐる男に見覚えがあるぞと見ると向ふも氣がついて聲をかけた。

「どうしてこゝへ来た」

「やつぱり福田だつたか。お前こそこゝにゐたのか」

高等學校以來十年ほど會はないが噂はきいてゐる。

「おれは徴用になつてね。船の中でタバコは切れるし、困つて内緒で出て来た」

「いますぐ仕事がつむから待つてくれ」

福田はタバコを一箱はうり出すとベンを取上げ、それがすむと、私から長島を紹介され、

「御飯でも食べませう」

と二人を自動車でつれ出し、バスケット料理を食はしてくれたあと、長島と私のたのみをきいて五十ピアストルづゝ用立てしてくれた。後でわかつたことながらインフレを防ぐため内地の紙幣の兌換がなか／＼許されないで、この時、借りた金はもちろん貰ひ切りである。

これで安心だし、一應船へかへると、翌日五日間こゝに碇泊するの

で、上陸は許す、たゞし佛印の金の兌換は十五ピアストルだけといふ條件がつく。また長島と一應組になつて出るが、彼のフランス語より私の方が役立つことがわかるともう組の必要もない。といふのは大學の先生だけあつて、彼は他人の見てゐるところでは大事をとるのである。麥酒四杯を四人で註文するといふやうな場合でも彼は一生けん命考へてゐる。その間に、私が

「四つ麥酒！」
と命ずると、ボーイは心得てもつて来る。數もちやんと合つてゐる。これが若さであらうか、私はこの中老の佛文教師をこんな點でも尊敬しないではまつた。

五

私と別れた長島は平野と組になつて總軍——南方派遣軍總司令部——へ係りの參謀に會ひに行つた。さうして

「今頃またこんなに軍屬を澤山よこすなど、大本營の氣がしれぬ。馬來でもビルマでも軍屬はありあまつてるし、殊に徴用の連中の役に立たないことは十分わかつてをる」

と叱られたと報告して
「馬來へ行つたら第一次徴用の役に立たない奴らを押しつけてしつかりやるんだぞ」
と一場の訓辭を行つた。

しかしこの時、總軍へ行かうといひ出したのは平野だつたのだらう、報道小隊で寝る場所が與へられ、私が舊主人の書物棚から、ローレンスの「智慧の七つの柱」をとり出して讀んでゐるところへ、やつ

て来て云つた。

「駄目だ、駄目だ。いま軍司令部へ行つて、林參謀に會つて来たが

駄目だ」

「やつぱり行つたのか」

「うん、先づ東大尉に司令部へ行かして呉れと云つたら、どんな用事だと云ひやがる。東條閣下から辻參謀へのことづかりがあるのだといふと、それを見せると云ひやがる。いや口づからのことづけですと云ひ直してねばつたら到頭ゆくことを許しやがつた。ところが行つてみると辻參謀はもうゐないんだ。代りに林參謀といふのに會つたが、これが何もわからない奴でね、木で鼻をくゝつたやうにあしらひやがつた」

「辻參謀つて誰だ。」

「支那派遣軍で知つとる偉い人だ」

「東條大將のことづけはどうした」

「そんなものあるものか。きかれたら閣下が參謀殿にしつかりやれと仰しやつてたと云へばすむのだ」

大變なはつたり家だと感心したが、そのはつたりが成功しなかつたことに、却つて安心を感じた私の方がまちがつてゐないと思ふ。

平野の參謀に會ひたがつた理由はほゞ想像がつく。報道小隊に編入後、私たちには何も仕事と與へられない。いや、日朝日夕の點呼に下士官兵とゝもに道はたに出て五ヶ條を奉唱し將校の點呼を受ける。夜は不寝番が當る。三日目からは炊事當番もついて玉葱を切らされ、肉を切らされる。兵たちに至るまで寢臺に寢てゐるのに、私たちは床の上に八人一蚊張である。平野はこのことをよくブツ／＼いつたが、仕事、インテリらしい仕事はまだ與へられないと云ふのが不平の最大

なものであつたので、早く記者らしい仕事をさしてくれと云ふつもりで行つたにちがひない。これが駄目だつたので、盛んに長島のところへ往來してゐる。

私は往來しない。大體、はじめての點呼の時に自由に往來出来る地域をきめられて、それがおほむねこの小隊内、すなはちビルグラム邸内に限られてゐるのを知つた上、この邸だけで十分に忙しいのである。通譯班に入れられた馬來語の上手な連中とはわかれ／＼だが、スラバヤで印刷をやつてゐた杉野君がこの小隊に一人だけ入つてゐて、私に馬來語を教へてくれる。書棚からみつけたマクスウェルの「馬來語入門」のはじめの「馬來語中の梵語要素」といふ箇所を譯したりしてゐると、晝食の時間になる。その間に當番も當る。午後はこの邸の門番をしてゐた男の家に行つて、馬來語の會話をやる。時々この男にパイアやバナナを買つて來てもらつて、會食をする。兵隊たちのひまな時をねらつて馬來の作戦中の話をきく。これで結構忙しいのである。

そのうち、長島、進藤は隊長のある本部にゐて、こゝへゆくと思はず庶務の東大尉に會ふことを覺悟しなければならぬ。東大尉のことは兵隊たちからも聞いてゐるが、うるさいのである。昔からうるさいことやうるさい人間にはなるべく觸れないやうにしてゐる。そんなわけで進藤には會ひたいが控へてゐる。一度だけゆくと、第一次徴用の作家井口氏と長島とはさまれて小さくなつてゐるのを見て、話も出來ないで歸つて來た。東大尉の變なことは、日夕點呼にやつて來て「軍屬の方たちに注意申上げる。服裝に注意。とりわけ戦闘帽をおみだにかぶらないやうに」と云つて、そこにある誰彼を指さしてかぶり直させてから、聲の調子

をかへ
「もつとも私のかぶり方も一寸あみだたといふことはお氣附きでせうが」
と云つて、アツケラカンとしてゐる私たちを置いて行つてしまつた。この説教のあとの反省は、教師や上官のあらはしてはいけぬものであることは、教師をした私がよく知つてゐるし、事實彼はほんにあみだにかぶつてゐたのである。はげしい戦闘のあとで、神經衰弱にかゝつてゐるのだらうと私は考へてゐた。

そのうるさい本部から、平野はある日かへつて來て私に耳打ちした。
「やつぱり長島をかつぐことにしたぜ」
「どうしてだ、何のためにかつぐんだ」
「あいつをかつがないと仕事が出来ない。」
かつぐといふことはどういふことか、やりたい仕事は何なのか、想像はつかないながら、反對せざるを得ない。

「あいつはつまらないからかつぐのはよせ」
私がかつぎり云ふと、平野は云つた。
「つまらないのはおれも知つてる。しかし外にゐないんだ。東大の講師——いやもう東大の教授といふことにしてゐるんだが、これより以上に兵隊をだます肩書は見つかりやしないぜ」

「また失敗するぜ。猿芝居みたいなのは止せ」
かういふやうにして私はやめた。失敗するにきまつてゐるんだ、ほうつときやいゝ。私は配給の「パイレット」をすひながら、またマクスウェルの「馬來語入門」を譯しつゞけた。(つゞく)

テラ・インコグニタ (承前)

たつた一つの基地もない未知の地方を旅行する時には、確かに食糧や水やガソリンや潤滑油が必要である。しかしそれと同時に、もう一つそれがなくては、他の一切の物の價值が無くなる或るものが必要である……

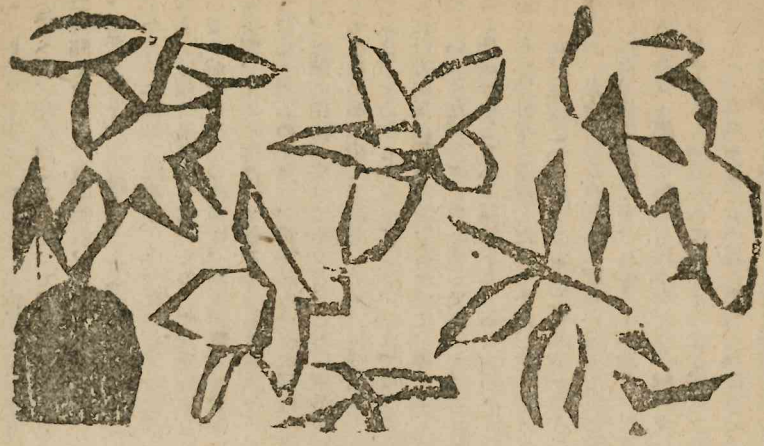
——スウェン・ヘディン「彷徨へる湖」

櫻岡孝治
林富土馬

於 ツラ・サルガン・ウイ

光緒二十五年十一月二十九日(西曆一八九九年十二月三十一日)

こゝはサヒブが冬營のために建てた村で、羅布人達は、ツラ、サルガン、ウイ(旦那の建てた家)と呼んで、こゝのことは、いまでは、三日行程の天山南路の宿驛、庫爾勒あたりから、羅布泊一帯にまで評判になつてゐるのです。たゞいま、サヒブは、イスラム、ベイとツルツ、ベイ、それにオルデクとクルパンの四人の従者、一頭の馬、七頭の駱駝、二匹の犬を連れて、沙漠のたゞなかに出掛けて行き、留守であります。世界で一番大



祖國

九 月 號



昭和二十七年八月二十五日印刷納本
昭和二十七年九月一日發行(毎月一回發行)
昭和二十七年一月十二日發行(毎月一回發行)
昭和二十五年一月十二日發行(毎月一回發行)
第三種郵便物認可

昭和二十七年六月二十五日印刷納本
昭和二十七年七月一日發行(毎月一回發行)
昭和二十五年一月十二日發行(毎月一回發行)
第三種郵便物認可

祖國 七月號 第四卷 第六號

定價 五拾圓

既 刊

祖國社刊 裝幀 棟方志功
絶對平和論

定 B 價 6
送料 價 一 二七〇圓
三〇圓

「獨立」の指導者の第一の資格は何ぞ
第二の資格は何ぞ
第三の資格は何ぞ
一言に云へば?

それは毅然たる自主の精神である。
自主の精神を支へ守る自主の思想である。
自主の思想を自ら表現しうる種々の能力である。
一言に云へば東洋の覺醒である。

保田與重郎著 裝幀 棟方志功

日本に祈る

送定 B 料價 6
二 二八九頁
三 〇〇圓

淺野 晃著 裝幀 棟方志功

石川啄木

送定 B 料價 6
一 一 三六九頁
三 〇〇圓

池内 宏著 本コース上製函入

滿鮮史研究

送定 A 料價 5
一 一 五七〇頁
四 〇〇圓

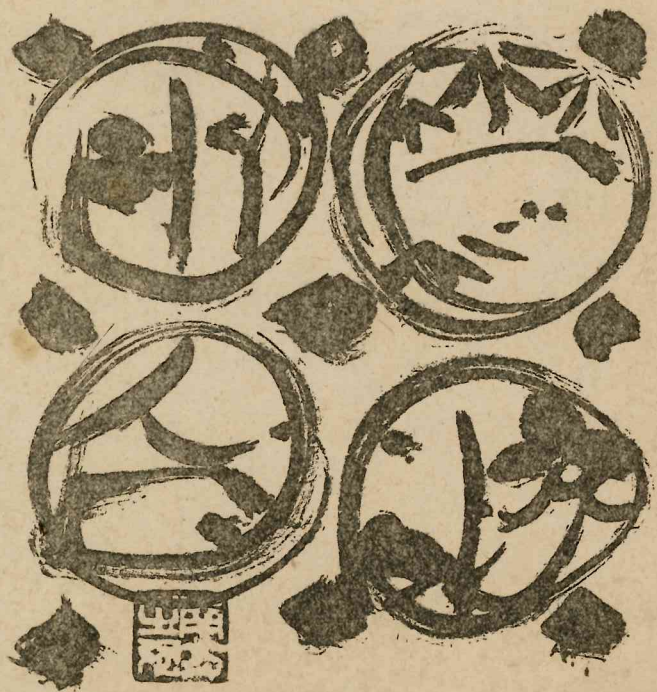
刊 社 國 祖

祖

國

(第四卷第八號)

昭和二十七年九月號



祖 國 九月號 第四卷 (通十四卷)

表紙・カット 棟 方 志 功

祖 國 正 論 (四)

人 間 の 智 慧

治 安 と 警 察

離 村 の 心 理

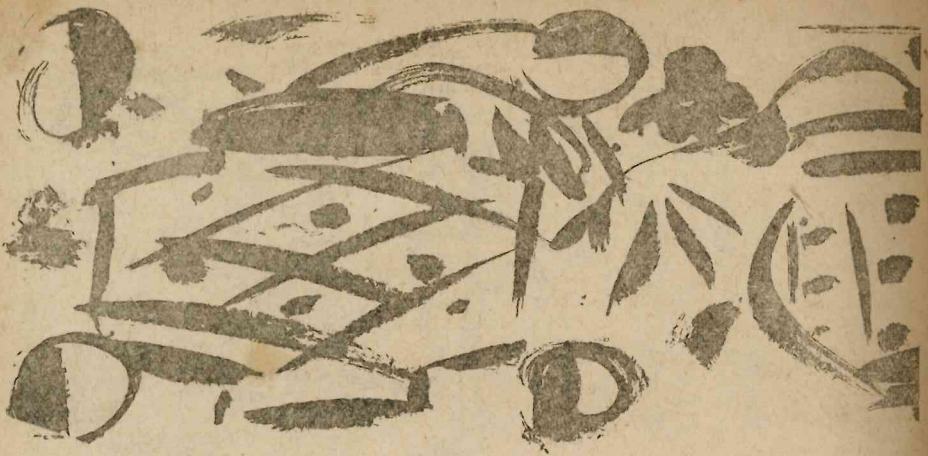
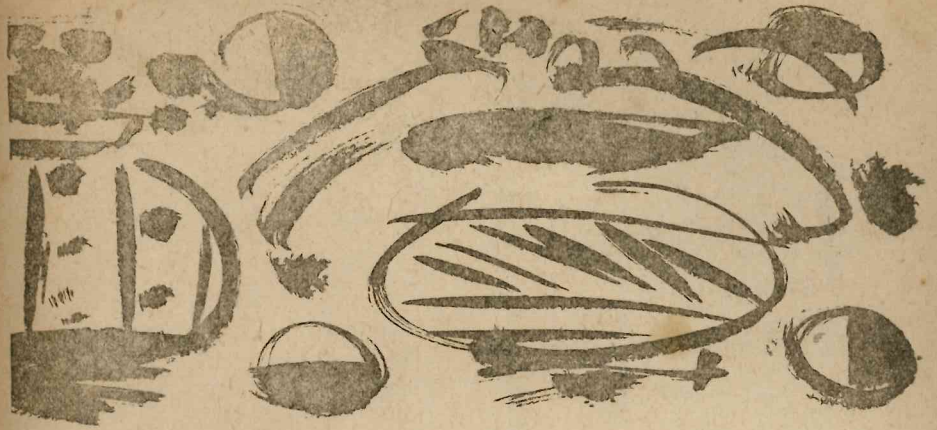
木 村 名 人 と 吉 川 英 治

ブ ラ ジ ル の 話

戦敗れて道明かなり.....

— 未發表の述懐記の一節 —

作 田 莊 一 (四)



浄 め の 火 浅 野 晃 (四)

雲 峯 稼 穡 傳 吉 村 淑 甫 (七)

宣 傳 中 隊 田 中 克 巳 (三)

玉井西阿傳による史談

..... 保 田 與 重 郎 (四)

宣傳中隊

田中克己

六

緒

シンガポールの雨期は過ぎた。雨期といへども、内地の梅雨とは違つて、日に一回ひどいスコールが来るだけのことだが、これがなくなるとすぐ、報道小隊でも梱包の命令が出る。市内へ移轉するのだとのことである。シンガポール西郊の、植物園まじかいオーチャード路のこの邸にはちやうど一ヶ月のたことになる。

十日ほどと思つたが、實際は一週間足らずの間は、身分がきまらなかつたが、本部から辭令が來たのを見ると、平野や、長澤、廣田などの大學出の新聞記者と一諸に、私は馬來軍司令部付委任軍屬に任ぜられ、本俸二百四十圓、外地加働若干を加へて四百圓以上のサラリーをもらふこととなつた。それと同時に點呼に出ることや、炊事當番も免じられたのである。私立大學出だからといふのであらう、私より四つも五つも年上の平野や長澤よりも、月給は上のやうである。それは平野が私の辭令を見ていやな顔をしたのでわかつた。

大體、軍人といふのは變な動物で、幼年學校、陸士、陸大といふ經歷をへて來たものでなければ、ほんとの軍人だとは思つてゐない。まして地方人で大學出などは悪思想をもつた非國民であるが、帝國大學出だけは、非國民の中でも、官の立てた學校を出てゐるのだから、といふのでまあ、認めてゐるのであらう。これが平野にいやな顔をされた原因なのだが、二三日は私の顔を見るたびに、帝大



櫻

出のやうな顔するなといふ氣持をあらはに見せた。毎晩同じ蚊帳で八人が寝、平野は私の隣にねてゐるのだから、あまり氣にしないでも、その機嫌が手にとるやうにわかるのでいやになる。しかし平野は年輩も同じ、學校も同じく私立大學出なのに長澤とは全く話もしない位、あはないので、やつとあきらめて私の方に話をしに來る。

葉烟

中

西

その中にデング熱がはじまつた。同じく記者で専門學校出だといふので、判任におとされた永田がはじめで、長澤、平野、廣田と記者出身はみななかつたが、私は同じ蚊帳にねてゐるのにかゝらない。はじめ奏任に任じられた時、小隊長の松井少尉は「奏任の方だけは私の部屋へ」と招じたが、これは窮屈でもあるし、私たちには慣れないことなのでことわつた。病氣になつては仕方がない。順送りに將校室へ寝にゆく。平野の飯は私が運んでやつた。大體この頃になると、私たちにも仕事と與へられてゐる。漫書家の吉野亮はもちろ

る

遠

る

ん漫書で、報道小隊で出してゐる兵隊新聞「建設戦」にかゝられるときまつたが、長澤は毎日、廣田は朝日とそれと、出身社の支局へ行つてニュースをもらつて來る。平野は大陸新聞の記者だつたので、それが利かない。私とともに二面の解説欄擔當といふことになつた。こゝで發見したことであるが、彼はこの仕事が出来ないのである。大新聞なら解説擔當は整理部かの擔任ときまつてゐよう。小新聞の大陸新聞にゐたのなら、何もかもやらされてゐたらうと思ふのに、彼は印度獨立問題とか、回教問題とかととり組まされて、原稿用紙を山のやうに積んで悪戦苦闘してゐる。私の仕事はもう少しやり易い。穴埋めに好きなことを書くといふ約束である。私は先づ

章

「十二月八日以後の日本の詩」といふ文集を書いた。永い支那事變の泥沼で氣を腐らせてゐた國民が、A B C Dの包圍陣を突破することについての間に計算書が出來てゐて、緒戦の戦果の花々しいの目をさましたやうになり、(その國民の中でも最も馬鹿な)詩人たちもこぞつて戦争を歌ひ出したありさまを、ありのままに書いたつもり、もとより皮肉でも何でも無いが、後でよんで見たらをかしくなることなどは豫想もしなかつた。これははじめとして、微用になつてから、急ごしらへに勉強した知識ではあるが、内地から持參の四五冊の本をも役立てて「南十字星の詩」「マラリヤの話」「マラツカの歴史」「馬來のお伽噺」と手あたりはつたり書く。マラツカの歴史は鄭和の南海征伐に従軍した馬觀の「瀝滄勝覽」の滿刺加國の條をくはしく引いて書き、まあ、出來がよかつたのであらう、軍司令官の山下將軍が愛讀したと入つてに聞いた。内地からは便りも來ず、日本字しかよめない兵隊のよみものになるなら、自信はないが何でも書く氣である。報道小隊で重寶にされても仕方がない。山下將軍もこの新聞は一日に三度くりかへしてよむと、小隊長がよろこんで傳へるのであつた。

しかし報道小隊の居心地はあまりよくない。後までこれが宣傳中隊全體の通弊として残るのだが、兵隊と軍屬とは、もと／＼別種類の間として扱はれる。例へば小隊長の松井少尉であるが、東京の基督教の大學を出てすぐ豫備士官學校に入り、少尉に任官してまだ長くもない様子だから、年も二十六七であらう、それが四十歳に近いのをはじめ澤山の軍屬を指揮しなければならぬといつたつて無理である。しかし命令であれば仕方がない。痛いものにさはるやう

田代

にしながら、上からの命令の傳達とその實行とは厳として態度を狂げない。若いだけに要領が悪いので、私などは下手なあとと思つてゐるだけだが、元中尉だつた長澤には幸ひ出来なない様子である。大體、軍屬だから下についてゐるが、召集だつたら俺の方が上官だといふ氣持があらはに見える。松井少尉もやりにくいだらうと同情する時がある。しかし戦團中なら運命は大變だが、駐屯中で新聞をやつてゐて、いついつまでに原稿を書けの命令を出すわけにもゆかないし、松井少尉はまた新聞がわかる筈もないので、わたしは氣の毒だと思ふばかりである。

兵隊はどうかといふと、これがまた軍屬とはちがふ。例へば黒田二等兵——私が来てから十日して一等兵を命ぜられたが——は毎日新聞の記者で、長澤とは同僚で、年も三十を越してゐる上に、長澤が地方支局にゐたのに對し、黒田は東京本社詰だつたので、記者としては格がちがふ。人間から見ても黒田の方が上出来なので、問題はそこらでないが、炊事、不疑番、點呼を兵隊として普通にやりながら「建設戦」の編輯をやつてゐる彼を見てゐると、やはり軍屬の方が榮だといふ氣がしないではをかない。のちに英字新聞をやるやうになつてから、馬來軍政部の最高顧問だつた砂田重政といふ政治家のところへ招待されてゆくと、御馳走を食へさせて、閣下の御抱負はと、鉛筆を出す

「私に抱負などありはしませんよ。大體、東京をたつ前の日、大本營に挨拶にゆくと、參謀たちが、馬來御着任の上は御經綸を思ふ存分おふるひ下さいといふものですから、私に經綸などありはしません。私は日露戦争の時の一等卒ですが、隊にゐた軍屬に腹が立つて

校までの間が長いので見にゆくと、華僑の植字工を黒田一等兵などが手をとるやうにして教へて活字を拾はしてゐる。漢字より假名の方に拾ひがちが多いといふのも、内地ではないことである。このひまを利用して一度セシル街の新聞社を訪れる。日本浪曼派で顔なじみの中村地平さんは愛想よく應對したが、ひどく忙しさうである。私はそこそこに辭去したが、そのみじかい間にもそこへ來あはせた靴屋から、いまベナンにある寺崎浩が注文したといふ靴が、びつたりと私の足にあつたので、買ひ取ることを忘れなかつた。その時、英字新聞の監督が缺員なので、報道小隊から移つて來る氣がないかどうかを聞かれたのである。

八

新聞班のいゝところは全部軍屬なことである。隊附將校の尾高少佐といふのが、監督といふことになつてゐるが、庶務は南支軍からやつて來た軍屬の月原君がやり、華字新聞はこれも南支から來た廣東語の旨い南といふ男、それに印度紙の中村地平、馬來紙の北町一郎と作家が二人あるところへ、今度、私が加はつたのである。班長といふわけでもあるまいが、監督のやうな地位には毎日新聞から第一回の徵用で來た赤松といふ男がある。年輩でしつかりした男だと私は見てゐる。

若

野

七

たまらない。同じ日本人であつても、兵隊だけがお國のためにたゞ働きをしてゐるんだと思つて、いちめてやつたものです。それを知つてゐるものだから馬來へ行つたら、何もかも軍人に任せるつもりです、といつてやつたら、參謀、それを伺つてます、安心いたしましたといひよつたよ。」

と語つた。この親任軍屬の打明けばなしを笑ひながら聞いてゐて、奏任軍屬の私に思ひ當ることの多かつたのは、報道小隊の空氣にもいくらかそんなものがあつたからに違ひない。

移轉の前に、隊長のところへ呼ばれたので、本部へ行くと、隊長阿部中佐は簡單に
「あなたには英字新聞をやつてもらふ」といふ。
「英語など出來やしません」と答へると、
「中學校で習つたらうが」と反問される。
「はい習ひました」と答へると
「それぢや兵隊よりましだ」とのこと、否應もなくしまつてしまふ。大體「建設戦」の編輯所はシンガポール市内でも南の方の海岸に近いロビンソン路にあつた。原稿を書くやうになつてから、校正をするために兵隊たちと一緒にトラックにつて通ふ日がある。初校が出て、價赤に直し、再

翌日は英字紙の記者たちに紹介にと月原君が連れて行つてくれる。ユレーシアン七人、華僑二人、印度人の青年が一人あつてマニアムといひ、これが一等話しやすさうである。通譯としては比島にゐた古山といふ男がある。萬事よろしく頼むといつて、設けられた席についた。

英字新聞「昭南タイムズ」は發行部數三千、紙面は内地の新聞の半分の大ささ、四面であるが、記事は同盟通信から提供する英文ニュースと東京ラヂオの海外放送とが主なるソースで、私の役目は古山通譯に協力させて、これらのニュースから取捨選擇し、校正の最後に檢閲をして、ソースが歪曲されてゐないかどうかを見た上、サインをすればよいのである。これなら「建設戦」の仕事よりずつと榮たと思つたが、古山通譯は私が「何分よろしくたのむ」と御馳走した席でもはか／＼しい返事をせず、まもなく出て來なくなつた。私は非常に憤慨したが、若いだけに恥かしくて上司は勿論、誰にも彼のことはいはず、通譯なしでもこんな仕事と力んでやつた。ひとり仕事をやりに出した翌日が丁度空母ホーネットの搭載したB25の東京空襲であつた。この日の午後、同盟通信の支社へゆくとニュースが入つたところを見せられた。「皇室は御安泰にわたらせられる」といふ最後の一節が妙に氣になつた。損害輕微なら皇室のことなど、いふべきでないと思ふのが、私の常識であつて、このニュースの作製者とは大分カンがちがふと思つたが、私が間違つてゐたのだらうか。

馬來へ來てから氣がついたことであるが、官僚の一種である軍人には、これと共通の著しい特徴がある。それは自分の職責と關係が

なければ、よそのことには餘りにも無關心なのである。他人は馬鹿だからあゝいふ失敗をした、おれは決してといふ自信も手傳つて内地の空襲なぞ何とも思はずがない。この日の夕方もこの間から開かれたカトンのシーヴューホテル（南濱閣といふ名になつてゐたと思ふ）では青年の將校たちがユレーシヤンの少女を相手に悠々とダンスをしてゐたと、告げてくれた人がある。井上少尉といつて、豫備役で厚生省の役人をしてゐたのが、召集となり、私たちと同じくみどり丸のつてシンガポールへ来たが、任地への便船を待つてまだこゝにゐたのが、この日ニュースを聞いたあとシーヴューホテルへゆき、あまり腹が立つたので

「貴様ら日本人か」

と怒鳴つてダンスを止めさせて来たといふ。あとでわかつたこの空襲の被害から考へても、さうまで腹を立てるに及ばなかつたと思ふが、私もその時は井上少尉に同感した。翌日の昭南タイムズからはこの空襲記事は除かれてゐた。現地人の記者には何とも恥かしい思ひがしたが、宣傳中隊の本部に伺ひを立てた結果も除けといふことであつた。

下關を出た翌夜の潜水艦の警報といひ、この空襲といひアメリカさんも中々やるなといふ氣がしたが、それも束の間、神經質な私も次第にのぶとなつてゆく。「緒戦の戦果に弊つた」ばかりでなく、これが南方果けといふのであらう。

大切なことでは放膽といふより、放慥になるかはり、小さいことでは神經を立てる。

私は南方への微用を長島らのやうに將來のためになると考へるや

平野の桶高いふるへを帯びた聲と、長島の太い聲とがたえずひびく。暑いせいもあるが、寝附かれぬ私は彼等が散會したのち、いつも寢につくので、聞くともなしに聞いてゐる。船中と同じく大東亞共榮圏の議論も出るが、中隊内のことでひどく憤慨して「切つてしまへ」、「殺さなきゃだめだ」の聲もまじる。實に不愉快である。私は地平さんとこへ行つてみたり、月原君を訪問したりして時間をつぶす。將棋盤も碁盤もないのだから、外に時間のつぶしやうがないのである。

日曜の休みに、平野と同じ建物に住んでゐる廣田のところへ行つて話していると、晝飯を食堂で済ました平野が歸つて来て、私の顔を見ると

「きさま」

といつて、横面をなくつた。私はもとより廣田もあつけにとられてゐると、平野は

「女が表へ來るとるぢやないか」

と云つて奥へ入つてしまつた。不審さうな顔をして（平手うちの横ひんたは決して痛くないことは、これでわかつた）私が外へ出ると、なるほど表の石段に女がある。食堂へ行つて晝食中の將校たちに、私の名をいつて、やきもちよりむしろ軍屬の面汚し感を平野に抱かせたこの女は、まだ少女であるが、ユレーシヤン特有の日本人好きのする顔をしてゐるんだが、私には冤罪である。「昭南タイムズ」へよく來ることは來るが、記者たちのところではなしてゐて、私のところへは來ない。私が英語で

「おまへ何か私に用事があるのか」

うな野放圖な男ではない。神國日本の手ばなしの大勝を信じる信仰ももたない。私の最も尊敬する先生は開戦のまぎはに

「日本は一度亡ぶが、もうやらすにはすまないね」

としみつゝと仰しやつた。そのおことばは今も忘れないでゐるが

「先生のお考へはちがつてましたね。北は千島でとまりですが、南の方は赤道はるかかなたまで日章旗がひるがへつてますよ」

と得々としてゐる。コレヒドールはまだ落ちないが、ビルマ作戦は順調に行つてゐるし、ラバウルを據點とした我軍はポートモレスビーを攻略して、濠洲にでも攻めこまうといふ形勢を見せてゐる。ガダルカナルもミッドウェイも私には夢想も出來なかつた。

そんなわけで軍事に關しては絶対の信頼を軍部に置いてゐる私も、事シンガポールの實狀に關しては心配がある。この頃、私たちはロビンソン路の新開班から荷物を引上げて、ロイド路に定められた宣傳中隊の委任宿舎に移つた。中村、北町の二君は路の北側の大きな建物の一割に三室の小さい建物があつて、そこに入つた。私もそこへと思つたが、地平さんが、

「仕事も同じ、宿舍も同じでは、いよ／＼黨を立てゝゐるやうに思はれはしないか」

といふので

「なるほど」

と感心して、通譯班長と同居といふことにした。これは關西式の長家建のアパートで、壁一つの西隣は井口氏、その隣は長島と進藤、東隣の住人は平野である。長島の部屋では毎夜、會がある。よくも毎晩つゞくものだと感心させるほど、十二時すぎまで宴會をして、

伏中神保

と聞くと、はつきり云はない。長居されちや更に迷惑する。私は「用事があれば社へおいで、こゝは軍人宿舍で、おまへたちなぞの來るところぢやない」といつて扉をしめた。

私はこれを辯解すべきことも思つてゐなかつたが、占領馬來軍は中々風紀がやかましいながら、占領の餘威を借りて、ユレーシヤンの戀人を作るつもりなら、この少女に限らず、私にも機會がなかつたわけではない。中央郵便局へ用事で行つたことがある。人を待つてゐる中に、印度人の守衛がそばへ來てニヤ／＼笑ひながら「マスター、ドウ、ユウ、ウオント、ア、ラヴ」といふ。

「イエス」

と笑ひながら答へると、丁度ま向ひに事務をとつてゐる女の子を指さして

「あの女の子ならいゝでせう」

といふ。可憐な感じのするユレーシヤンである。私はこの笑談に耐へ切れなくなつて

「ノウ、アイ、ドント、ラヴ、ハー」

といつてその場をはなれた。戦勝の餘威を借るのは少くとも日本人のすべきことぢやない、將士が血であがなつた土地を汚したくないといふのが、稚いかしらぬが私の念願であつた。

その聖地の實狀は如何か。學校と研究所しか知らなかつた私の目

に映するだけでも心配の種が多い。軍政部はスローモーションで何もしてゐないやうに見える。これはともかく憲兵の威力は大したものである。排日華僑の本場で、百年の英領を統治するには、恐怖政治をもつてするといふのもあらうか。しかしこはがつてゐるのは、現地人だけでなく、兵隊も軍属も同様である。かうしなければ軍規が保てないとは、長島らの「共榮團」がみる／＼崩れてゆくのを、私もとも／＼悲しまざるを得なかつた。

エミリー——さうあの少女はいつたと思ふ——が私のところへやつて来たのは、平野が想像したやうに、私の戀人になつてでは勿論ないが、それになるために来たのでもなかつたことは確信して、いへる。では何のためか。彼女は一家を養はんがために、占領軍の高官であるらしい、英字新聞のエディターとして知つてゐる私に對して、就職運動を行ふべくやつて来たのである。占領軍政の第一歩のあらはれは、多くの失業者とインフレの現象とである。當時の軍政部はいふであらう。占領直後やむを得なかつたのだと。しかしその後の軍政もこの傾向を阻止出来なかつた。ドッチの如き名策を授ける人がなかつたからか。それもあらう。しかし根本原因は、戦局がたちまち軍政どころではない、段階に来てしまつたのである。ララ物資も来ず、見かへり品も来ず、軍票と、軍刀をさげた人間とだけがやつて来た。いや内地からはそのほかに慰問團と、藝妓がやつて来た。これは將校用であつて、兵隊のためには、半島からの女たちが来た。彼女らは皇軍のため、女軍屬募集の聲につられて来て見れば、醜業婦をさせられたのである。そして兵隊は、これらの慰安婦を買ふために配給のタバコを賣つた。軍酒保のまへに、タバコの配

本

給の日には兵隊がならぶ。そのよこをまた列を作つて華僑たちがならぶ。兵隊が十錢で配給されたタバコがたちまち一圓五十錢になるのである。そしてこの價格がちやうど慰安所の價格であつた。

とまれ現地人ではエミリーら混血兒が一番に衰落した。勞働者になれないからである。いや波止場の苦力までもが失業した。臺灣から半島人の義勇隊がやつて来て、武器彈藥しか積んでない船荷の積下しはみなこれがやる。當然といへば當然だが、こゝにも無理がある。半潰家屋の破壊清掃は捕虜になつた英海兵がやる。苦力は従つてます／＼不要である。物價高は私ごとき下つたの軍屬でさへ毎日數百圓の金を費ふ。この圓は實は海峽弗にバーにされた軍票である。そしてこの軍票には、裏附けになる金も物も伴はなかつたのだから、物價が上るのは當然である。華僑の大商店が軒を並べてゐるのはノースブリッジ路だが、店内は軍人軍屬で満員である。徴用船の船員もある。みな内地ではもう統制になつた純綿純毛があると、かき込むやうにして買つてゆく。洋服生地を抱へた日本軍人——私はこれをいやな眼をして眺めながら、自分も下着を買はねばならぬ。みなに吊られてパーカーの萬年筆も二本買ふ。五圓つゝであつたが、十日するともう二十圓出して手に入らなくなつてゐる。とくをしたやうな氣がする。生還を期せぬ筈がかゝへと女持の時計を十五圓で買ふ。倫敦製の冬の中折を買ふ。これも五圓である。本を買ふのに大かた金をつかつてしまふ私でさへかうなのだから、他の者は思ひやられる。大體シンガポールは生産地ではない。これらの品はみな滞貨なのである。しかし多帽がいくら上つても、エミリーらは困るまい。困るのは日常の必需品、特に食料の暴騰である。占

領と同時に米はシンガポールでも配給制になつた。黍、ビルマから輸入してゐた米が來なくなつたからである。理由は、交通機關が全部軍事に使はれてゐるのと、もう一つバーター制にするにもシンガポールには、何にも産物がないからである。この配給だけでは満腹しないことはいふまでもない。やみ米はずん／＼上る。砂糖はジャバから來てゐたが、これも船がとまつて配給制となつた。これがまた華僑たちの買占め投機のよい對象である。

私が「昭南タイムズ」の監督をしてゐた間は僅か一ヶ月しかなかつたが、この徴候はその間でも日に日にひどくなつてゆく。新聞をやつてゐるだけに、ぼんやり私の私にも目に立つことが多い。しかも使つてゐる記者たちや職工たちの不足さうなものには何もしてやれない。私が毎日、内地から來る同盟通信とラヂオニュースにチェックしてゐるだけなのを見て記者のうちで私に一等なつてゐた印度人のマニーム青年が耳打ちしてくれた。

「マスター、あなたは、人だけど實行力がありませんね」
私は苦笑しながら、就職の世話をたのみに來たにちがひないエミリーにも何にもしてやれず、他の誰一人救つてやれない自分自身がいやになつてゐた。實行力とは何か、米か砂糖をどこかでもらつて來て彼等に分配することなどは、私もすぐに氣がついたのだが。

一〇

五月になつた。廻状が廻つて來た。「宣傳班將校ならびに委任軍屬の親睦を計るため、一度會合を催したく、出缺御記入ありたし」とあつて、所と場所と會費三圖とが記入されてあつた。私は出席の欄に名を記して申村、北町二氏の方へ廻状を送つた。

田中 木

「建設戰」
中村、北町の二君と、會までの間の時間つぶしに私が尋ねると、二人とも知らない様子である。

「宣傳班内はいまひどくもめてゐますが、あなたは仲間に入りなさんなよ」
私にはわけのわからないことである。同じく出席と書いて廻した中村、北町の二君と、會までの間の時間つぶしに私が尋ねると、二人とも知らない様子である。

ともかく時間に、指定の料理店へゆく。まづい支那料理と酒とが出る。會話がちつとも面白くない。半島内部へ映畫撮影の下檢分に行つてるとかの田畔と映畫班長の長井中尉とはもとより見えない。華字紙が忙しいといふので、來なかつた赤松と南とを旨いことをしやがつたと思ふ。地平さんに耳打ちして歸りませうといふと、賛成して

「私ども三人は締切時間になりますのでお先に歸らして頂きます」と云つてくれた。席を立つ三人の通り路にあつた廣東から來た軍屬が、
「今に面白いことがはじまりますぞ。もう少しゐたらどうですか」と引止めかけた。その止め方は大してしつこくもなかつたが氣にかつた。
もとより締切時間は口實である。三人は車にのつて宿舎に歸り、私をこめて地平さんの宿舍の風呂に入り、涼しくなつたら寝よう

してゐるところへ呼びに来た。新聞班でたゞ一人のこつた月原が血だらけだといふのである。行つてみると頭から出血してゐるが、大して重傷のやうでもない。どうしたと聞くと、突然、平野が打つてかゝつた。刀を抜かうとしたが、容易に抜けないので、鞘ごとたゝいたのだといふ。あの私たちを引き止めた男も尻馬に乗つて叩いた。將校たちは傍観してゐた由である。

赤松を叩くつもりが、うまく逃げられたので月原が代りにたゝかれたのであらう。しかし理屈に合はない話である。地平さんはチンキをもつて来て繻帯してやつた。

「ひどい奴らだね」

「ほんとにインテリらしいところがないぢやないか」

私たちの指す相手はもとより暴漢とこれをうしろから操つた長島である。しかし喧嘩の原因は？私ほしらべることもしなかつた。これこそ熱帯帯けの徴候であらうか。たゞ日本人同士で殺しあはうとする奴があることが不快でたまらなかつた。阿部隊長がうはさによれば占領後のみつゞけだつたスコッチ・ウィスキーのおかげで、中風となり、入院した直後であり、新聞班の監督をしてゐた、尾高少佐が内地へ轉任になつたあと新隊長の着任までの間に起つた事件であるだけ、騒動はまだ／＼發展の可能性がある。赤松も月原君を見舞ひに来たが、元氣のない様子をしてゐるのは、自分の危険に氣がついてゐるせいであらう。

私はまた地平さんのところへ建言しに行つた。

「地平さん、僕たちは作家なのに、何も外字新聞をやることはないぢやありませんか。もつと僕たちに合つた仕事をやらしてもらひま

といはれる。

「どうなすつたんですか」

とたづねると

「君と同僚の者がたづねて来たので、君だとばかり思つて、中へ入れるとか、あのことを種子にして金をゆすられた」

「先生、僕だつたらもつと前もつて電話か郵便かで御都合を伺ひますよ」

「さうだと思つたんだがね」

私はしやうことなしにあやまつて、内心では私だと思へば喜んでゆすりに會はれた先生に感謝してゐた。

「中村さん、僕はこのごろ氣がついて、ふしぎでたまらないんだが、この外字新聞の監督を羨んでなりたがつてる奴があるんだつてね。なんか役得でもあると思つてるんだよ。それを後釜にならせて、僕は詩を作るよ、丁度いゝ機會だもの」

「マニヤムに實行力のないといはれたことも思ひ出してゐた。「朔太郎にならう、／＼」私ほもう堅く決心してゐた。

一一

平山

私の主張は通つて、中村、北町の二君と三人で隊長代理の平井大尉に會ひにゆく。見るからに若々しい軍人である。理由も何ものべないで、外字新聞の監督の任を解いてもらひたいとの申し出に「一應考へさせてもらひませう」

とのことで、會見、終りとなる。擔當の參謀にもいつたであらうが、さだめて長島、平野も意見を徴されたであらう。同盟退職で問題にするなら、こつちも腹があると思つてゐると、願のごとく聞

せうよ」

慣れないそろばんをはじいてゐて叩かれた月原のことが思ひうかぶ。私は怖がらない男だが、馬鹿らしくなつてゐた。地平さんは少し考へてゐたが

「きやつらの思ふ壺どほりだよ」

といふ。北町一郎は黙つて何もいはない。私はしつこく

「僕にはわけはちつともわからないが、何か新聞班に不正があるやうないひ方をしてゐるところを見ると、かじりついでるといひ目に會ひますよ、今度だつてのけものになつて、知らなかつたのは僕たちだけなんだもの」

私自身に不正のおぼえはないし、地平さん北町一郎ともさうと、確信しながらも、狂犬のやうな奴らだからと思ふ。いつの間にか將校全部と軍屬たちほとんど全部を味方にしてゐた長島、平野の政治性に負けたといふ感じがするが、残念だとは思はない。實はこの二三日まへ毎日新聞の支局へ行つて、飛行便で来た内地の新聞を見てゐる中に、萩原朔太郎の死が報じてあるのを見つけた。詩人の死を報ずるにふさはしく大してスペースももつてないのに、すぐ目にとまつた。一人の本當の詩人が死んだ。私は目のまへが暗くなる思ひで、南方へ来てはじめて東京がこひしくなつた。なぜだか來なけりやよかつたといふ氣がしてならない。本當の詩人——電車通りのよこぎれなかつた詩人、巡查をこはがつた詩人、政治性のひとつもなかつた詩人、を思ひ出す機會が久しぶりに與へられた。來る少しまへにおたづねすると

「君のおかげでひどい目に會つたよ」

き屈けられた。月原は辭職を願ひ出なかつたのに、やはりやめさせられて、代りに長澤がなつた。私どもの後任はみな記者出身の軍屬である。英字新聞には、報道小隊にゐた水田がやつて來た。事務引繼をして、私は自分で出來なかつたことをたのむ。

「物價が高くなつて、この連中も弱つてゐるんだ。みな持物を賣つてゐるから、昇給の方をよろしくたのむ」

「君も別に反對しない。私に見てゐたところでの働き工合をいつて、くれん／＼もよろしくたのむといふと、もう仕事はない。地平さんのところへ行つて見ると、

「やはりやめてよかつたやうに思ふ。ともかくこれを徹底的に癒すよ」

といつて、繻帯をとつて見せると、肉にごつそり穴があいてゐる。ジャングル瘡である。十二月以來ほとんど手當もしないであつたふ話である。しかしこの地平さんの計畫が又實現しなくなるのである。

免職が五月十五日、私は早速、英字新聞の記者たちと事務長と、就任中の慰勞といふので印度料理の會食をし、今までシンガポール市内以外どこへも行つてないので、折からやつて來た藤田嗣治、宮本三郎の二畫家を案内する繪畫班の栗原信畫伯にたのんで、その自動車に便乗、ブキテマからジョホール・バールへ行つて歸つて來ると、佐竹上等兵に會ふ。

「今度、宣傳中隊の支部を擴充するといふ名目で、スマトラのメダンとパレンバン、それにクアラルンプールに派遣が出るんですが、あんた行きませんか。こゝは餘りにもつまらないでせう」

木下 卯

本當である。軍政のやり損ひのあとばかり聞かされて廻るのはたまらない。戦蹟の見學はけふのブキテマですんだ。今度は單獨で平井大尉に會ひにゆく。

「今度、支部擴充に、徴用員にも志望を徴しておゐてだときましました、私はメダンへやつていたゞきたいのですが」

メダンなど全然知らないところだが、三地の中、何となしに口から出てしまつた。平井大尉はまた例の通り聞きおいてくれた。これが暗示を與へたと見える、いよゝ命令が出ると私と佐竹上等兵がメダンの近衛師團派遣となつた外に、地平さんはクアラルンプール、北町一郎はバレンバン派遣と出てゐる。バレンバンへは黒田二等兵もゆく。たゞ腑に落ちないのは、私の後任として英字新聞をやり、記者たちの昇給も考慮してくれるはずの永田もメダン派遣である。就任以來一週間あまりで免職、何か失敗をやつたのかと心配する。永田個人のことより、失敗が及ぼす波紋の方を氣つかふのは、海外に來てはじめてわかつた祖國への感情のせいであらう。

さて地平さんや北町一郎とも別れ／＼になるときまつたので、會ひにゆくと、地平さんは憤慨してゐる。

「あなたは希望したのぢやないのか」
私が反問すると、

「僕はこの瘡が癒るまではこゝを動けないといふことを承知の上で、かういふ命令を出すなんて、ひどいにも程がある」といふ。

「流しものにしたつもりなんだね」
私はふしぎに腹が立たないが、感情とは別に長島人事はへただなあ

と考へる。ともかく外字新聞での努力は、みな水の泡で悪評の的だつたのだなと氣がつくと「殺してしまへ」が、流しもので片附いて、向ふの方がかへつて御安心だらうと思ふ。

さてクアラルンプールやバレンバンはいざしらず、スマトラのメダンは豫想とは全くちがつて静かなきれいな町でインフレも見られない。たゞ一つ不快だつたのは永田のところへ來る手紙に、平野の「殺してしまへ」

と書いてあることである。永田とは同室にゐるので見るともなしに見てゐる。たゞし永田は、何の失敗もないのにたつた一週間で首になつた長島人事に怒つてゐるので、まあ／＼いふことをきく様子はない。

エミリーが多分食ふに困つて佐竹上等兵の愛人になつてゐたことはずつと後でわかつた。エミリーのことで、私をなぐつた平野は、その後誰から永田へ來た手紙と「建設戦」の記事とで急病にかゝつて死んだことがわかる。長島はそのあと仕事をしてゐたらしいが、三ヶ月後、本部歸還の命令を受けて私がシンガポールへ歸ると、宿舎にした元の女學校の校長室には、彼が市中の書店から回収してまはつた排日文書が堆く積んであるだけで、もう顔をあはすこともなく、もとより得意の怒號をきくこともなかつた。私がスマトラにゐる頃、やつと着き出した内地のかゝあ殿の便りを聞いてから、急におとなしくなり出したのだらうと私は私なりの解釋をしてゐたが、中隊内の噂では黒幕の平野が死んだので、いゝ智慧が出なくなつたのだといつてゐた。やつぱり操られてゐたのかなあ、私は彼にはもう憎しみよりあはれみを感じてゐた。

浄めの火

浅野 晃

浄めの火で

内からの火で

からだを焼け

ところを燃やせ

怖れるな

おまへは不死だ

おまへが燃えれば

その火が浄められる

おまへのからだが浄められ

おまへのところが浄められ

浄めの火が浄められる

怖れるな

不死なるものよ

わるびれず

からだを焼け

ところを燃やせ

そのまま

ただそのまま

そのままいい

ただそのまま

しつかりと眼をあい

そして見よ、見よ

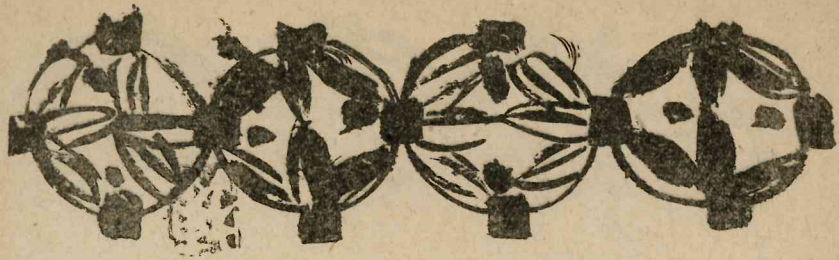
怖れるな

おまへは不死だ

眼はつねに

眼はつねに額ぶち

背景はいつも金だ



のは、複雑の事情ありし如く想像さる。

高貞没落が、尊氏直義の軋性なりしや。それにつけ入りし石見勤皇黨の策動の結果なりしや。或ひはさらに強大な宮方の謀略がこの間に働き、高貞自盡によつて暗中に没したものであることも十分に想像せられるのである。この事件により、出雲守護職は近江佐々木の族の手に歸し、山名氏山陰に權を振ふ因をなし、南北の終末に甚大の影響を與へたが、さらに出雲國造家分立に重大の關係あつたことはおほひ難く、これより三年にして清孝死し、こゝに孝宗貞孝の争ひとなり、この間高貞没後の守護代吉田嚴覺この紛争に介入し、貞孝側の言分によれば嚴覺に非望ありとしてある。この貞孝は南朝に屬したのである。嚴覺は佐々木の族なる吉田である。

故に高貞没落の因としても、たゞなる黨争の結果に歸し得ないものもある。黨争のあるところ必ず南北の謀略が働き、南北の謀略の働くところ、必ず黨争を惹起したのがこの時代の現象である。この故に楠子累代の忠義や、和州山間の諸豪族の歴世不變の盡忠の一途が、さらに光輝を放つたのである。

高貞没落の「太平記」記事その自盡の場所は他の文書の云ふ影山の方が往年の交通事情より見ても正しいと考へられるが、師直の好色は此事のみに限らず、その遺恨については否定し難く、ありしことのやうにも思はる。

この高貞夫妻自害の事は一箇の艶聞に止らず、山陰の歴史に大いに關係あり、且つ南北史の進行に影響大かつたのである。この事件は興國二年二月二十四日にて、細川顯氏がその前年十二月京都發向以來、苦心の末に、迂回して漸く安倍山に陣を進めたのが、この年二月二十九日であつた。これより開住城を中心とする一進一退の攻

編輯後記

八月六日廣島市では原爆七周年記念日に當り、慰靈祭並に平和記念祭が行はれました。終戦七周年を迎へる立秋の日、私達は謹んで戦歿英靈並に戦火に逝いた同胞の冥福を祈り、生残つた者の覺悟を新にいたし度いと存じます。

この記念日に於ける濱井廣島市長の平和宣言を讀んで、この觀念的な詞で現はされた愛の精神によつて、平和が訪れることと信ずる者はないと思はれます。最早眞面目にものを考へ、平和を祈念する尋常の日本人には一人もないであらうと思はれました。しかも、『私達は素直に反省し、このことを個人としての、又市民としての責任に於て考へ云々の文章に、私は憤と嘆きを感じずにはゐられませんでした。一瞬にして二十五萬人の生命を奪ひ去る野蠻極まる行爲をなした者こそ、この日に深い反省

省をなす可きでありませう。この慘禍を蒙つたものが反省すると云ふのは、誠に不合理なこと、思はれます。

曾て明治三十三年土井晩翠翁は、黒龍江上の露人の暴虐を憤り、これを二篇の長詩に賦し、神人許さざる露人の暴虐を憎み、更に基督教の道徳よ、十九世紀の文明よ、告げよ皇天の正義今無きやと、腑をつらぬく怒と、文明に對する嘆きをなしました。それより五十餘年を経て、現代の私達は清人ならぬ同胞の惨死を現に見て、空虚な人類愛の詞を宣し、不合理な反省をしようとは、一體何とした事でせうか。古人に對し、古人の生きた時代に對しても、上げる顔すら持たない恥かしさを、身に味はふものであります。尙も私の心をさびしくさせたものは、この式典に原爆の子等の代表が捧げた言葉を、ラジオで聴いたので

防戦が七月迄つゞいたのである。

この西阿公の戦ひと、高貞出奔の間に何かの關係があつたかといふ者は、「太平記」作者以上にその太平記風空想をたくましくするものであるが、勿論今は何の根據もかゝり合ひも認められない。もつとも太平記風の因果の見方を、余は一概に浮説小説の類とするのではない。そこには人心の眞に即するものがある。しかし高貞が石見の勤皇軍の蹶起を知つてゐた如くに、西阿公が京都を震撼せしめ、幕軍の名將細川顯氏が久しくこれを攻めあくんで、直義がしきりに援軍を派遣しつゝある情報は了知してゐた筈である。且つ東國に於ては親房卿がしきりに師冬の軍を敗つてゐる。

この鹽冶の一統をたどれば、後醍醐天皇伯耆藩幸の主謀なる富士名義綱は、鹽冶の族なりと想像さる。即ちこの人は「尊卑分脈」に見る出雲國野木の里に蔓延せる佐々木高綱の系統にて、「太平記」に高貞の妻なる早田宮妹君は、後醍醐天皇の外戚としるせることも、高貞自盡に即いて意味あり氣である。乃木希典大將はこの出雲野木の佐々木氏即ち高綱の裔として世に知られてゐる。

この鹽冶が妻について、始め天皇義綱に賜ひしを高貞取て我妻とすなど云ふのは、もつとも浮説に浮説を重ねる類である。たゞ高貞の後出雲守護職は近江佐々木氏に移る。且つ佐々木の族の吉田、現地に於て守護代として實權をつた。この近江佐々木氏は直義の黨にて、西阿合戦に功を著したるものこの族に多かつた。高貞兄弟の對立、高貞吉田の對立にも想像の餘地多分である。こゝより太平記風空想をその因果説に従つて加ふることは、多少意味あり氣にて、浮説に浮説を重ねるの類とは趣旨を異にするものである。但し余はこれを試みない。(未完)

「祖國」第四卷 九月號

定 送 料 五 拾 圓
昭和二十七年 八月廿五日印刷
昭和二十七年 九月一日發行

編輯兼 玉 井 一 郎
發行所 京都市下京區油小路
通り松原上ル

印刷所 松崎印刷株式會社
印刷人 松 崎 秀 雄

發行所 まさき會社
樺木町下ル
電話 上三六九一
振替 京都七〇一七

Caixa Postal 3963
Rua Espritia 139
Sao Paulo, Brasil

ブラジルの國販賣總代理人
池田郡 一

電話 上三六九一

池田郡 一

祖國

號月一



昭和二十八年十二月二十五日 印刷納本
 昭和二十七年八月二十五日 印刷納本
 昭和二十五年一月十二日 第三種郵便物認可
 昭和二十九年一月十二日 印刷納本
 昭和二十五年一月十二日 第三種郵便物認可

祖國 九月號 第四卷 第八號

定價 五拾圓

刊 既

祖國社刊 裝幀 棟方志功

絕對平和論

定價 B 6
 送料 一三〇圓
 一三〇圓

「獨立」の指導者の第一の資格は何ぞ
 第二の資格は何ぞ
 第三の資格は何ぞ
 一言に云へば？
 それは毅然たる自主の精神である。
 自主の精神を支へ守る自主の思想である。
 自主の思想を自ら表現しうる種々の能力である。
 一言に云へば東洋の覺醒である。

保田與重郎著 裝幀 棟方志功

日本に祈る

定價 B 6
 送料 二八九圓
 三五〇圓

淺野 晃著 裝幀 棟方志功

石川啄木

定價 B 6
 送料 一九二圓
 三〇圓

池内 宏著 本コース上製函入

滿鮮史研究

定價 A 5
 送料 一五七〇圓
 四〇圓

刊社國祖

絶對平和論

定價 B6 二七〇頁
送料 一三〇圓
三〇圓

「獨立」の指導者の第一の資格は何ぞ
それは毅然たる自主の精神である。
第二の資格は何ぞ
自主の精神を支へ守る自主の思想である。
第三の資格は何ぞ
自主の思想を自ら表現しうる種々の能力である。
一言に云へば？
一言に云へば、東洋の覺醒である。

祖國社 編輯
棟方志功

學士院會員 文學博士 池内宏 著
東京大學名譽教授

滿鮮史研究 (上世編)

明治に拓かれたわが東洋學は、常に世界の最高を示し來り、わが池内博士、その傳統の最後の最大權威として内外に周知する。しかも博士の生涯の營爲は、滿鮮史研究中世篇の二冊が以前に上梓されたのみである。頃日博士逝去の報を受く。吾人は戦後混乱の中に本書を上梓し、世界の學界に贈り得たことを僅かに慰めとする。
A5 五七〇頁 本クローズ装函入
定價 一、二〇〇圓 送料 五〇圓

保田與重郎著 棟方志功 裝畫
日本に祈る 評論集

如是云ヒテ、余ノ魂ハフルヒ、心泣ケリ。身内裂ケ、腸斷チ、泪垂ル、ヲ如何セン。過ギシモノハカクモ切ナキヤ。アハレ實ニカクモ在ルヤ。汝ハ云フ、遠ザカリニクモノノ、ヒソカナル聲モテハルカニ云フ、然リト云フ。カレ余ハ口吟ム、泣ク勿レ、文人ノ尋常ノミ。サレドカ、ル極ミモ、大夜ノ時ノユキノオゴソカサヨワガ鎮魂歌ニキユエヨ。

B6 二八九頁 定價二五〇圓 送料三〇圓

淺野 晃著 棟方志功 裝畫

石川啄木 評傳

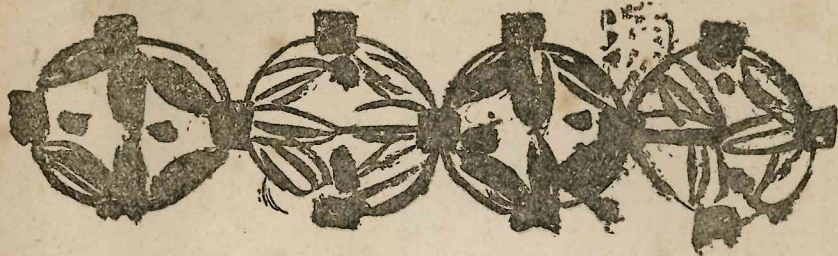
終戦後五ヶ年間に、北海道勇拂の曠野に潜居せる著者は、その隱忍の間、思想家としての成熟を完成しつゝ、鬱結の情の礙るところ、独自の詩風を示せり。重患にあつて生死の境を往くこと數度、思想家たる、詩人たるの重量感愈々増大す。本書はその間著者唯一の論策にて、自ら巡歴せる近代の諸思想と、世界的なりし時代觀を自在に馳驅批判せり。わが文明批評上の壓巻なり。

B6 一九〇頁 定價一六〇圓

祖國 (第六卷 第一號)

昭和二十九年一月號





祖 國 一 月 號 第 一 六 卷 (通 四 十 八 号)

表紙・カット 棟方志功

蘇 生 (一) (連 四 回 載) 松 永 材 (三)

民族のヴイジョン (二) 房 内 幸 成 (八)

巢 鴨 の 家 (六) 長 尾 良 (二)

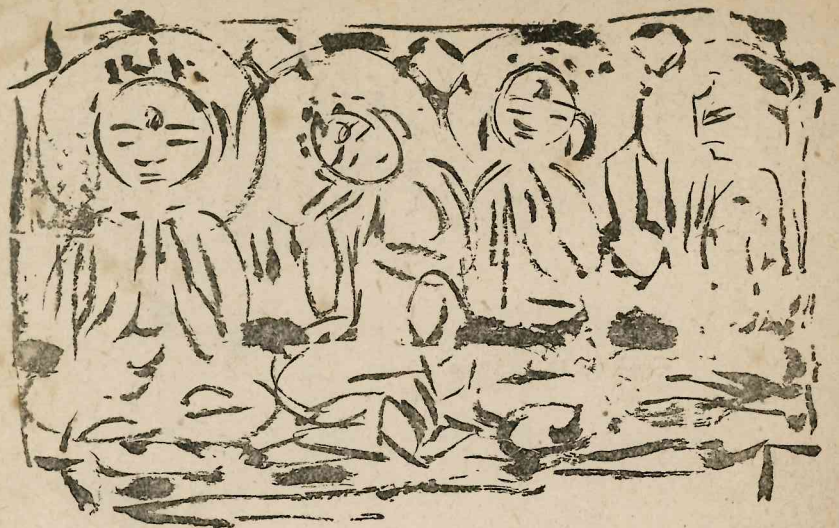
旅 の 五 日 石 井 正 浩 (五)

能 登 の 御 墓 堀 内 民 一 (三)

華 嚴 章 柳 井 三 千 比 呂 (五)

蘇 東 坡 — 詩 と 人 田 中 克 己 (七)

祖 國 正 論 (元)



巢 鴨 の 家 (六)

長 尾 良

翌朝早く刑務所から歸つてきたお上さんは、早速と二階に上つてきた。

「昨日、子供たちがうゐさんからお菓子を送つて戴いたんだつて、ね。さつきかへつてくると坊やがさア、お二階のお兄ちゃんのお姉ちゃんがつても美味しいお菓子をくれたよつていふのよ。そしてさア、お姉ちゃん、いつこゝろうち来るのつて訊ねるぢやないの。まったく子供だわねえー」

しかし、お上さん自身も正男といふ坊やと同じやうにうゐが送つてきた菓子を、お近付きの印と思つてゐるらしく、例の睡をためた口もとに何となくうきうきした頬笑を堪へてゐた。

「私はいつものやうに、たゞ、は、は、はつと聲を立てずに笑つた。

お上さんは眞顔になつて、
「禮子でも待つてゐるのよ、お姉さんが来るつて」

怪訝なやうすであつた。
しかし、私にまた笑ふと、もう私に話しかけるのを諦めたかのやうに、
「でも、ほんたうに、うゐさんがいらして、こゝでお兄ちゃんと暮しなされるやうになるといふんだがなア」獨りごとのやうに呟いた。

のあらゆる物資を受取り、人間の脳髓は科學を作り、手の協力を得て無限の發見發明により、無制限の生産を約束することが出来る。天地は無盡蔵の寶庫で人間の手と腦とを待ち、更に無要物を利用して有益物に變更することが出来る。人間の能率は無窮に増長する。然らば人間こそ生産の主役者である。一人の天才の出現は計ることの出来ぬ富を齎らす。故にリストは經濟に於て商品の生産や消費のみを主題とすることは末の問題であつて、民族の問題こそ經濟學の中心であると云つた。誠に達見である。商品問題のみを研究したミスは唯物論者であるトリストは力強く攻撃した。こゝに於てもマルクス（自ら唯物物を任じてをる）とミスとは同類である。人間の能力こそが經濟を決定する。然らば將來を荷負ふべき者を胎内に於て殺して經濟が立つであらうか。

人間の能率が數十倍も増すならば、一人の増加は生産力数十倍の増加である。しかして人間の胃袋や腸の大きさは古人と大差はない。消費は古人と同量であつて、生産は古人より遙かに増加することが出来る。産制は何を意味するか。不合理的な敗戦の結果のみを人間の常態と考へて、單に産制でこの難關を突破するが如き消極的な考へ方を正しいとするならば、産制では未だ不足であつて、日本人が全部死亡しても、決して物は餘ることはない。況んや他方では人糧重を毎日歌ひ、そのために強盜や罪人を厚遇し、頻死の病人に嫌がる高價な藥を投じて苦痛を數日間も引もし、不治の病人や精神病者癡呆等を大切に於て、そのために莫大な負擔を國民に課し、廣大な土地や建築物や藥劑機械設備品及び健康人の勞役を犠牲にしてをる。しかして將來の天才を殺し、健全な兒童や青年を

教育すべき學校よりも、不具者や罪人を收容したり取扱つたりする刑務所や警察や裁判所等が遙かに立派で豫算も多い。我利宗の一現象なる輕薄な享樂結婚よりも血統重の婚姻の優れてをることは優生學や遺傳學が證明してをる。無定見の産制よりも昔の嵯拾山の習俗が優れてをり、タイゲトス山の捨兒の制が數等賢い。要之自分が養澤に生きるために將來の子を殺すと謂ふが如きは、パンパンの反動現象に外ならぬ。

(つづく)



蘇東坡——詩と人

田中克己

一、家系

蘇東坡、諱は軾、字は子瞻、またの字を和中といふ。北宋の仁宗皇帝の景祐三年（一〇三六）十二月十九日に、蘇洵の次男として、四川の眉山で生れた。時に父は二十八歳だつた。母は程氏である。家系は父の書いた「譜例」に記されてゐて、遠祖は唐の蘇味道といふ。蘇味道は趙州靈城（いま河北省）の人で、少年の時から詩文をもつて同郷の李嶠と名聲をひとしくし、蘇李と稱せられた。進士になつたあと、裴居道の突厥征伐の將軍に任じられて皇帝にたてまつる謝恩の文を代作し、その出来ばえは世の評判となつた。これより次第に官がすすんで、則天武后の代には副大臣格の官に數年なつてゐた。たゞし故事に通ずるのみで、みづから發明することがないことは、自覺してゐて、かういつたことがある。「事の處理をするときには決斷を明白することを欲しない。まぢがへば咎められるからである。なんとかごまかして兩端を持つるのがいい」と。もつてそのひととなりを知ることが出来る。また父の死にあつて歸郷したとき、州縣の官吏に粗儀の用意をさせ、同郷の者の墓地や田地を侵したので、彈劾されて地方官に左遷された。やがて則天武后が崩すと、その寵臣なる張易之兄弟らはたちまち排斥されたが、蘇味道もその黨與とのかどで、眉州の刺史に貶しめられ、また益州大都督府長史に遷つたが、赴任しないで死んだと

いふ。蘇洵の記事では、この人が失意の時代に地方にのこした子が、東坡の祖先なのである。蘇味道の逸事としては弟の味玄をひどく愛し、その無禮をさへゆるして、世人からほめられたといふ。文集も當時にもはやされた由である(舊唐書九四)。

この人が眞に東坡の祖先であるかどうかはともかくとして、その性行と經歷とが東坡に酷似してゐることはふしぎなことである。もとより「譜例」を作つた蘇洵がこれを知つてゐたわけではない。蘇洵の死んだ時でさへ、東坡はいまだその天年の半ばにも達してゐなかつたからである。とまれ、文章に巧みにして、一たびは得意の時代を経たが、晩年、蹉跎として卒した人を祖先と稱する家に、蘇東坡は生れた。

蘇味道からの系譜が怪しいことは、舊唐書の傳によつても察せられるが、蘇洵も味道以後の數代は、名さへ明らかにし得ず、高祖父以後のみを記してゐる。すなはち高祖を銜といひ、黃氏を娶り、俵氣をもつて郷里で知られた。その五子のうち、末子の祐といふのが、後唐の哀帝の天祐二年(九〇五)に生れ、後周の世宗の顯德五年(九五八)に歿した。その翌々年が宋の太祖の建國の年である。祐の妻は李氏で、唐の太宗の皇子なる曹王明の後裔といふ。祐の嫡子は五人、庶子一人、嫡子の四番目を果といひ、これが蘇洵の祖父である。兄弟のうち最も孝悌信義をもつて稱せられ、宋氏を娶つた。子は九人あつたが、みな夭折して、序だけがのこつた。果は生計を立てるのがたくみで、餘財があつたが、四川の地に國を建ててゐた孟氏が亡び、その大官どもが宋に降つて汴京に赴いたあとにのこした田宅を、人みなが争つて奪ひ財産を起した仲間には入らなかつた。

したのに、彼のみは學を好まず、子供たちと戯れるばかりであつたが、父の序は笑つて放任し、郷里の者はみなふしぎがあつたといふ。二十五歳になると急に學に志し、従來の友と絶交し、閉ぢこもつて本を讀み、文を作り出した(蘇洵「上歐陽内翰第一書」)。東坡の生れたのはその直後、彼が二十八歳の時である。この後の蘇洵の經歷は東坡のことを述べながら記してゆくこととする。

東坡は蘇洵の次男であつて、景先といふ兄があつたが、これは夭死した。弟の轍(字は子由)は三つちがひで、この兄弟の情の美しさは、祖先と稱せられる蘇味道兄弟以上で、また文筆官歴ともに文學史上めづらしい。子由のことも隨時あはせ敘することしよう。

二、生立ち

前述の如く、蘇東坡は宋の仁宗の景祐三年の暮に生れた。翌四年(一〇三七)に兄の景先が夭死した。同胞にまた姉があつたが、これもまたおよそ十年前、父が二十の頃に亡くなつたので、次男ながら父母の寵愛もなみ大抵ではなかつたらう。兄の亡くなつた年、父は進士科の試験を受けたが落第し、つゞいて受けた茂材料の試験にも落第した。この二度の失敗で、蘇老泉は落膽して、これまでに作つた百餘篇の文をことごとく焚きすて、ますく戸を閉ぢて讀書し、書くを止めること五六年、六經百家の書に通じたので、その後筆を下すと、たちまち數千言を成し、文章の途が大いに進んだといふ。故事を引用し、當套的な成語をもつて文を構成する當時として、これは嘘いづはりのないことであらう。

寶元二年(一〇三九)、弟の轍が生れた。こゝに文學史上にもま

つた。かへつて「悪事がわが子孫にあつてを引くのが心配だ」といつてこれをせず、施しを好み、しかも名を好むといはれるのを恐れて、人に知らざなかつた。卒した時は宋の太宗の淳化五年(九九四)で、五十一歳だつた。

洵の父にして、東坡の祖父なる蘇序は、宋の太祖の開寶六年(九七三)に生れ、仁宗の慶曆七年(一〇四七)に歿した。妻は史氏、子は三人、長男を澹といひ、次男を渙といひ、洵は末子である。彼は少年の時から善をなすのを好んだが、讀書を好まなかつた。たゞ晩年になると、詩を作り出し、その作り方はたちどころに數十篇といふ速成で、一年には數千篇できた。内容は上は朝廷郡邑のことから、下は郷里子孫農漁と多らぶところがなかつた。次男の渙が官に任じたので、自分も大理寺評事といふ官を授けられた。

序の妻の史氏は、眉山の豪家の娘で、情深く、また姑の宋氏によく仕へ、いつもこれに喜ばれたが、夫に先立つこと十五年にして死んだ(蘇洵「族譜後錄上篇」)。

序の三子のうち、長男澹と次男渙とはともに進士の試験に通つたが、弟の方が先に進士となり、しかもこれが宋代、四川から進士を出すさきがけであつた。また澹が東坡の生れた年に死んだのに對し、渙は諸官に歴任して、嘉祐七年(一〇六二)東坡が二十七歳で、すでに任官してゐたとき、六十二歳の天壽を全うして、提點刑州路刑獄の官で亡くなつた(蘇子由「藥城集二五伯父墓表」)。この伯父がおそらく東坡兄弟の身近な目標だつたに相違ない。

さて東坡の父蘇洵は、周知の如く、字は明允、號を老泉といふ。眞宗の大中祥符二年(一〇〇九)の生れで、兩兄ともに進士に及第

れた双子星が成立したわけである。二人の名については、命名者である父の女があつて、「車輪や輻や蓋や軫(うしろの横木)はみな車體のうち働きのあるものであるが、軾すなはち車の前の横木だけは用がない。そのくせこれがなければ完全な車とはいへない。軾よ、お前が外を飾らないといけないと思つてこの名をつけた。天下の車は、前に通つた車の軾によらないものはないが、車の任務をいふときには軾は關係がない。そのかはり、車が仆れ、馬が斃れても災害は軾までは及ばない。してみると軾は禍福の間にあつて、善處するものである(名二子説)」といつてゐる。面白い考へ方であるが、名が二人の生涯にそつたか否か、後述するところがこれを明らかにする。

慶曆二年(一〇四二)、東坡は七歳となり、このころから書が讀めるやうになつた。幼時の記憶もこのころに始まり、眉州の老尼で朱姓のものに會つたが、年九十あまりで、孟昶の宮中のことをよく知つてゐて話してくれたといふ。孟昶とは五代末の群雄の一人で、蜀に國を建てたが、宋に亡されたものである。

翌三年、東坡は八歳になつて、小學に入り、道士の張易簡を師とした。この師は生徒の中では、東坡と陳太初といふ者とだけをほめた。

慶曆五年(一〇四五)、東坡十歳。この頃から父は江南の方へ赴いた。留守中、東坡の學問のことは専ら母が擔當した。母が古今の成功失敗のあとを教へてから問ふと、子はそのあらましが云へた。あるとき母は後漢の范滂の傳を讀んでかかせてゐるうち太息した。子はわかから問うた。「母上、私が范滂になつたら、おゆるし下さいませ

すか」と。范滂は後漢の末、外戚と宦官とのため政治が亂れた世に生れ、李膺・杜密らの黨に加はり、これを熾めようとしたが、反對に捕縛され刑せられることとなつた。捕へられるとき母に向つて、「自分の亡きあと、弟がお世話してくれませう。ただ母上のお悲しみになることだけが気がかりです」といふと、母は「お前はいま李・杜と名聲をひとしくするのだ。死んでも何が残念であらう。名聲と壽命とは兼ね得られるものではない」と勵ましたといふのである(後漢書九七)。東坡の母もこのとき、「お前が范滂になれれば、私が范滂の母になれないでられますか」といつたといふ。賢母といふべきであらう。

父の旅行は三年目の慶曆七年(一〇四七)、東坡が十二歳の時に終つた。久しぶりに顔を見せた父の土産話は何であつたらう。この旅行は目的が何であつたかも不明で、おそらく詩人的遍歴であつたらうと思ふが、歸郷の理由は、外ならず、東坡の祖父、老泉の父なる序が死んだので、その葬儀のためであつた。歸つて来たのは、虔州(江西省贛縣)からであつたことは、四十七年後に東坡がいつてゐる「蘇の十二歳のとき、父君が虔州から歸つて来て話してくれただけの地に近い山中の天竺寺には白樂天親書の詩があつて、山門作兩山門云とあり、筆勢は奇逸で、墨跡は新たなもののやうだつたと」(「天竺寺引」)。父はまた虔州では鍾業といふ友があつて、この旅行中いたるところで冷遇されたのに、この者の兄弟だけは大切にしてくれたと話したので、五十五年後、東坡が海南島の流罪から許されて北に歸る途中、その家を訪ねると、致して既に三十一年、その三子が彼と抱きあつて哭いたといふ(「鍾子翼哀辭

になつて夫が忘れた箇所をもよく覚えてゐることがわかつたといふ。また賢妻といふべきであらう。長男の邁はその腹の出である(「亡妻王氏墓誌銘」)。

東坡のこのころの勉學はどういふ種類のものであつたか。いふまでもなく、伯父たちについて進士たるべく、その試験のための勉強だつたに相違ない。たゞし宋初の試験科目は、後述の王安石の改革後とはちがひ、廣範圍で、進士科では詩、賦、雜文各一首を作るのとが、策五道、帖經十條、墨義十條とともに課せられる。策は政治的な問題への答案、帖經は經書の暗記、墨義は經書の意味を問ふのであるが、儒教がおよそ一般宗教とことなり、來世彼岸を問題にしなければならぬ。帖經・墨義も無意味とはいへないが、詩や賦の出来くあひで高等文官になれるかなれないかがきまるといふのは、なか／＼にうれいことである。たゞしこの試験の詩賦作文には、詩的感情の發露よりも、該博な故事熟語の引用が要求されたから、作品は文學的よりもむしろ學術的でなければならぬ。しかしこれが一應すべての官吏候補者をして、自國の歴史や傑人の傳記に親しくさせた効果はいなむことが出来ない。東坡が前述の如く、幼にして母から後漢書を教へられたりしたのも、この意味からであつた。

従つて彼自身もこの頃になると經史に博く通じたが、なかんづく賈誼・陸贄の書を好んだといふ(宋史三三八「蘇軾傳」)。治案策をたてまつつた賈誼のことはいふまでもないが、陸贄は唐の德宗の時、暗愚の君を輔けて功があつたが、この時より施行された兩稅法が、資産の等級によつて課税することとしてゐるのを困難といひ、またこの法によつて税がはじめて現物納から貨幣納になつたが、これは

引」。蘇老泉の旅行のことでわかつてゐるのはこれくらゐである。東坡が十八歳のとき、姉妹のうち一人のこつてゐた洵の末娘が死んだ。兄弟姉妹六人あつたのが、男兄弟二人だけとなつたわけである。このことから残念なやうな氣がするのには、明代の「今古奇觀」に收められてゐる「蘇小妹三難新郎」といふ小説が、當然だといへば勿論ながら、全然架空の作なことである。この話の筋は周知の如く、三蘇の娘として妹としてふさはしい才媛なる蘇小妹が、王安石の息子王雱の嫁にとのぞまれたのを、その文に天折の相があるといつてことばり、秦觀、字を少游といふ才子に對し、文學の試験を行つたのち嫁ぐといふのである。秦少游と蘇東坡との關係は後にも説く。ともかく姉妹みな天死した蘇東坡に關しては、この小説は全くの架空事といはねばなるまい。しかしこの才媛の實在か否かの疑問は「今古奇觀」の愛讀者には共通のことと見える。清の錢泳の「履園叢話」にも、彼がこれを問はれて答に窮したが、のち「高郵州志」の編纂のため秦少游の著なる「淮海集」を閲して、その妻が徐氏だつたことを知つたといつてゐる。たゞし同書には、「墨菽漫錄」「菊坡叢話」によつて、東坡には兩妹あり、一人は柳子玉に嫁ぎ、一人は程之才に嫁いでゐるといつてゐるが、これも間違ひであらう。柳子玉はおそらく柳子文の誤りで、蘇轍の前掲「伯父墓表」によれば、伯父渙の末女の夫だからである。

至和元年(一〇五四)、東坡は十九歳になり、妻をめぐつた。新婦は眉州の青神の人なる進士王方の娘で、名を弗といひ、このとき十六歳であつた。嫁いで來て舅姑によく仕へ、自らは書が讀めるとはいはなかつたが、夫が讀書してゐると、終日そばを離れず、のち物價の暴落と貨幣價値の騰貴、いはゆるデフレを起すことを述べて反對したが効なく、その後、奸臣の讒言でそのころは炎瘴の地だつた忠州(四川省忠縣)に流され、十年たつて順宗の即位によつて召還の命が出たときには、もう死んでゐたといふ。死歿の地が四川であることが、あるひは東坡の心をひいたのかもしれないが、この二人の生涯がよく似てゐるのは、傳記作者の作爲でなければ、歴史の感化をおそろしく思はせる。

また結婚の翌年、二十歳で、彼は四川盆地の中心なる成都に遊び、張方平に謁した。張方平、字は安道、樂全先生と號し、のちに王安石の新法の有力なる反對者の一人であるが、このときは侍講學士にして益州(成都)の知事だつたのである。張は一見すると、國士の待遇をしたといふ(「樂全先生文集序」)。かく宿命の網は刻々と成つてゆく。

翌嘉祐元年(一〇五六)、東坡は二十一歳となつた。おそらく張方平の推薦によつてであらう、この年、進士に推薦されたが、おどろくことには三つ年下の弟子由も同時に進士に推薦された。蘇家の二神童の名が高かつたことばうなづけるが、子由は兄よりもさらに俊秀だつたのであらう。

二人は父とともに上京した。道筋は北上して成都を經、蜀の棧道を過ぎて陝西に出、長安、洛陽を經て汴京(開封)に着いたのである(「鳳鳴驛記」)。

さてこれ以前の東坡の詩は概ね傳はつてゐないが、たゞ一つ「郭綸」といふ詩だけがこの頃のものであらう。子由も同じ題で、このチベット族出身で、河西の弓箭手として戰に功があつたが立身せ

ず、黎州都監といふ官の任期が満ちても、登しなくて歸ることができず、嘉州（いま樂山縣）で監稅官として困つてゐる男のことを詠じてゐる。兩者の作ともに平凡だが、現存する東坡の詩の最初期のものといふ意味で録してみよう。

郭倫

郭倫

河西猛士無人識 河西の勇士はそれと知つてくれる者もなく
日暮津亭閑過船 日暮に渡り場へ往來の船をしらべてゐる。

路人但覺驄馬瘦 ひとはその青馬の瘦せてゐることだけを知つて
不知鐵頭大如椽 その鐵のほこの椽のやうに大きいのを知らな

い。
因言西方久不戰 彼はいふ、西方では永らく戦争がない。
截髮願作萬騎先 髮を斷つて覺悟をみせ萬騎の先頭をかけたい

と。
我當憑軾與萬目 僕も戰車の横木によりかゝつて目をはなさず。
看君飛矢集蠻貊 君の飛ばす矢が蠻人の毛布に集るのを見よう。

敵は西夏であらう。失意の軍人の様子をほほ寫し出してゐるが、西夏攻撃のち王安石得意の時代になると實現を見る。そのとき郭倫は生きてゐたかどうか。

さて東坡ら父子三人は都に來たが、進士試験の最後である天子直授の試験に息子たちが出るに先だつて、父の方が大評判となつた。即ち父は上京すると翰林學士歐陽修に書をおくり、またその著はした「洪範論」、「史論」七篇を示し、樞密使の田況にも書をおくり、「審勢」、「審敵」、「權書」十篇を呈した。歐陽修への書には「むかし天子が政治に御心をそゝがせられ、范仲淹公が宰相、富弼

のが、わづか一年にしてまたく勢力を失つたのである。かやうな政治状態は蘇東坡の時代になつても全く同様で、名は王安石の新法の發否に假るが、いづれを正、いづれを非ともいひがたく、史書を讀むものをして嘆息させる。慶曆四年よりまた十年、蘇氏の父子が上京のときは、あたかも三度目に歐陽修らの黨の天下となつてゐたのである。たゞし老泉の説く如く、范仲淹はこれに先だつて皇祐四年（一〇五二）に薨じ、尹洙も亡くなつてゐた。餘靖の南方での成功とは、廣西方面で、儂智高の亂に當つて功があつたことをいふのである。

さて蘇洵の歐陽修に呈した文の本論は、彼の文を孟子・韓退之と並べ稱し、李翱・陸贄の文の長所をも兼ねそなへてゐるとほめそやし、ついで自らの經歷をのべて、少年にしては學ばず、二十五歳より始めて讀書し、一時古人の壘に達したと自負したが、その後いまだこれに及ばないことに氣付き、既作の文數百篇を焼いて、論語・孟子・韓退之およびその他の聖賢の文をひとり讀むこと七八年、かくて胸中の思ひをことごとく記したが、こゝに呈出する洪範論と史論七篇とである。知己が得たさに自ら讚め申したが、十年の心は以上の如くで、偶然のことでないからお察し願ひたい、といふ目己推薦の文である。いさゝかあつたかましいが、歐陽修はこの文に添へられた論文を讀んで大いに感心した。

前に四川で會つたことのある田況にも、前述の如く、「審勢」、「審敵」二篇と「權書」十篇とを呈出したが、これも歐陽修に轉覽されたのち、あはせて二十二篇が、その手から仁宗皇帝の御覽に供せられ、同時に刊刻されて士大夫の争つて讀むところとなつた。歐

余

公が樞密副使、あなたと餘靖公、蔡襄公が諫官、尹洙公が集賢校理として中央にあり、天下の才子がみな起つた頃には、自らは出世こそしなかつたが安心してゐた。しかるにこれら六人の人が勢力を失つて、君側から遠ざけられることとなられたとき、あたかも都にゐたが、この有様を見て嘆息した。しかしそれより十年、自らの學はいまだ成つたとはいはないが、余靖公は南方で成功され、あなたと蔡公とは再び中央朝廷に起ち、富弼公も宰相となられた。喜びにたへないが、よく考へてみると、范仲淹、尹洙のお二方はすでに亡く、富弼公も宰相のこととお目にかゝるわけにはゆかない。余靖公も南方にあり、蔡公もお目にかゝれないから、あなたに申し上げるのだ」と前提してゐる。范仲淹が宰相の位にあつた時といふのは、慶曆三年、彼が參知政事だつた頃を指すので、當時、富弼は軍事を統率する樞密院の副使だつたが、この頃を後世の人も宋の最盛時と稱する。蘇洵はあたかもこのとき故郷を出でて京師や江南に遊んだのである。しかるに翌四年の半ばになると、范仲淹は陝西河東の宣撫を命じられ、富弼も河北の宣撫に當つた。官名はともあれ、中央政界から遠ざけられたので疑ひもなく左遷である。理由は黨争だつたに相違ない。仁宗の治世は後世の皮相感とは異り、太平の反面、臣下の黨争が激しく、范仲淹の如きもこれら遠ざかるどころか、その中心人物だつたのである。すでに仁宗親政の初めたる景祐三年のころ、彼は呂夷簡をそしつたといふかどで、左遷を受け、同時に餘靖、尹洙、歐陽修も左遷された。蔡襄もこのとき「四賢一不肖詩」を作つて時勢を諷し、世人は争つてこの詩を傳誦した。それより六七年にして、政變あり、范仲淹らは呼び戻されて中央にゐた

陽修は賈誼、劉向もこれ以上ではないと感心したが、一般にも一時、文を作る者はみなこれに倣つたといふほどの感化を及ぼしたといふ。東坡兄弟はこの間、試験の準備をしてゐたことであらう。

嘉祐二年（一〇五七）、東坡二十二歳。

年が明けると、進士の試験の第二次なる、禮部の試験があつた。試験官は父の文に感心した歐陽修で、その作製した策問の題は「刑賞忠厚之至」といひ、これへの答案はいまも「東坡集」に残つてゐるが、堯舜禹湯文武成康の古帝王が民を愛すること厚く、賞を喜び罰を悲しんだことをいひ、周道の衰へた穆王の時にも、なほその遺風が存した。これがまた孔子の道であつて、法を立てるには嚴を貴びながらも、人を責むるには寬を貴んだ、との意味の短い文である。歐陽修は多くの答案の中から、これを見出していたく感心したが、あまりの出来ばえに、あるひは自己の食客なる曾鞏の文ではないかと思つて、嫌疑を避けるため首席とせず第二に置いた。曾も唐宋八大家の一人に數へられる名文家であるから、これもむりからぬことであつた。大體、この試験に際しては、筆蹟などから試験官の採點に手心があつては、といふので、宋の眞宗の時から、答案の姓名の部分は糊づけにし、また書記に命じて騰寫せしめることが始まつたので、良心的な試験官なる歐陽修の小心が、かへつて蘇東坡の禍ひとなつたのである（宮崎市定博士「科擧」）。

策問がすむと、次は經書の意味を問ふ墨義であるが、このときの問題は「春秋」から選ばれ、東坡はこれにも出來がよくて首席となり、最後に天子みづから行はれる殿試には「重巽申命論」を提出して首尾よく及第した。弟の子由も同じく及第し、この兄弟そろつて

の進士及第は滿都の人々を驚かしめたが、新進士兄弟の得意の時間は短かつた。成績發表のすぐあと、故郷から届いた便りには、四月、母の程氏の亡くなつたことが記されてあつたのである。

孝をもつてすべての倫理の基盤とする舊中國では、父母の死に際しての服喪がやかましく、官吏も免官を願ひ、歸郷して葬儀を行ひ、二十七月の間、歌舞遊覽婚姻はもとより、一切の公私の活動を停止する。兄弟が父とともに急遽故郷なる四川の眉山に歸つたことはいふまでもない。

三、南行集

嘉祐三年（一〇五八）、すなはち東坡二十三の歳はかくて喪の中に暮れ、明けて嘉祐四年、喪が解けると、父は二子を伴つて江南に赴いた。いづれは任官のため都に上らねばならない二人であるから、少々廻り道にはなるが、舊遊の地に伴つて、見聞を廣くしてやらうとの親心だつたのであらう。旅行中、そろつて詩と文とを巧みとする父子三人は名勝舊蹟に會ふごとに詠詠した。かくて成つたのが「南行集」であつた。この書は今も傳はらないが、東坡の序文があつて「己亥の歳に、父上のお伴で楚（湖北湖南）に赴いたが、舟中無事でも、博奕や飲酒はよくないので、山川の秀美、風俗の朴陋、賢人君子の遺跡など、耳目の接するところをことごとく詩に作つた。父上のお伴と弟の女とをあはせると一百篇になつたので、南行集と名づけた」といひ、また出来上つたのが十二月八日、江陵（湖北省）の驛でのことだつたと記してゐる。

今度の旅は、前の上京の時とちがつて、岷江を南へ下る。眉山を

出て、東坡の妻の故郷なる青神を過ぎると、嘉州（いま樂山縣）で、こゝは唐の詩人岑参のあつたところ、現代の詩人郭沫若の生れた地である。兄弟ともにこゝでは詩を作り「初發嘉州」と題する。東坡の方を掲げると

朝發鼓闌々 朝に出發するとき鼓はトーン／＼と鳴り
西風獵獵西 西風は獵獵とある旗を動かした。

故郷飄已遠 故郷はもはやはるかあなたとなり
往意浩無邊 往くはとほくかぎりない。

錦水細不見 錦江は細くなつて見えなくなつたが
蠻江清可憐 蠻江は澄んで愛すべしだ。

奔騰過佛脚 奔流の中をゆられて佛像の脚もとをとりすぎ
曠蕩造平川 ひろびろとした平野に來た。

野市有禪客 野中の市に禪僧があつたが
釣臺尋草煙 釣魚臺に夕もやの立つころ行くといつた。

相期定先到 その約束ではきつと先に來てゐて
久立水潺々 立ちつゞけてゐるところを水がザア／＼流れてゐる。

蠻江とはチベットの方から流れて來る大渡河のことであらう。佛像のは岷江の岸に刻した彌勒の佛像である。釣魚臺に會することを約したのは、自註によれば同郷の僧宗一である。

樂山を發して犍爲を經、宜賓では夷卒の亂山を見て詠じた（過宜賓見夷卒亂山）。

江寒晴不知 江は寒く晴れることを知らず
遠見山上日 はるか山上に太陽を見るばかり。

臘臘含高峯 それもおぼろに高い峯にふくまれて
晃蕩射峭壁 ちら／＼とけはしい斷崖を照らすだけだ。

積雲忽飄散 積雲がみる／＼散つてしまふと
翠樹分歷々 みどりの木々があり／＼と見える。

行人抱孤光 旅人のわれは日光を汲んでゐるやうな氣がし
飛鳥投遠碧 飛ぶ鳥はとほく青空に見えなくなる。

蠻荒誰復愛 蠻境の荒地を誰が愛しよう
穠秀安可適 草木の茂つたい、景色へは行くことは出来ないが、

豈無避世士 しかし世を避ける人がゐることはあつて
高隱鍊精魂 高く隠れて精魂を鍊つてゐるのだ。

誰能從之遊 でもこのひとに従つて學ぶことは出来ない
路有豺虎迹 路には豺や虎の足あととさへあるのだから。

同時に作られた弟の詩ではチベット人の侵入に備へて守つてゐる
兵の姿も見えるやうに詠じてあるが、この詩では國境の荒地をさな

がらに見るやうに寫し出しながらも、東坡はこの亂山の奥に仙人の
住まふことをうたはずにはをれない。これをしも中國的なロマンチ

ックといふべきだらうか。こゝの近くであらう牛口では「夜泊牛
口」、「牛口見月」の二首が作られたが、前者は佳い。

夜泊牛口 夜に牛口に泊る

日落江霧生 日が落ちて江の霧が立つたので
繫舟宿牛口 舟をつないで牛口にとまつた。

居民偶相聚 住民たちがたま／＼集つて
三四依古柳 三人四人と古い柳の木のをばに來る。

負薪出深谷 薪を負うて深い谷間から出て來たので

見客喜相售 客を見て喜んで賣るのだ。

煮菹爲夜殮 野菜を煮て夕食とし
安識肉與酒 肉や酒のことなぞ知りもしない。

朔風吹茅屋 寒い風がその茅ぶきの家を吹き
破壁見星斗 やぶれた壁からは星を見る生活。

兒女自咿囁 それでも子供たちは語りあひ
亦足樂且久 樂しげにいつまでも暮してゆける。

人生本無事 人生にはもと／＼何事も無いのに
苦爲世味誘 世間に誘はれて苦しむのだ。

富貴羅吾前 富貴が眼のまへにあらはれると
貧賤獨難守 貧賤を守つてゆくのがむつかしくなる。

誰知深山子 誰も知らない、これら深山の子が
甘與麋鹿友 甘んじて鹿たちと友になつてゐるのを。

置身落蠻荒 身を野蠻荒涼の地に置いてゐるが
生意不自陋 人生觀は自然といやしくない。

今予獨何者 いま僕と來たら何者だらう
汲々強奔走 汲々とむやみに走りまはつてる。

都へ官吏になりゆく者の吟としては、本音とも思へないが、今
後の苦勞に照しあはせると、これが本氣だつたらどんなにつらく感

じたことかと哀れである。

宜賓から舟は揚子江の本流に入る。舟の中で父は琴を弾いた。夜半になると、東坡はさらに請うて女王操の一曲を弾いてもらつた（「舟中聽大人彈琴」）。江安、合江、渝州（いま重慶）、涪州（涪陵）、鄂都、忠州、夔州（奉節縣）と舟はますます江を降る。

父子兄弟は沿岸いたるところにある古蹟を詠するが、それらの作が
いづれも理屈つぽく、面白くない。詩が官吏となるための道具とし
て用ひられる以上、そこには學識のひらめきどころではなく、なる
べく多くの展示が要求されるのである。この見解がこれらの作すべ
てにあらはに示されてゐるのだが、實例として引くにも當るまい。
舟は三峽の險に入る。そのはじめは瞿唐峽、次は巫峽で、北岸に
は十二峰がそびえてゐる。楚の襄王が詩人宋玉を伴うてこゝに遊ん
だとき、夢に現はれたといふ神女の住家である。こゝでの詩は四篇
傳へられてゐるが、中では「神女廟」が、この傳説をこまかに寫し
てゐるので面白い。

大江從西來 大江は西から來り

上有千仞山 上には千仞の山がある。

江山自環擁 江と山とが抱きあつてゐるので

恢詭富神姿 あやししくふしぎなもののが多くゐる。

深淵置鼉鼓 深い淵には水蛇や龜がよこたはり

巨壑蛇龍頭 巨きな谷には蛇や龍がある。

旌陽斬長蛇 旌陽（の令許遜）が長蛇を斬ると

雷雨移滄灣 雷雨してみなよそに移り去つた。

蜀守降老寒 蜀の守（李冰）は老いた毒龍夔氏を降し

至今帶連銀 いまに至るもこれは鎖でつながれてゐる。

縱橫若無主 勝手にさして主神がみななければ

蕩洩侵人寰 のさばつて人間世界を侵すのだ。

上帝降瑤姬 そこで上帝は瑤姫をお降しになつて

來處荆巫間 こゝ荆州と巫山との間にをらしめられた。

は、その前途が思ひやられると云はざるを得ない。
宜昌からさらに江を下れば江陵で、前述の如く、「南行集」はこ
ゝで序を附して一冊となつた。しかし父子の旅行はもとより江陵で
終りを告げたのではなく、こゝより陸路を汴京までつゞくのであ
る。江陵での作なる「息壤詩」は凡作だが、「荆州十首」の五首目
はやゝ面白いので、ついでに引いて見よう。

沙頭烟漠々 沙頭市には煙がたちこめて

來往厭喧卑 人の往來がさしがしくていやだ。

野市分棗鬧 野市はくじかの群がつたやうにかまびすしく

官船過渡遲 官船の渡しも遅い。

遊人多問卜 旅人はたいてい卜者にうらなつてもらふので

偷叟盡攜龜 田舎の者がみな龜を持參してゐる。

日暮江天靜 日が暮れて江も空も靜かになつたが

無人唱楚辭 たれもあの楚辭をうたふものがない。

沙頭市はいまの沙市である。この頃も舟着場であつた。龜トのい

まだこの地で行はれてゐるのが珍しいではないか。第七首も同じく

民族詩的には面白いから引いて見よう。

殘曠多風雪 年末には風雪が多いが

荆人重歲時 荆州の人は季節の行事を重んずる。

客心何草々 旅人の心はあはたしいが

里巷目嬉々 里ではみなたのしげである。

爆竹驚鄰鬼 爆竹の音は隣りの鬼まで驚かせるほどで

驅儼聚小兒 追儼の催しには子供たちがあつまる。

故人應念我 遠くの友もきつと僕を思つてゐるだらう

神仙豈在猛 神仙は決して猛々しいものでなく
玉座幽且閑 その玉座は奥深く靜かである。
飄蕭駕風馭 サア〜と吹く風に乗り
弭節朝天關 旗をなびかして天廷に參上される。
倏忽巡四方 またたちまちにして四方をめぐる
不知道里難 道路の艱難なぞご存じない。
古粧具法服 古い様式の法服を召され

遷殿羅煙鬘 奥の神殿で美しい髪の毛の女官にとりまかれてふんばる。
百神自奔走 もろ〜の神はだまされても走りまはり
雜沓來趨班 ざわ〜と席につきにやつて來る。
雲興靈怪聚 雲が立つときはこれらの神々が集まつたので
雲散鬼神還 雲が散るときはそのお還りだ。
茫茫夜潭淨 ひろ〜と夜の淵は清く

皎々秋月彎 しろ〜と秋の月は弓張りの形。
深淵搖玉珮 女神はいまきつと玉のかざりをやりながら
來聽水潺々 こゝに來て流れる水の音をお聞きだらう。

三峽を過ぎるともう湖北の地に入る。歸州から下流には、また瀨
があつて新灘といひ、その下流には黄牛峽、扇子峽などがあるが、
これを最後として兩岸は平野となる。宜昌に着くまへには、父子し
て久しぶりに上陸し、詩を作るが、峽中の作と同じく名勝案内記の
たぐひであることは相變らずだ。たゞ夷陵縣（武昌）での至喜堂の
詩だけは、景祐三年（一〇三六）こゝに左遷されて知事となつてゐ
た歐陽修のことを詠じ、その政敵たる呂夷簡をとがめてゐるのが異
色であるが、任官の途中、すでにかく黨派色を濃くもつてゐるので

相望各天涯 天のはてにあつて互ひにながめやつてゐることだ。
この方面の歳時のごときは、時代は大分さかのぼるが、梁代に出來
た「荆楚歲時記」にくはしいが、この詩で見る追儼、すなはち鬼拂
ひは、大晦日の夜から始まり、爆竹をならして悪鬼をはらふのは、
元日の雞鳴と同時になので、これが四川の故郷と同じなので友達を思
ひ出したのであらう。

江陵から北上して、荆門、涇陽（いま鍾祥縣涇陽驛）、襄陽との
途に、一月以上を費したが、襄陽では諸葛孔明の宅址で「隆中」と
いふ作が出來た。

諸葛來西國 諸葛孔明が西の蜀の國に來てから

千年愛未衰 千年になるが人々の敬愛はいまだに衰へない。

今朝游故里 けさその故郷をたづねて

蜀客不勝悲 蜀の旅人なる僕は悲しみにたへられなかつた。

誰言襄陽野 誰が豫言したらうこゝ襄陽の田舎に

生此萬乘師 この萬乗の帝王の師が生れようなどと。

山中有遺貌 山中には遺影があつて

矯々龍之姿 見れば勇ましい龍の姿である。

龍蟠山水秀 龍がわだかまつてゐると山水が秀いで

龍去淵潭移 龍がのなくなると淵が移るものだ。

空餘蛟蜃蹟 いまこゝにはむなしく龍のわだかまつてゐたあとを
殘して

使我寒涕垂 僕にさびしきで涙を出させるのだ。

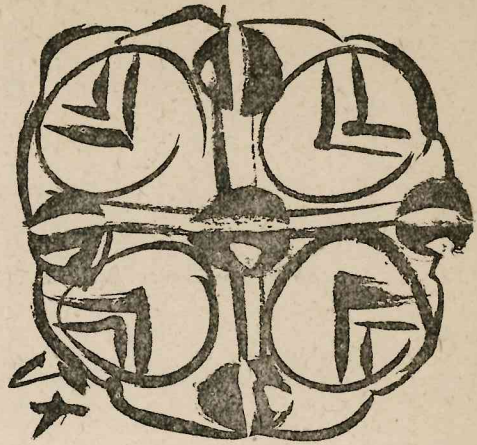
四川生れのくせに、蘇東坡は途中いたるところにある孔明の遺跡
では、ともすれば悪態をついてゐたが、この詩では本音かどうか涙を

能登の御墓

堀内民一

十二月十五日、折口信夫先生百ヶ日祭に詠へる
 年深くたまかへります、沙浜の能登の御墓の夕風ぎの色
 道頓堀、河岸のねおんが霧に沍ゆる。橋のたもとどつ占少女
 年ふかき山のしづけさ。山窪の光りに咲ける山茶花のはな
 大霜の南天の實のかやきに、ひそけさ餘る師の百ヶ日
 師はいまはしづかにいます。咳かひ吾を贍たまへる大ぎ鬚髯
 あたらしき墓碑は、透明な松林にひそけかりけり。陽のあたる冬海
 冬波の音昏れやすき御墓への松風きこゆ。年深き夜に
 冬波の音にまじらふ松かぜはみ靡なるらし。きつつけずあれ
 大倭神の恩繩に心へよと、われにたまへり「荒魂あれ」(秋風戦線序)
 美しき道義の詩篇。生りいずる日本の春、つひにすべなし
 おぼほしく師の後姿のたつみちは、飛鳥の島の秋くさの道

流したといつてゐる。
 この詩で少年進士の得
 意氣な高慢面を剝いだ
 やうな氣がするの私
 だけであらうか。こゝ
 から唐州(いま河南省
 唐河縣)葉縣、許州(い
 ま許昌)尉氏を経て、
 一行は二月になつてか
 ら汴京に着いた。襄陽
 で年を迎へたので、東
 坡はこのとき二十五歳
 になつてゐた。
 (東坡傳の一節。こ
 の稿を書いたのは、
 保田與重郎君の代々
 の菩提寺なる大和國
 櫻井町の來迎寺の南
 の縁側でだつた。い
 ま清書しながら思ひ
 出すことが多い。保
 田君に獻する所以で
 ある。)



祖國正論

暴力の侵潤と潜在 松川事件裁判に關する感想

○
 最近の物情の比較的顯著な傾向として、暴
 力の潜在的な激化、つまりその激發を待望す
 る心持(客觀的には絶望的末期的な心情)
 が、蔓延してゐる氣配がある。新春に於ける
 群衆の動きの中にも、この過激を察した。今
 年元旦に日本銀行總裁が、日本經濟の現状は

あたかも船底に穴のあいた船の中で宴會して
 るるやうだと語つたが、これも一つの日本の
 状態であつて、別箇の觀點に立脚し、別箇の
 大衆の氣持を流れてゐるこの焦燥に、明察を
 下す時務の達人と時局の要人のないのが憂慮
 せられる。眞の日本がどこにあり、どこを向
 いてゐるか、といふこと。今一つは、どの日

本が眞の日本を形成してゆくかといふこと、
 一これら日本自立の構想は、今年こそ實行
 として樹立せられるべきであると思ふ。
 こゝに云ふ暴力とは、共產黨のそれのみで
 はない、新聞紙上を賑はせる巷の暴力でもな
 い。しかし共產黨が、火焰ビンなどを以て、
 一人天下の暴力をほしいままにした時代は過



おんみ
身をかくして
久遠の闇に
立ち給へば
われら人の營みは
その衣の壁に散りて
たまゆら
かつ結びかつ消えて
かぎりも知れぬ

あゝわが手に作り
わが耳に聴きしもの
なべてわがものにあらざれば
わが胸のうちにありて
鳴りやまぬものよ
流れよる木ぎれのごとく
このときをむなくあれ。

大いなるもの
わが内を過ぎ
天地の
わがうちにひらくに。

編輯後記

謹みて新年のお慶びを申し上げます。
年の始の手ぶりに神世がおもはれる、と宣
長は歌つてゐるが、山深い美伯國境のわが家
郷では暮からの雪が清淨とつもり神世より一
貫するくらしの手ぶりにひとしほの思ひがあ
つた。この二日、打日さす都では四十萬の東
京市民が玉砂利を踏んで朝賀に参入し、紙上
の航空寫眞にその状を見れば、その密集の動
きは、怖ろしいばかりの光景であつた。これ
はまさに國史未曾有の盛事と思はれたが、そ
のあまりの出入のために二重橋前にて十數人
の死傷が出たことは、忽ち未曾有の不祥事と
なつた。かえりみて深く謹まねばならぬ。
今の皇居は、明治の初め東京行幸の時に
在所となり、大正大地震直後の詔によつて、
帝都としての基礎が安定したものである。さ
きにわが祖國社から刊行した、日野西侍從謹
話・「明治天皇の御日常」の中に、明治天皇
が千代田城を好まれなかつたと拜される意味
ぶかい記述が見えてゐる。千代田城はもと幕
府の城郭である。兵を防ぎ、威武を示して大
衆を懾服した覇者の遺構に他ならぬ。わが往
事のみやこぶりに於て、君と民の美しい關係

には、その不安はなく、それらの空しさを實
證するものが、わが國がらをなす永徳の精神
であつた。

しかもこの地湧の精神は、いまま多數の國
民のくらしと手ぶりとそのひそかに深い思ひ
の中に鮮やかに生きてゐるのである。ただ、
今日の政治やジャーナリズムと云われてゐる
ものがいま國を支へ、それを衛つてゐるもの
の精神の高さとその叡さを知らぬだけであ
る。われ／＼は過去五年の間に、アメリカ軍
の面前で、日本人が生き残つてゐることを示
してきたが、今年以後はその日本人が日本の
主である事實を示す方に向ふつもりである。
いまや、國を思ふ至醇の言論と行動は、この
精神を啓發し増大して、かの口吻を摸し、妄
説を弄する輩と賣名射利の徒をおのづからに
しりぞけてゆくであらう。

「祖國」五月號は明治の御代に不遜の氣宇
を吐いた、宮崎民藏、滔天の記念特輯號とす
るつもりである。民藏は世界の破局を豫期し
てアジアの覺醒を叫び、滔天は大陸の革命に
狂奔してつひに老虎を動かす。この時、九州
熊本の紫垣隆翁によつて、その遺業顯彰のも
くろみが立てられ、五月十五日、熊本市公會

堂ホールに於てその祭典をあげられると聞
く。「時に臺灣中國政府内の故人や孫文とゆ
かりの深い蔣總統他要人にて招へいの使
が出されることになつており、香港、イン
ド、比島などへも連絡が飛ぶはず。」と熊本
日日新聞は報じてゐる。われ／＼もアジア各
地からの寄稿を、その特輯號に希望してゐ
る。日本人が日本の主たるとき。アジアの民
はアジアの主でなければならぬ。(柳井記)

「祖國」第六卷 一月號
定 價 五 拾 圓
送 料 四 圓
昭和廿八年十二月廿五日印刷
昭和廿九年一月一日發行
編輯兼 玉井 一郎
發行人 京都市下京區油小路
通 松原上ル
印刷所 松崎印刷株式會社
印刷人 松崎 秀 雄
京都市中京區御池通
兩替町角
發行所 まさき會祖國社
電話 本局一四二〇
四六三五
振替 京都七〇一七

絶對平和論

定價 二七〇圓
送料 一三〇圓
三〇圓

「獨立」の指導者の第一の資格は何ぞ
それは毅然たる自主の精神である。
第二の資格は何ぞ
自主の精神を支へ守る自主の思想である。
第三の資格は何ぞ
自主の思想を自ら表現しうる種々の能力である。
一言に云へば？
一言に云へば、東洋の覺醒である。

祖國社 編輯
棟方志功 裝幀

學士院會員 文學博士 池内宏著
東京大學名譽教授

滿鮮史研究 (上世編)

明治に拓かれたわが東洋學は、常に世界の最高を示し來り、わが池内博士、その傳統の最後の最大權威として内外に周知する。しかも博士の生涯の營爲は、滿鮮史研究中世篇の二冊が以前に上梓されたのみである。頃日博士逝去の報を受く。吾人は戦後混乱の中に本書を上梓し、世界の學界に贈り得たことを僅かに慰めとする。

A5 五七〇頁 本クローヌ裝函入
定價 一、二〇〇圓 送料 五〇圓

保田與重郎著 棟方志功裝畫

日本に祈る 評論集

如是云ヒテ、余ノ魂ハフルヒ、心泣ケリ。身内裂ケ、腸斷チ、泪垂ル、ヲ如何セン。過ギシモノハカクモ切ナキヤ。アハレ實ニカクモ在ルヤ。汝ハ云フ、遠ザカリユクモノノ、ヒソカナル聲モテハルカニ云フ、然リト云フ。カレ余ハ口吟ム、泣ク勿レ、文人ノ尋常ノミ。サレドカ、ル極ミモ、大夜ノ時ノユキノオゴソカサヨワガ鎖魂歌ニキコエヨ。

B6 二八九頁 定價二五〇圓 送料三〇圓

淺野 晃著 棟方志功裝畫

石川啄木 評傳

終戦後五ヶ年間、北海道勇拂の曠野に潛居せる著者は、その隱忍の間、思想家としての成熟を完成しつつ、鬱結の情の礙るところ、独自の詩風を示せり。重忠にあつて生死の境を往くこと數度、思想家たる、詩人たるの重量感愈々増大す。本書はその間著者唯一の論策にて、自ら巡歴せる近代の諸思想と、世界史的なりし時代觀を自在に馳驅批判せり。わが文明批評上の壓卷なり。

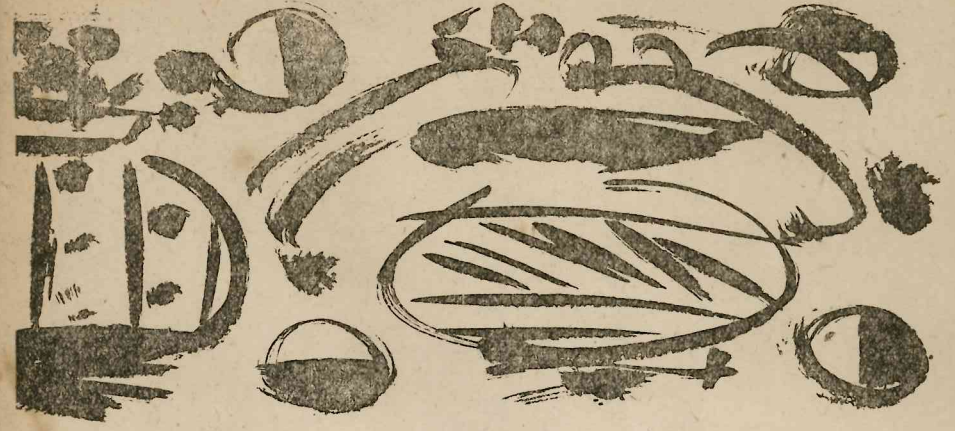
B6 一九〇頁 定價一六〇圓

祖國 (第六卷 第三號)

昭和二十九年四月號



祖國社



祖國正論 魚伊お宣火海風日悲愛 藤の静の 春愁 東山 西す 秋空 俳句 野地 箱根 梅 藤の静の 旗言風子歌 戀古美 亂世の美 兵車 關雪畫伯の絶筆

浪浅瓶冬春音菜妹春祝多南た嗽返山殘志野山 雀と高麗 居野貴水と 見曇もせ 瓜ら作ち 武の婚ふる かののの 春のの ば譜花苑雪 花家夏歌道りねりず事抄山抄麗

短歌

祖國

四月號

表紙・カット

棟方志功

目次

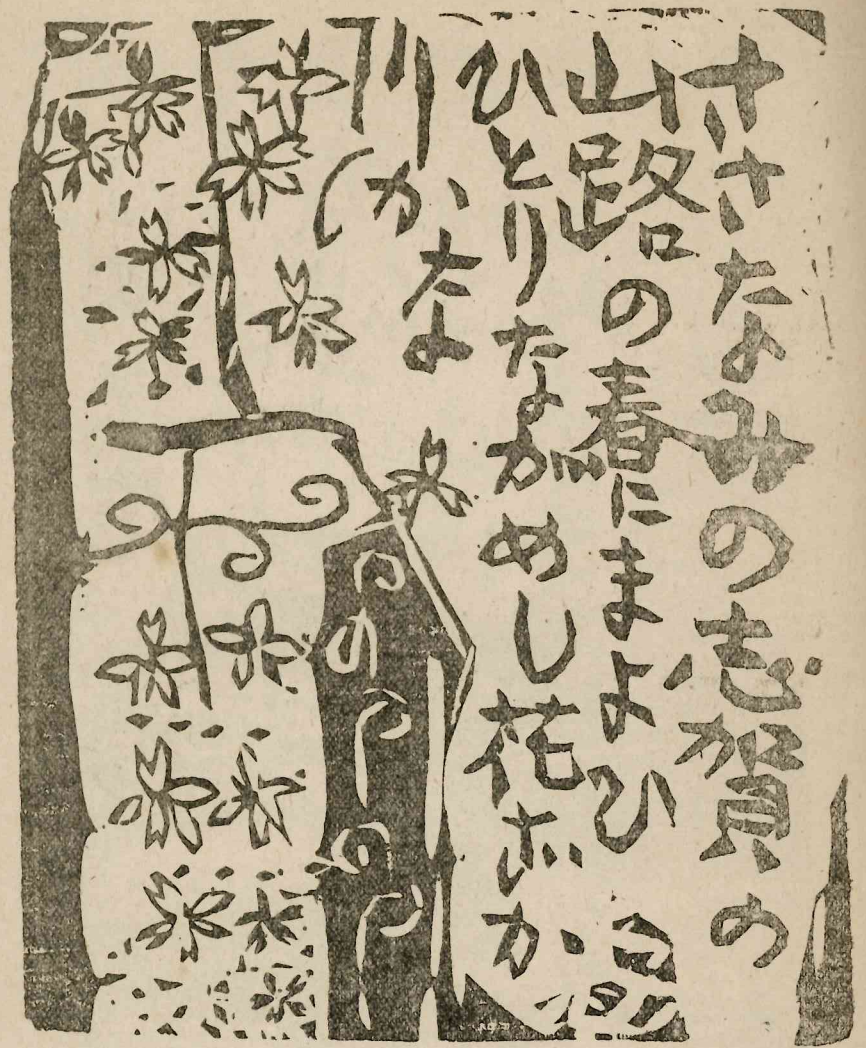
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|-----------|-----------|----------|------------|-----------|-----------|------------|-------------|------------|------------|------------|-----------|-----------|------------|--------------|------------|------------|-------------|
| 浅野 晃 (三) | 藤本 敏子 (四) | 西保 恵子 (五) | 吉村 正 (六) | 服部 三樹子 (七) | 前田 晋羅 (八) | 齊藤 兼輔 (九) | 田中 克己 (一〇) | 小高 根二郎 (一一) | 林富 士馬 (一二) | 知念 榮喜 (一三) | 棟方 知與 (一四) | 奥西 保 (一五) | 木下 茂 (一六) | 吉村 淑甫 (一七) | 柳井 三千此呂 (一八) | 中河 與一 (一九) | 房内 幸成 (二〇) | 保田 與重郎 (二一) |
|----------|-----------|-----------|----------|------------|-----------|-----------|------------|-------------|------------|------------|------------|-----------|-----------|------------|--------------|------------|------------|-------------|

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|-----------|------------|------------|-------------|
| 山川 京子 (二二) | 春日 野茅花 (二三) | 宮崎 智恵 (二四) | 片山 恒美 (二五) | 大伴 道子 (二六) | 前川 緑子 (二七) | 森房 子 (二八) | 嘉納 親 (二九) | 緒方 親 (三〇) | 高鳥 賢司 (三一) | 栢木 喜一 (三二) | 高橋 利一郎 (三三) | 泉内 民一 (三四) | 堀方 志功 (三五) | 棟方 志功 (三六) | 水谷 川忠 (三七) | 大川 鹿 (三八) | 前川 佐美 (三九) | 清水 比庵 (四〇) | 尾山 篤二郎 (四一) |
|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|-----------|------------|------------|-------------|

鎮花抄

歌 保田與重郎

板 棟方志功

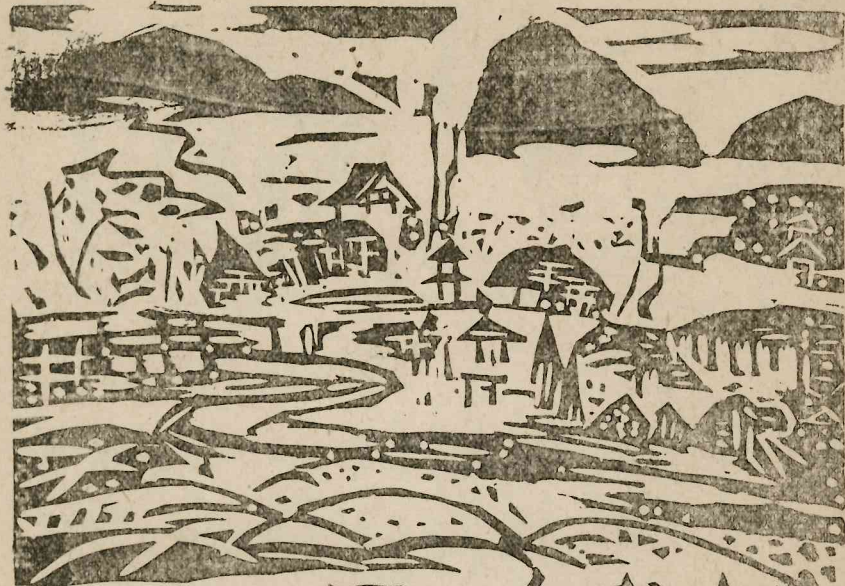


けはもまた
かくてむかし
となりなら
むわが山河
あしづみける
か

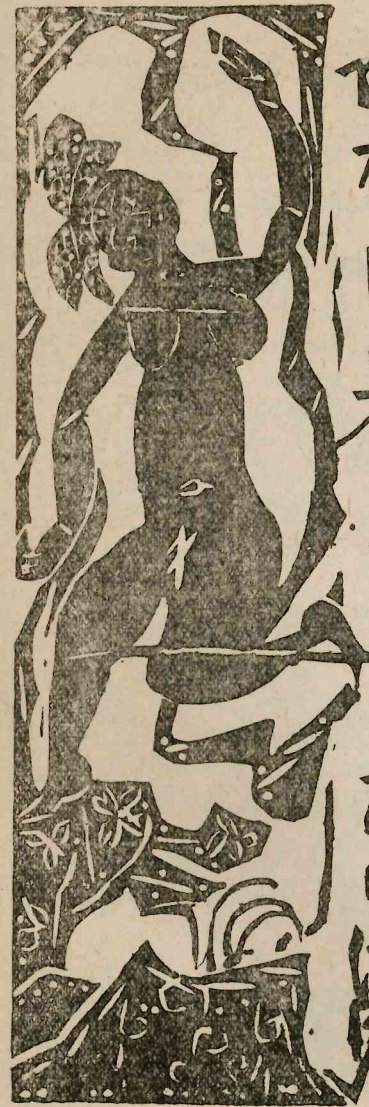


木柱の吹まくる方に
むかひゆくむかひと
もへわがわむかひ
あ






うつろみま音
 たて流る涙川
 かなしまこと
 知りにけるか
 四方の山ひかり
 みちぬうこそ
 みにかたは
 ものは
 一つたよりけり




未通来しが朱裳すこひま
 ひさかたの天ひとすびす時す
 ぎにけり
 山かはを幸ちのほりかく夕烟
 ゆか日の本のくらしなりけり

伊藤^東靜雄に

田中克己



二年前の今日あたり
僕ははじめて君の病室を訪れた
電車を下りるところから粉雪が降りはじめ
病室は廣くて寒かった
しやがれた聲だが君は元氣に
アメリカから新薬が来てそれを飲めば
快方に向ふのだと話してくれた
瀕死者の語る未來は聞くにたへない
僕は大雪になつた窓の外に目をそらせた
一年まへには君の死のしらせを受けて
君の家を訪れしばらく待つと
まあ子も夏樹も奥さんも
割合と元氣で歸つて來た



今ごろ君の屍體は燃えてゐるのだ
僕は匆々に別れを告げた
まあ子がバスの停留所まで送つてくれたが
終發が出たあとで驛まで歩き
道をちがへて遠くの驛に着いた
その日もたしかに寒い日だつた
けふは一周忌で友だちと
そろつてゆくので氣が樂だが
市中も野道もやつぱり寒い日だ
お經のあとお酒が出てみんな飲む
禁酒の僕は果物を食べてゐる
飲んだあと肩をいからす癖があつたね
君はもう飲まないでゐられるのか
死者たちへの追憶でとりかまされて
僕はひどくひげめを感じてゐる
(まあ子も夏樹も僕は見てやれないが
ひどく元氣で晴々してるよ
君はそれをどこから見てゐるのか)
僕の暗い顔も見えてくれ
僕は君がうらやましくさへなつてゐるのだ

たちである。しかしおまへの雑誌には、かうしたつまらぬ人間がつまらぬことをかくから、同席をお断りするといふのは、執筆者の自由である。編輯者は、どんな権力からも、言論干渉をうけないといふことを知っておく方がよいと思ふ。平和條約成立後、この再教育がまた一般ジャーナリズムに及んでゐないやうだ。もつともジャーナリズムもまだ、獨立自立してゐなかつたのだ。

しかし誰がそれをいふ場合でも、作品がつまらぬとして論ずるのを抑へることは出来ない。その限りでは商賣の邪魔をする者とはいへない。しかしかういふ愚劣な作品を發表したり上梓したりするのはよした方がよいといふことを、作者にこつそりといふのは忠告だが、本屋にいふのは商賣の邪魔である。本屋は作者よりも商業や流行に通じてゐて、賣れると思ふ本を出してゐるものだからだ。賣れないと思つてもやはり商賣の必要上出してゐる、理由がある。世相人心に害があるから上梓せぬ方がよいといふことも、あまり快適な云ひ方でない。政治上の立場が違ふといふ理由で、反對派のものをいふせぬ策略をすることは、おせつかいといふものだ。

賣文商賣は成立しなくとも、言論の自由はある。賣文と言論の自由は元來兩立せぬものだ。このわかりきつたことを間違ふからいけないのだ。今日の實例を云ふと本當の小人は憲兵や警官や権力に對し、もう少し無心になるべきだ。無心になるといふことは、つねに言論の志節と良心を持して己の至誠と相對してゐるといふことだ。至誠と良心と情熱にいそがしくし、世渡りを疎とすることが、言論人の信條だ。

言論の自由や統制を云ふまへに、まづ常識でものを考へ、次に己の節操と至誠に忠ならうと努めるべきだ。つまり良心の問題である。それが言論人の第一歩の常識といふものである。戦後編輯者は、改めて新憲法の自由の項をも研究する必要があるが、そのさきに言論人たる男子の一片歌々の志を學ぶ必要がある。言論人が志を失つて、何の言論の自由ぞや。

編輯後記

こゝに諸家の詞華をあつめて、陽春詩歌特輯號として、危局に直面する我祖國に贈らうとをわれ人ももつとも喜ぶものである。我々のもつこの唯美的饗宴こそ、東洋の本質——その美の中核にふれしめることに依つて今日の人心に作用して強く浄化を起すに至るに違ひない。美こそ今日の勇氣と自信の源泉である。

ビキニの實驗からその恐るべき破壊力の一端を不氣味に示した新しき水爆の出現に、今日の世界は一段と激しき不安と恐怖を味はねばならない。平和の持續の希望を更に遙かに強力の水爆の實現に托すといふ、世界の智識の無氣力の口に、我々は我々のもつ光榮の女藝を示すのである。

説は、よみ手も少いから、出す本屋がない。

間違つた議論を、政治や黨派の力で賣りひろめてゐるやうな人間が、賣文がまづくなると、言論の自由がなくなつたといふ。そんなものは流行品の一種で、今は流行が少し變つただけのことである。言論といへるやうな言論は戦後の一般ジャーナリズムで見なかつた。いはば言論空白時代、やうやく十年にして、脱却せねばならない状態である。

戦後の言論自由の見本は、只今の國會の汚職摘發メモである。むかしは文章は經國の大事として、言論文章の自由を尊重し、文章實にその力を有したが、今日廟堂を動かし國を動かす言論を見ずたまに見たものは高利貸のメモである。戦前の親英政權は、十名の決死の青年將校の結果でつぶれたが、戦後の敗北政權は、一人の銜の高利貸が、待合の女中頭から入手したメモでつぶれるとか、つぶれぬとかいふ話である。國がおちぶれたといふわけでない、敗北政權の實體がさういふおちぶれたものだといふだけだ。我々はさういふものを本氣な言論の對象にしなかつた。我々が正論といふのは、國の正氣を喚發する言論である。

まことの言論自由といふことは、人間の各々の節操と良心の問題だ。但し節操を保つものは、それを口にするこゝろをつゝしむ。胸に手を當てて、こゝ二十年間の己の言行を省みて、しかる後に言論の自由を云ふがよい。誰でも言論

我々は我々のこの光榮の女藝を今日の水爆と同日に語り得ぬ。我々の文藝の世界は今一つの別の強力な世界を形成してゐるからである。一言に云つて唯美的世界である。今日の動亂の世界の離し出す一切の恐怖と不安を拭ひ去り、日常大自然の造化の中に人心を落着けて、清新の自信と勇氣を興へ、この不信の世界に不敗の戦を挑み得るものである。されば今日に於ても東洋と西洋は明かに別個の世界である。けふの日に我々はアジアの永遠の讃歌をうたふ。これこそ我々の享受し得る最大の喜びであり、この危機の日の唯一の光榮である。

言葉は美しくなければならぬ。美しい言葉こそ神の賞で給ふものであるといふかの東洋の文藝の精神が失はれて久しい。殊に今日の東京に於て然りである。残念乍ら最早、今日の東京はかゝる文藝を生み出し得ないのかも知れない。美神殿に東京を去つて、こゝ山紫水明の地にあつまるといふべきか。

否文藝のみではあるまい。廣く政治經濟文化の面に於て、明日の新しき世界を形成する創造力の一部を、今日の東京は喪失してしまつたのかも知れない。こゝに於て小生は作田先生の遷都の論に深く共感を味ふものである。

(玉井記)

「祖國」第六卷 第三號 四月號

定 價 八 百 圓

送 料 一 百 圓

昭和廿九年三月廿五日印刷

昭和廿九年四月一日發行

編輯兼 玉井 一 郎

發行所 京都市下京區油小路

通 り 松 原 上 ル

印刷所 松崎印刷株式會社

印刷人 松崎 秀 雄

發行所 京都市中京區御池通

兩 棒 町 角

發行所 まさき會祖國社

明治天皇御降誕百年奉祝紀念出版

元侍從宮中顧問官從二位勲二等子爵日野西資博謹述 解題 保田與重郎

明治天皇の御日常

函入特製本
定價 二百六拾圓
送料 二百八拾圓

本書は明治天皇の側近に待従として奉職すること二十五年の久しきに亘つた日野西資博子爵が、天皇御紀編纂の資料として、臨時帝室編修局に於て行ひし謹記の速記の集成である。爾来久しく秘府の奥深きに納められしものを、今年、天皇御降誕百年奉祝の微志を表すべく、子爵家の希望によつてこゝに始めて上梓されるに至つた。即ち臨時帝室編修局に於て、腹藏なく謹述せるところ、至誠を傾け、國史の正確を期す。天皇の御性格を描いて、全巻にわたつて舊來未聞の御逸話のみ。これを拝讀する國民は一様に、畏き大君の御性行に咏嘆禁じ難く景仰の念いやすきものを覺ゆるであらう。

棟方志功著

著者自裝函入特製美本

序文 保田與重郎
後記 水谷良一

板響神

原色版一頁 寫真版十二頁
定價 四百五拾圓
送料 四拾圓

世界に冠絶する日本の板畫藝術に於て、わが棟方志功畫伯は今や名實共にその第一人者であり、歐米藝苑の等しく驚異とするところとなつた。しかも畫伯の藝業たるや、その文學に於て、よく短篇小説の珠玉をなすあり、藝術の根源を説いて藝道の究極を示すものあり、風俗と人情をのべてその微を普くするものあり、そのすべてに於てつねに生命湧出、天地開闢の秘機に參ず。これによつて己の人生に應用せんか讀者必ず心ゆたかに魂太るものを自得感入せん。

昭和二十九年三月二十五日 印刷納本
昭和二十九年四月一日發行(毎月一回一日發行)
昭和二十五年一月十二日 第三種郵便物認可

四月號 第六卷 定價 百圓

昭和二十九年八月二十五日 印刷納本
昭和二十九年九月一日發行(毎月一回一日發行)
昭和二十五年一月十二日 第三種郵便物認可

祖國



棟方志功

絶對平和論

定 價 六 二七〇頁
送 料 一三〇圓
三〇圓

「獨立一の指導者の第一の資格は何ぞ
それは毅然たる自主の精神である。
第二の資格は何ぞ
自主の精神を支へ守る自主の思想である。
第三の資格は何ぞ
自主の思想を自ら表現しうる種々の能力である。
一言に云へば？
一言に云へば、東洋の覺醒である。」

祖 國 社 編
棟 方 志 功 著

學 士 院 會 員 文 學 博 士 池 内 宏 著
東 京 大 學 名 譽 教 授

滿 鮮 史 研 究 (上世編)

明治に拓かれたわが東洋學は、常に世界の最高を示し來り、わが池
内博士、その傳統の最後の最大權威として内外に周知する。しかも
博士の生涯の譽爲は、滿鮮史研究中世篇の二冊が以前に上梓された
のみである。頃日博士逝去の報を受く。吾人は戦後混迷の中に本書
を上梓し、世界の學界に贈り得たことを僅かに慰めとする。

A 5 五七〇頁 本クローズ装函入
定 價 一、二〇〇圓 送 料 五〇圓

保 田 與 重 郎 著 棟 方 志 功 裝 畫

日 本 に 祈 る 評 論 集

如是云ヒテ、余ノ魂ハフルヒ、心泣ケリ。身内裂ケ、腸斷チ、泪
垂ル、ヲ如何セン。過ギシモノハカクモ切ナキヤ。アハレ實ニカ
クモ在ルヤ。汝ハ云フ、遠ザカリユクモノノ、ヒソカナル聲モテ
ハルカニ云フ、然リト云フ。カレ余ハ口吟ム、泣ク勿レ、文人ノ
尋常ノミ。サレドカ、ル極ミモ、大夜ノ時ノユキノオゴソカサヨ
ワガ鎮魂歌ニキユエヨ。

B 6 二八九頁 定價二五〇圓 送 料 三〇圓

淺 野 晃 著 棟 方 志 功 裝 畫

石 川 啄 木 評 傳

終戦後五ヶ年間、北海道勇拂の曠野に潜居せる著者は、その隠忍
の間、思想家としての成熟を完成しつゝ、纏結の情の礙るところ、
独自の詩風を示せり。重患にあつて生死の境を往くこと數度、思
想家たる、詩人たるの重量感愈々増大す。本書はその間著者唯一
の論策にて、自ら巡歴せる近代の諸思想と、世界史的なりし時代
觀を自在に馳驅批判せり。わが文明批評上の壓卷なり。

B 6 一九〇頁 定價一六〇圓

祖 國 (第六卷 第七號)

昭和二十九年九月號



祖 國 社



祖 國 九 月 號 (通卷五十四號)

| | | |
|---------------------------|-----------|------|
| 鎮 花 抄 | 保田 與重郎 詠 | (三) |
| 青 年 蘇 東 坡 | 田 中 克 己 | (二〇) |
| 紫 垣 翁 回 想 錄 (二) | 角 田 時 雄 | (二四) |
| 巢 鴨 の 家 (八) | 長 尾 良 | (望) |
| 舞 子 が 濱 の 御 一 夜 | 木 下 茂 | (三〇) |
| 赤 城 | 房 内 幸 成 | (六) |
| 宮 崎 八 郎 | 荒 木 精 之 | (五) |
| 三 題 | 平 田 春 一 | (一八) |
| 初 秋 の わ か れ 釋 迺 空 (詩 と 人) | 堀 内 民 一 | (三) |
| 釋 迺 空 大 和 作 品 集 | 堀 内 民 一 編 | (六) |

表紙・カット

棟 方 志 功

鎮 花 抄

保 田 與 重 郎 詠
棟 方 志 功 板

五言古詩
山花紅似錦
綠柳綠如煙
春風吹綠柳
燕子剪輕盈
夕陽紅似火
晚霞映長天
歸鳥鳴林樾
牧笛響村前
牧童歸去晚
牛背負蓑眠

山花紅似錦
綠柳綠如煙
春風吹綠柳
燕子剪輕盈
夕陽紅似火
晚霞映長天
歸鳥鳴林樾
牧笛響村前
牧童歸去晚
牛背負蓑眠

雅生堂

郎



冬
の
日
は
く
れ
か
く
ほ
ど
の
身
に
沁
む
に
かなし
し

郎

雅生堂





青年蘇東坡

田中克己

嘉祐五年（一〇六〇）の春早々、再び都に來た蘇東坡は、福昌縣主簿といふ官を授かつたが、これはおそらくその名の下に俸給を支給せられる官階にすぎなかつたらう。福昌縣は洛陽の西南なる今の宜陽縣であるが、こゝのことを詠ずる作は一向に見當らない。歐陽修・梅聖俞らの試験官とは、進士の例として、師弟の關係が生じ、とりわけ歐陽修には父子知己として度々往來したことだらう。當時の汴京開封府は「東京夢華錄」の傳へるところでは、方四十餘里。ひろさ十餘丈の護龍河にとりまかれ、濠の内外には柳を植ゑ、白い垣に朱の扉、出入の城門は三重で、夜間は絶對に出入を許さず、風間とても點檢嚴重である。大内は門みな金釘朱漆、磚石の壁で圍まれ、龍鳳飛雲に象つた彫刻がところ／＼にあり、瑠璃の瓦、樓閣もみな朱塗で、帝王の居所として新參の者をおどろかしめる。市中で

は大内の東華門外が最繁華な地點で、宮廷御用の商店が棟を連ね、新花果、魚鰕、蟹蟹、鴨兔、金玉珍玩、衣類と天下の名産をならべたててゐる。京城の朱雀門から東方にゆけば、妓館があり、西の方にも妓館がある。酒樓も多くあつて、みな入口に綵樓を立て、人の出入にまかせ、こゝから百餘歩ほどは廊下になつて兩側が小さい部屋になつてをり、夕方からは燈燭を點じ、濃粧の妓女數百人が集まつて、酒客を呼びたてる。しかし蘇東坡兄弟は今度の滯京中の作品にも一向これらを詠まない。李白なら詠じただらうが、趣向を異にしたか、それとも士君子の足を踏み入れるべき場所でないとして行かなかつたか。いつれにしても大宋の首府が兄弟を詩的には、ひきつけなかつたことは明らかである。

此間、父は相變らず、朝廷の召を拒んでゐたが、子二人の名聲と相伴つて召されることいよ／＼急で、遂に試校書郎といふ官に任じられた。老泉はこの任命書を受取ると躊躇に書を上つて、改官を乞うた。理由は「上韓丞相書」に見えるが、その俸給六七貫では不足といふことのやうである。當時、中央の官に就くことは士人の極めて望んだところだが、老泉は年老い、將來の榮進は望むべくもないから、俸給のほゞ生活に當る官を得て、學問をしたい。昨年からまた易經をよみだして、易傳百餘篇を作つたが、これが完結すれば易經に關する末曾有の研究となるだらうといひ、聞きとゞけられて、この年、文安縣主簿、禮院編纂の官に改められた。文安縣は今の河北省霸縣だが、たゞその名と俸給とを興へられるだけで、職務は姚關とともに、宋の太祖以來の禮書の編纂であつた。けだし最適任といふべきであらう。

主簿

嘉祐六年（一〇六一）、東坡二十六歳。

この年、兄弟はまた／＼歐陽修の推薦で、朝廷の秘閣で試験を受けた。その出來榮えは極めてよく、東坡は第二次の對策では、「兩制書」を上つて三等に及第した。宋朝はじまつて以來、三等に入つたのは呉育だけだつたが、呉育は仁宗の時、參知政事、即ち副宰相にまでなつたのだから、東坡の得意は想像できやう。弟の方も成績よく、試験官の一人なる司馬光はこれまた三等に入れようとしたが、政治批判があまりに露骨だつたので、不遜といふものがあつて四等になつた。

かくて試験の終つたあと、任官のことがあつて、兄は大評事、

簽書鳳翔府判官に、弟は商州軍事推官になつた。たゞし弟の方は、老父が都にゐて著述に従事してゐるから、その世話をしなければならぬ、といつて就任せず、兄だけが任地に赴くことになつた。その出發は十一月、任地の鳳翔は長安よりさらに西である。弟はこれに鄭州の西門まで見送つた。離別の情は東坡の「辛丑十一月十九日既與子由別於鄭州西門之外馬上賦詩一篇寄之」がよく表はしてゐる。

逐

不飲胡爲醉兀兀 酒も飲まないのになぜ酔うてふら／＼するか
此心已遂歸鞍發 この心がもう歸る人の鞍のあとを追つてぬけ
歸人猶自念庭闈 歸る人でも父上ののみますところを念ふの
に

今我何以慰寂寞 いまわしはどうしたらこの寂寞が慰められやう。

登高回首坡墮隔 高みに登つて見送ると堤やうねがへだて
但見烏帽出復沒 黒い帽子が見えたり隠れたりするだけだ。
苦寒念爾衣裘薄 ひどく寒いので心配する、お前の着物は薄いな

獨騎瘦馬踏殘月 ひとり瘦せ馬に乗つて残月を踏んで行くなど
路人行歌居人樂 路ゆく人は歌うた人居る人は楽しんでゐるの

童僕怪我苦慟側 下男どもはわしがひどく悲しげなのをふしぎがる。
亦知人生要有別 思へば人生に別れがつきものなのは承知だが

但恐歲月去飄忽 歲月がたちまち去つてしまふのが心配だ。
寒燈相對記晴昔 寒い燈のもと相對した夜はいつまでも忘れま

蕭

夜雨何時聽蕭瑟 夜の雨にいつかまたしづかに話しあはう。
君知此意不可忘 この心を忘れてはならないとわかれば

慣勿苦愛高官職 高官高職にはあまりつきたがらなよ。
さて岐山の麗なる鳳翔に着任したが、官は判官で仕事もない。大

體、宋代の定めでは新進士は三年間、官吏の職務見習のために地方に赴かされるのである。この時の鳳翔の上官には、陳希亮といつて、同じく蜀の人で、妻の郷里なる青神縣の出、姻戚にもなるものがあつたのだから、種々便宜があつたはずだが、この人は堅苦しい人で、官吏たちが宴會してゐる場でも、この人が現はれると談笑が少なくなり、酒の味がさめて人々が逃げ出すといふほど、そのうへ若年のこととて東坡も事ごとたてつき、反抗の色を表はしたといふから、さぞ不快なことだつたらう（「陳公弼傳」）。

着任後しばらくは、上官や同僚との交歡、それに次いで見物に日を送つたことだらう。こゝの名所を數へ上げての作なる「鳳翔八觀」中、東湖の詩は「吾家蜀江上、江水清如藍」といふ句から始まつて、故郷の水の美しいのに對し、汴京をはじめ異郷は塵が多く、まして岐山の下なるこゝは風物がつまらず、山は禿山で水は濁つてゐるのをきらつたが、はからずも城東數歩のこの湖に來て、水の美しいのに驚喜したといつてゐる。

見物のあと、着任後わづか一ヶ月で、新判官どのは、官舎の北の空地に亭を建てた。亭の前には河の水を引き、長さ三丈の池を掘

り、南の方へも渡り廊下を作り、またその両側に小さい池を掘り、池には蓮を植ゑ、魚を飼ひ、池のほとりには桃李杏梨棗、さらに櫻桃、石榴、櫻、槐、松、檜、柳など三十餘株を植ゑ、酒一斗と牡丹一叢とをかへとして、亭の北に植ゑた。すぐに弟にこのことを報せてやると、詩が來たので、またこれに和して二十一首が成つた。のちに喜雨亭と名づけたのがこの亭である。

嘉祐七年（一〇六二）、東坡二十七歳。

喜雨亭を造つたのは、たぶんこの年の初のことであらう。古人がみなこれを前年のことに係けてゐるので、前に記したが、歳末でもあり、着任早々でもあつたから、これは年が改まつてからのことだつたに相違ない。大晦日には都の弟が詩を寄せた。その到着は新年になつてからであるが、兄はすぐその韻に和して近況を報じた。「次韻子由除日見寄」がそれであつて

別

薄官驅我西 安月給に西へ追ひやられ

遠利不容惜 遠き別れも惜むことを許されぬ。

方愁後會遠 また會ふ日の遠いことを愁へるばかりで

未暇憂歲夕 歳の暮の心配なぞするひまはない。

強歡雖有酒 しひて歡ばうといふのでは酒があつても

冷酌不成席 冷くて一向に味がな。

秦烹惟羊羹 この地の料理は羊のあつもの

醜饌有熊膳 それに熊の乾肉があるだけだ。

念爲兒童歲 おもへば子供だつた正月は

屈指已成昔 指折りかぞへれば昔のこととなつた。

已

往事今何追 昔のたのしさはもう追ふことは出来ない

忽若箭已釋 箭が弦を發してしまつてからと同じだ。

感時嗟事變 時に感じて物事のかほりをなげく

所得不償失 得たものでは失つたものの償ひにならない。

府卒來驅離 府の下役が來て追離をする

嬰鏃驚遠客 年寄ながら元氣で旅人わしを驚かせる。

愁來豈有處 愁ひが來てゐるだけで魔物などゐやしない

煩汝爲履磔 どうぞおまへこの愁ひをはらつておくれ。

寒梅與凍杏 寒梅と凍つたあんずと

幽夢初似麥 やはらかい芽ははじめは麥に似てゐる。

攀條爲惆悵 枝によぢのぼつてはうらみいたむ

玉蘂何時折 その花はいつの日にか折ることができると。

不憂春豔晚 春色の遅いのはうれへないが

行見棄夏蕞 夏の果實の種子はゆくゆく棄てられる。

人生業樂耳 人生は樂しみさへすればよい

安用聲名籍 名聲の揚るのなぞ求めない。

胡爲獨多感 どうしてひとりてくよと感して

不見膏自炙 膏が明りを立ててなくなることに氣がつかかなかつ

たか。

詩來苦相寬 おまへの詩が來て苦しみもゆるまつた

子意還可射 おまへの氣持は遠くまでとゞいたよ。

依依見其面 ぼうつと顔が見えて來て

疑子在咫尺 まぢかにゐるのかと思ふ。

兄今雖小官 わしはいま小役人ではあるけれど

幸忝佐方伯 さいはひ太守さまをおたすけさしていたゞいてる

北池近所鑿 北に池を近ごろ掘りさげて

中有泝水碧 中には泝水の青いのをいれた。

臨池飲美酒 池にのぞんでうまい酒をのむと

尚可消永日 永い日もやつとすこすことが出来る。

但恐詩力弱 たゞ心配するわが詩の力が弱く

闕健未免餒 一心にやつても負けはしまいかと。

詩成十日到 おまへの詩は出來てから十日で來た

誰謂千里隔 千里もへだたつてゐるとは誰のことばだ。

一月寄一篇 一月に一篇づつ寄せてくれよば

憂愁何足擲 憂ひもなくなすに十分だ。

二月になると、詔が出て水害のあつた地方では囚人の特赦がある

ことになつた。鳳翔府もこれに該當してゐたから、東坡は命ぜられ

て南部の四縣に赴いた。その足どりは子由に送つた五百言の詩にく

はしく記されてゐる。

秋になつて九月九日の重陽の節句には、「壬寅重九不預會獨游普

門寺僧閣有懷子由」の作があり、九月二十日には「微雪懷子由弟」

といづれも都の弟を懷ふ作をなしてゐる。前にも述べたやうに、上

官の陳希亮との間がうまくゆかない。重陽節に招かれなかつたのも

そのせいであらう。「客位假贗」といふ詩でも

謁入不得去 面會のとりつきが行つたからには去るわけにはゆ

かない

兀坐如枯株 肩をそびやかして枯木のやうに坐つてゐる。

豈惟主忘客 主人が客のことを忘れただけでなく

今我亦忘吾 わしも自分のことを忘れてしまった。
同僚不解事 同僚は世間のわからぬ男で

慍色見髯鬚 怒りの色が髯鬚にあらはれた。
雖無性命憂 怒つて去つても生命の危険はないが

且復忍須臾 まあしばらくのことだ辛抱したまへ。

といひ、陳希亮の無禮を同僚の王彭が怒つたのをなだめてゐるやうには歌つてゐるが、不快感に東坡の方が強かつたらう。ますます都の弟がなつかしい筈である。この九月二十日の詩の中、第二の方が特にその氣持がよく表はれてゐる。

江上同舟詩滿篋 揚子江を舟で一緒に行つたときは詩が篋に滿ちた

鄴西分馬涕垂膺 鄴州の西門で馬首を分つたときは涕が胸に垂れた。

未成報國慚書劍 まだ國に報ゆることも成らず學んだ書と劍とに恥かしく

豈不懷歸長友朋 歸りたいは山々だが友だちに笑はれるのがこはい。

官舍度秋驚歲晚 官舎も秋をへてもう年の暮で寺の樓から雪景色が見えるがともに登る人もない。

遙知讀易東窗下 はなれてゐてわかる、東の窓の下では易經をよみ

車馬敲門定不塵 車馬で来た客が門を叩いても塵はなさらぬことは。

易經をよみ客を謝するのは、もとより父蘇老泉である。十一月になると、鳳翔には大雪が降つたが、東坡はこの時は病んでゐて雪見も出来なかつた。子由が商州の任に赴かないですましてしまつたことを聞いての詩三首は、この病床での作である。その第二によると、この時の商州の令は後日、新法黨の首領として、東坡兄弟の敵となる章惇だが、このころ東坡は彼から商州の人民は子由の赴任を望んでゐると聞いた。

赴任後、滿一年たつてこの年も暮になつた。蜀の慣習では、年末には饋歳、別歳、守歳といつて、三行事がある。異郷にあつては風俗も異り、知人もなくて、今年はこの慣習も行へないのが残念だとして、東坡はまた三首を作つて弟に寄せた。饋歳は歳暮の進物、別歳は忘年会、守歳は大晦日に徹夜して賑やかにすごすことをいふのである。三首の中では「饋歳」が面白い。

己 農功各已收 農家はみなもう收穫がすんで歳事得相佐 正月の用意を助けあへるやうになる。

爲歡恐無及 お目出度にまけてはならぬとて假物不論貨 掛けで物を買つて値段も問はない。

山川隨出產 山や川の出来しだいであり貧富稱小大 貧乏人と金持とでは多い少ないがある。

貧穢巨鯉橫 鯉には大きな鯉が盛つてあるかと思へば發龍雙鬼臥 龍をあげると鬼が二匹あたりする。

富人事華麗 金持はぜいたくなものばかり考へ綵繡光翻坐 あや糸や刺繡したものであけるとまばゆい位。

貧者愧不能 貧乏人は出来ないと恥ぢながら

座

鹽

襪

宜蠶使汝爾如鹽 「このおふだは蠶に宜しいまゆが繻のやうに大きくなる

宜蕃使汝羊如麴 このおふだは家畜に宜しい羊がくじかのやうになる。」

路人未必信此語 みなこの言葉を信じるわけではないが強爲買服讓新春 いやいや買つて新年の〇ひにする。

道人得錢徑沽酒 道人は錢を手にするとすぐ酒を買つて酔倒自謂吾符神。酔ひつづれていふ「おれのおふだのよくきくこと。」

「和子由蠶市」はいふ 蜀人は衣食にいつも苦しむ蜀人衣食常苦艱 といふのは遊びに出れば還るのを知らないか蜀人遊樂不知還 らだ。

千人耕種萬人食 千人が耕作して萬人が食ひ一年辛苦一春閒 一年辛苦して春だけひまだ。

閒時尙以蠶爲市 ひまな時にも蠶のために市をする恐忘辛苦遂欣歡 辛苦を忘れて楽しむためらしい。

去年霜降斫秋荻 去年は霜の降るころ荻を刈つたが今年霜積如連山 今年は蠶簾にして山のやうに積む。

破瓢爲輪土爲釜 破れふくべで輪を作り土で釜を作つたのを争買不啻金與執 争つて買ふこと金やねりぎぬを買ふ以上だ。

憶昔與子皆童髯 思へばむかしおまへと子供だつたころ年年廢書走市觀 年々正月には本をよむのをやめて市に行つ

卮

何人聚衆稱道人 どのどのいつだか人を集めて道人と稱し遮道賣符色怒噴 道をさへぎつてお符を賣るその顔は怒つたや

鳥

市人争誇巧智 市びとはわるぢを争つて働かすが
野人嗜啞遭欺諷 田舎者は物いへずあざむかれた。
詩來使我感舊事 おまへの詩が来ておれは古い事を思出し
不悲去國悲流年 國をはなれたのは悲しくないが過ぎた年月が
悲しい。

三月には、都で仁宗皇帝が崩じ、皇族の一人が後を嗣いだ。これが英宗皇帝である。このことに關しては、東坂の詩も文も何ら傳へない。

七月には礪溪といふところへ雨乞ひに行き、九月には終南山中の太平宮に赴いた。これはその道經を讀みに行つたのである（「讀道藏」）が、出發前に作つた詩「將往終南和子由見寄」で見ると、よほど不平なことがあつて、それをまぎらすのを兼ねてだつたやうである。歸途には快風の天和寺にも寄つたが、そこでの詩の註を見ると、妻をつれてゐたことがわかる。詩人の性質として不平が多いのもやむを得ないが、夫婦づれの官費旅行では結構な御身分でいひたくなるではないか。

秋冬の境には南溪の竹林の中に一堂を構へて避世堂と名づけた。十二月にはこゝへ雪を見に行つて小酌した。これでこの年も暮れたのである。

ひるがへつて都の様子はといふと、弟が一々しらして來るのだが、宜秋門外の南園の家では、父が禮書の編纂に一心だつたが、この頃の世情はつむじ曲りの老人の拮にさはることが多かつた。中でも八月に知制誥王安石の母が死ぬと官吏たちはこぞつて弔問にゆ

情的な見方であらう。

大體、王安石の人の由來たるや、その真欲恬淡、人みなが中央の官職を望むのに、しばしばこれを辭して地方官で甘んじてゐたこととか、弊衣破帽、垢だらけのまゝでゐて平氣だつたとか、宴會ですゝめられても絶對に酒を飲まなかつたとか、熱心な勉學ぶりとか、考へやうによつては拮にさはることが多い。好惡の情の強いのが常なる詩人として、老泉の嫌惡も無理由ではない。とまれ孝をもつて最高の倫理とする國で、その主義によつて育てられて來た東坡兄弟と王安石との關係は、父のこの感情によつて宿命的に決定した。蘇子由の如き、皇帝の策問に對して、不遜のそしりを受けるほどの當時の政治に不満だつた者も、王安石が政治をとるとならば、否應なしに反對せねばならなかつたのである。

王安石が母の喪に服すると辭職して、その第二の故郷ともいふべき江寧（南京）に歸つて行つたのは、この年八月のことだつた。その喪が早く終つて歸京する日を待望しつゝ、官僚たちが見送つた中に、東坡の一家だけは加はつてゐなかつたのである。

治平元年（一〇六四）、東坡二十九歳。

正月にはまた章惇を案内して熱屋縣内を見物し、十一首の詩を作

屋

り、三月には城の東北の大老寺に遊び、七月には岐山の醜の周公廟

き、老泉にも行くことをすゝめる者があつた。前から王安石の人物に反感を抱いてゐた老泉は行かないばかりか、「辨姦論」を書いてこれを大姦となした。一體、王安石とはいかなる人か。こののち蘇東坡兄弟の運命を左右する人について、すこしく記さねばなるまい。その人物は宋明清を通じて性急なる改革者、偏狹なる黨人、仁義の王道をすてて富國強兵などといふ霸道に奔つた者、祖宗の傳統を破り新奇を策した者、として考へられ、のちの國難さへそのせいとされた。野史小説の類は引くに及ばない。正史たる宋史の王安石傳さへもこの種の批判者である。しかるに清末に梁啓超が出て、戊戌の改革を企てて失敗したその師康有爲と王安石との境遇の相似から、これを讚美する傳を書いて以來、王安石の人物評價は忽ちにして一變した。もとより五千年の傳統たる君主制の廢止、歐米文化の採用といふ民國革命が、この風潮と併行してゐることは言を俟たない。しかしこれらのことはさしおいても、公平なる日本の史家さへ王安石を支持する側に傾いてゐる（宮崎市定博士の諸論文並びに佐伯富氏「王安石」）。かく公平な眼より見ても愛國者であり、有益にして適切な改革をなさんとした大政治家たる王安石に對し、まづ非難の火の手を切つた人が蘇老泉であることは、彼のためにも惜むべきことであり、この後の黨争による國內の動搖に關する責任さへも問はれねばなるまい。しかし蘇老泉も詩人である。彼の敏感なる腦裏には、いかなる改革にもつきもの社會不安が豫感されたであらうし、また現在の王安石讚美の官僚どもの輕佻浮華への立腹もあつたらう。王安石の人の嫉妬とか、保守反動、頑迷固陋とか考へないで、むしろ詩人の生理的反感と考へてやるのが、いくらか同

に詣でてそれ々詩が成つた。十月には長官の陳希亮に招かれ、その官舎の後園にある凌虛臺での宴に列した。この時から陳希亮への反感は急に消えうせた。しかしその理由はわからない。

十一月にはまた熱屋縣に獄に行き、大鹿や兎を炮り焼き豪飲して歸つた。十二月には三年の見習の任期がいよいよ終り、大喜びで鳳翔を出發して都への途に上つた。華陰まで來ると、弟にまづ詩を寄せた（「華陰寄子由」）。大喜びの様子がこの詩でうかがはれる。

三年無日不思歸 三年間、一日として歸るを思はぬはなかつた
夢裏還家旋覺非 夢で家に歸つてしばらくして本當でないのに
氣ついたりした。

驪酒送寒催去國 驪月の酒で寒拂ひをしても國を離れること
を思出し
東風吹雪滿征衣 おまへのゐる東からの風は雪を吹いて旅衣に
満たす。

己 三峰已過天浮翠 華山の三峰は空に浮いた翡翠のやうだがもう
通り越し
四雨行看日照扉 四方は扇がひらくやうに日に照らされてあけ
る。

速 里旅消磨不禁盡 一里塚など消えうせてもかまはない
連携家餉勞駢駢 家への辨當をもつてすぐ馬車の世話になら
う。

汴京に着いたのは大晦に近く、三年ごしの話は、父子三人の間で
いつまでもつづいたことと思ふ。

治平二年（一〇六五）、東坡三十歳。

歸京した東坡は登聞鼓院の判官に任じられたが、実際にはこの職に就かなかつた。英宗皇帝は即位の前から東坡の名聲を聞いてゐたので、唐朝の時のやうに翰林院に入れ知制誥の官を興へやうとされた。

支宗が李太白に賜つたと同じ待遇である。この思召しを承ると宰相の韓琦は

「賦の方は遠大です。他日かならず國家の用に立つことと存じますが、朝廷でまずこれを培養なすつて、天下の士がみなこれを慕ひ、朝廷のお用ひになるのを待望するやうになつてから、お用ひになればみな反対しません。いま急にお用ひになれば、然らずと思ふものもあつて、彼を煩はすことになりませう」と反対した。英宗は、それでは修起居注の官ならどうかと訊ねた。知制誥は天子の詔勅を起草する官、修起居注は天子の言行を記す官でもと最近侍の官である。韓琦はこれにも反対して館閣の官が宜しからうといひ、また召して試験するやうにとすゝめた。

英宗は

「試験などといふものは、能否のわからない者に對してのことであつて、賦の如きは不能といふことがあるか」

といつたが、韓琦は聽かず、試験を行つたところ及第して直史館といふ官に任ぜられた。かく頑強に反対した韓琦に對し、東坡は「公のごときは人を愛するに徳を以てするといへる」と喜んだといふ。いかにこの頃の廷臣、ならびに一般士人の傳統になつて、先例をやかましくいつたかが、この一事を以てしても明らかである。

館

史館は崇文院に屬する三館の一つで、その職掌は國史編纂、まつたくの閑職であるが、こゝにある中には中央大官との親近の機會が得られ、他日の昇進に便なので、當時の官更たらんとする者みな望む官であつた。たゞし詩の種子になることは少いと見え、この官に就いてからの作は、凡作二首のみである。

五月には妻が死んだ。前述の如く、隣の縣の生れで、とついで来た時は十六歳、同棲十年以上で、この時は二十七歳、後には遇といふ子をのこした。東坡の悲嘆はいかほどたつたらうかと思ふが、「亡妻王氏墓誌銘」を作つただけで、詩は一首も見えない。見えなものは作らなかつたことだらう。西洋人ならもとより、唐の詩人でも作つたらうと思ふ哀歌を作らないとは、詩に對する考へ方がかうもちがつてゐるのがふしぎである。たゞ墓誌銘には前述の如く、新婚當時、勉強にいそむ夫の傍に侍してふとわかつた賢さを記した次に、鳳翔にゐるときも、家の外での夫のあやまちを聞くこと、「父上と離れておいでゆゑお憤みになるやう」と諷め、また來客があると屏の向うで立ち聞きをして、その人の去つたあとで行ふ批評が正しかつたといふ。哀詩を作らないには大不満、墓誌銘もつと情の溢れたものにしてはしかつたが、東坡の悲しみは口外しないだけにかへつて深かつたか、この年は他にも作のない中に暮れた。

治平三年（一〇六六）、東坡三十一歳。

東坡は去年に同じく都にゐて史館につとめてゐる。

四月、父が死んだ。五十八歳であつた。勅命によつて著作してゐた「太常因革禮」一百卷はすでに完成してゐたが、上呈することに

常

至つてゐなかつたのである。英宗皇帝はその死を悼み、光祿寺丞の官を贈り、役人に命じて舟の用意をさせ、死骸の蜀にかへるのを扶けさせた。墓誌はその知己だつた歐陽修が書いた（居士集三四「故霸州文安縣主簿蘇君墓誌銘并序」）。

治平四年（一〇六七）、東坡三十二歳。

東坡兄弟は郷里でともに喪に服した。八月、父の柩を眉州の安鎮郷可麗里に葬つた。その隣には母程氏の柩を武陽から改葬し、八歩はなれたところには、東坡の妻王氏の墓が建てられた。

都ではこの年正月、英宗皇帝が崩じ、皇太子が即位した。これが神宗である。神宗の即位とともに政界の空氣が一變した。神宗は年少氣鋭、早くから萎靡沈滞した國勢にあきたらず、政治の一新を考へてゐたが、即位するやたちにかねてから意中に置いてゐた有爲の政治家王安石を拔擢して翰林學士とされた。彼はこのとき江寧府（南京）の知事をしてゐたのである。

熙寧元年（一〇六八）、東坡三十三歳。

喪が明けた。東坡は父のために閣を造つた。その願末は「四菩薩閣記」に見えてゐて、僧の帷簡といふものが、亡き人のために施しをするとなら、甚しく愛して捨てるに忍びぬ物をもつてすべきだといつたが、父は好物とてなく、たゞ晝だけを好んだので、弟子たちも争つて値をかまはず求めて贈つた。その晝の中で、唐の吳道子の描いた菩薩の像四枚があつて、これは十六枚一そろひの中、戦亂にも焼け残つたのを東坡に見せた者があつたから、錢十萬で買ひ求め

たのである。これこそその條件にかなふと思つて帷簡に興へると、彼は百萬文で大閣を造つてこの繪を藏することとし、東坡はまたその二十分の一を助けたのである。これが十月のことで、閣の落成は翌年のことだつた。

都では神宗皇帝の待ち望んだ王安石の入朝がやつと四月に實現した。彼は最初の謁見の時、帝から當今、何をまづなすべきかと問はれると、「術を選ぶをもつて先となすべし」と答へ、その術は簡明なる堯舜の法だと述べて嘉納され、これより帝に經書の講義をし、それが終ると治世の法を論ずることとなつた。講義の時には傍聴を許される宰相たちも、この議論の間は退出もならず、次の室で待つてゐなければならなかつたのである。時勢は變じた。王安石ぎらひの老人は生きてゐなくつて幸せだつたかもしれない。東坡兄弟はこの變動のたゞ中に歸京して來るのである。

これは推定だが、喪が明けてから歸京までの數ヶ月の間に、東坡はおそらく再婚したと思ふ。二度目の妻も同じ王氏で、前の妻の一族、父は王錫といつた（「西方阿彌陀齋序」）。

た。筆者所蔵の八代松井關係文書にもこの最後のところに「此日別府晋介を傷し、宮崎眞郷を斃す」としたゝめてある。八郎の同志である有馬源内がのち宮城縣監獄に下獄した時、その獄窓下でしたゝめたものが西南紀傳の寫眞版に出てゐるが、それを調べると八郎の最期の場面が躍如として書かれて印象ふかいものがある。原漢文であるが、それを讀直しに書けば

しかして官兵八代に上陸す。兵を兩分してこれを拒ぐ。しかして我れ算を以て衆に當る。戦ひ多く利を失ふ。官軍氣益々熾んなり。こゝに於て君をして逸見別府二氏に使せしめ速に敵の背後を衝かしむ。君直ちに釋烟越の險を経て大口に至り、逸見、別府二氏に會し、告ぐるに我兵の危急を以てし、速かに兵を進めて八代の敵を衝くことを議す。即ち相共に人吉に至り直に兵を坂本に動かして坂本をとる。此時に當り我兵寡少にして敵兵倍多し。皆以て謂へらく孤軍深く敵地に入るの危きを恐ると。君獨り奮つて曰く速かに敵陣を衝かずんば何の面目あつて後在熊の諸氏に見えんやと。固く執つて聽かず、遂に議を決して妙見山の敵を襲ひ、進んで壘を抜き又兵をすゝめて八代の敵を撃ち、萩原堤に戦ふ。激戦奮闘、衆寡敵せず遂に我兵大敗す。君獨り止まつて奮闘遂に彈丸に中つて胸を貫いて斃る。別府氏も脛を傷つく。逸見氏纔かに身を以て免る。實に明治十年三月十二日也（註これ舊曆也）君死に臨み日記を懐中より取つてこれを逸見氏に囑して曰く「これをわが友人に贈れ、兄等力を勉めて全般の事よろしくせよ」と。しかして亦終に云はずと。此に於て我兵大亂、逸見氏球磨川を渡つて退くの時、日記を水中に

宮崎八郎の詩はよほど明治時代に愛誦された見え、熊本の齊々疊などでも生徒たちの間に流行したといふことは先にのべた。その詩のもつとも知られるは「立志歌」（文中掲出）であり、次で山田少年に與ふといふ長詩であつたといふ。その詩といふのは

顔似海棠綻露樹 姿比早梅映雪枝
遭君○然顔色變 別君惘然魂魄馳
嗚呼我情思無人知 千條萬縷亂於絲
對花恍惚想君貞 對月彷彿顯君姿
千花千月腸寸斷 豈無□□□□時
若有孤信徹尊意 三更月下得佳氣
といふのである。また失敗といふ一編の詩も愛吟されたものの一つといふ。

男子不能跨馬蹂躪五州
唯應哈花誦月伴閑鷗
呼是呼非終何事
百年身生一浮漚
君不見常山舌稽康血
人生何必誇苦節
平生心事人若問
笑指富山千古雪

敬神黨にしる、學校黨にしる、協同隊にしる或は西郷の私學校黨にしる、その立場はちがつてもいづれも國も愛する志は一つであつた。彼らは自らすすんでおのれのまさかりのいのちを國にさゝげて散つていつた。宮崎八郎もまたその例外でないことを、わたくしは

落し流す。予實にこれを惜む。後予逸見氏と會つて談、君の事に及べば氏大いにこれを惜む。予このために悵然たり。君常に曰く、男兒よろしく硝煙彈雨の中に死すべし、しからずんば山水の間に高蹈長嘯すべきのみ、と。しかして君秀才博識、詩文に工みにて身は國事を以て己が任となし談未だかつて私事に涉らざる也。予君と交はること數十年、未だかつて事を共にせざることあらざる也。東西遠隔の地にありと雖も未だかつて思想の同じからざることあらざる也。しかして君、命を鋒鏑に落して事遂に成らず、身は縲繼に就いて僅かに餘生を今日に至らす。豈感慨に堪ふべけんや。未だかつて日夜追惜哀慕の情のおこらざるはなき也。いさゝか君の言行を記し、追慕の情を述べ。草にのぞんで悲泣歎急に堪へざるなり。

これは明治十一年六月獄中で書かれたもので、もつとも信すべきの資料であるが、逸見が八郎の手帳を球磨川に流したことは亂陣の中とはいへ残念なことであつた。玉名郡誌には八郎の最期の場を明治十年の役起るや同志を率ゐて薩軍に投じ、智謀を以て稱せらる。八代の戦、薩軍の猛將逸見十郎太、頗る苦戦、身方に危し、眞郷曰く、君は薩軍の勇將なり、懸軍前途尙遠、君の力を要するもの甚だ多し、君此の戰場に生命を殞さば薩軍の士氣蓋し憂ふべきものあり、予乞ふ、自ら當らん、と。直ちに逸見の軍扇をとつて全軍を指揮し、勇戦奮闘遂に八代に於て戦死す。とある。附加してその勇壯のさまをしるぶよすがとする。

二十三

彼の生涯を辿りきたつて思ふのである。そのすゝんできた道、歩んできた思想は是といひ、非とよばれようとも、彼は平生の心事人若し問はゞ、笑つて富山千古の雪を指すといつてゐるではないか。

（三月二十八日）

「祖國」第七卷 九月號

送定 料價 五拾圓

昭和廿九年八月廿五日印刷
昭和廿九年九月一日發行

編輯兼 發行人 玉井一郎

印刷所 松崎印刷株式會社

印刷人 松崎秀雄

京都市中京區御池通兩替町角

發行所 まさき會祖國社

電話本局 一四二〇
四六三〇
振替 京都 七〇一七

柳井三千比呂著

詩集 花 鎮 頌

頌價五千圓
和綴B5大判
袋入豪華本

棟方志功手摺枚畫十八葉入

彼がわが身を投じたのは、青空の望まれる崖下の千仞、黒潮の渦巻く斷壁、或は水沫白く玉散る瀧壺、さうしたこの世の絶景のいづれを選んだのでもない。まことに投身は詩人の尋常である。即ち彼は、己の心の奥、魂の無限の深淵へ、わが身うち洞なす深淵へ、わが身を投じた。その魂の奥なる洞にふきすさぶ風の音のすさまじさは、今明らかにかにわが耳に傳り來る。云ふ勿れ、詩人投身の機微などと、詩人の秘密などと稱へられ雅い人をあざむいてきた、かの人工狡智の技巧など何の關係もないその事情である。けだも俗を去つた孤獨こそ、詩人の尋常の性であり、言辭を停止する詩人の生成の理であつた（保田與重郎氏序文より）

柳井氏の一行一語の記記はよく國魂に連つてゐる。柳井氏の舉身屈身、結局は國命を懸けての、身も、こころもの詩人であるのだ。

天地神明、よくも柳井氏の詩鏡に、光彩くださつて「花鎮頌」に、特に詩の眞實として華嚴されたのだ。（棟方志功氏跋文より）

發行・日本藝學院・東京都杉並區荻窪四の五七・振替東京一、一六〇六二番
取次・祖國社・京都市中京區兩替町御池東入・振替京都 七〇二七番

昭和二十九年八月二十五日 印刷納本
昭和二十九年九月一日發行（毎月一回一日發行）
昭和二十五年一月十二日 第三種郵便物認可

祖國

九月號 第六卷 第七號

定價 五拾圓

昭和二十九年十一月二十五日 印刷納本
昭和二十九年十二月一日發行（毎月一回一日發行）
昭和二十五年一月十二日 第三種郵便物認可

祖國



十二月號

柳井

絶對平和論

定價 B6 二七〇頁
送料 一三〇圓
三〇圓

「獨立」の指導者の第一の資格は何ぞ
それは毅然たる自主の精神である。
第二の資格は何ぞ
自主の精神を支へ守る自主の思想である。
第三の資格は何ぞ
自主の思想を自ら表現しうる種々の能力である。
一言に云へば？
一言に云へば、東洋の覺醒である。

祖國社編
棟方志功 装幀

保田與重郎著 棟方志功 装畫

日本に祈る 評論集

如是云ヒテ、余ノ魂ハフルヒ、心泣ケリ。身内裂ケ、腸斷チ、泪垂ル、ヲ如何セン。過ギシモノハカクモ切ナキヤ。アハレ實ニカクモ在ルヤ。汝ハ云フ、遠ザカリユクモノノ、ヒソカナル聲モテハルカニ云フ、然リト云フ。カレ余ハ口吟ム、泣ク勿レ、文人ノ尋常ノミ。サレドカ、ル極ミモ、大夜ノ時ノユキノオゴソカサヨワガ鎖魂歌ニキユエヨ。

B6 二八九頁 定價二五〇圓 送料三〇圓

淺野 晃著 棟方志功 装畫

石川啄木 評傳

終戦後五ケ年間、北海道勇拂の曠野に落居せる著者は、その隱忍の間、思想家としての成熟を完成しつゝ、鬱結の情の噴るところ、独自の詩風を示せり。重忠にあつて生死の境を往くこと數度、思想家たる、詩人たるの重量感愈々増大す。本書はその間著者唯一の論策にて、自ら巡歴せる近代の諸思想と、世界史的なりし時代觀を自在に馳驅批判せり。わが文明批評上の壓巻なり。

B6 一九〇頁 定價一六〇圓

滿鮮史研究 (上世編)

學士院會員 文學博士 池内 宏 著
東京大學名譽教授

明治に拓かれたわが東洋學は、常に世界の最高を示し來り、わが池内博士、その傳統の最後の最大權威として内外に周知する。しかも博士の生涯の營爲は、滿鮮史研究中世篇の二冊が以前に上梓されたのみである。頃日博士逝去の報を受く。吾人は戦後混迷の中に本書を上梓し、世界の學界に贈り得たことを僅かに慰めとする。

A5 五七〇頁 本クロス装函入
定價 一、二〇〇圓 送料 五〇圓

祖 國 (第六卷 第十號)

昭和二十九年十二月號



祖 國 社

鎮 花 抄 — 棟方志功 板

保田與重郎

歌

吉村 正

……………(四)

明治十年行幸記……………藤田祥光……………(四)

伴林光平翁歌文拾遺……………西村公晴……………(四)

詩 足 躑……………吉村淑甫……………(五)

歌 佐渡行……………小原春太郎……………(五)

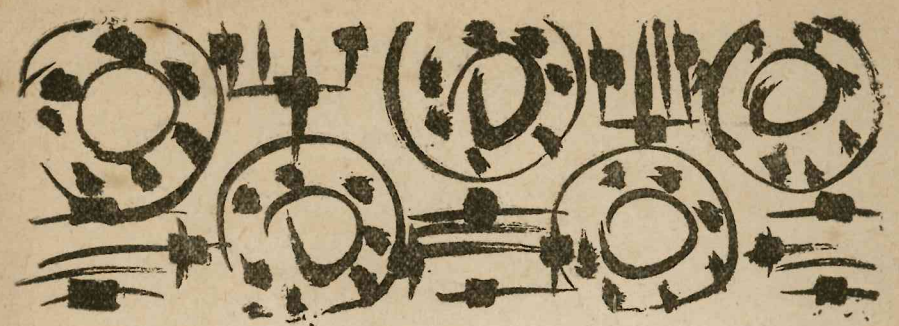
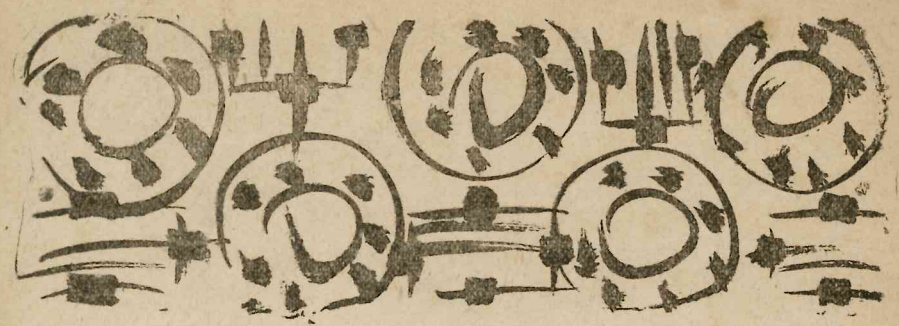
釋 迢空 (詩人)……………堀内民一……………(五)

(蘇東坡傳3)

黨争中の蘇東坡……………田中克己……………(六)

ラ・ロマンス……………鈴木助次郎……………(五)

中國文明の源流 (二)……………穴戸儀一……………(七)



うつそみは炎となりぬ
炫^{かまろ}火^ひの炎と燃えて魂氷るなり
與重郎



これぞかの幸の御井ぞと吾子ならべ額の汗をぬぐひやりけり

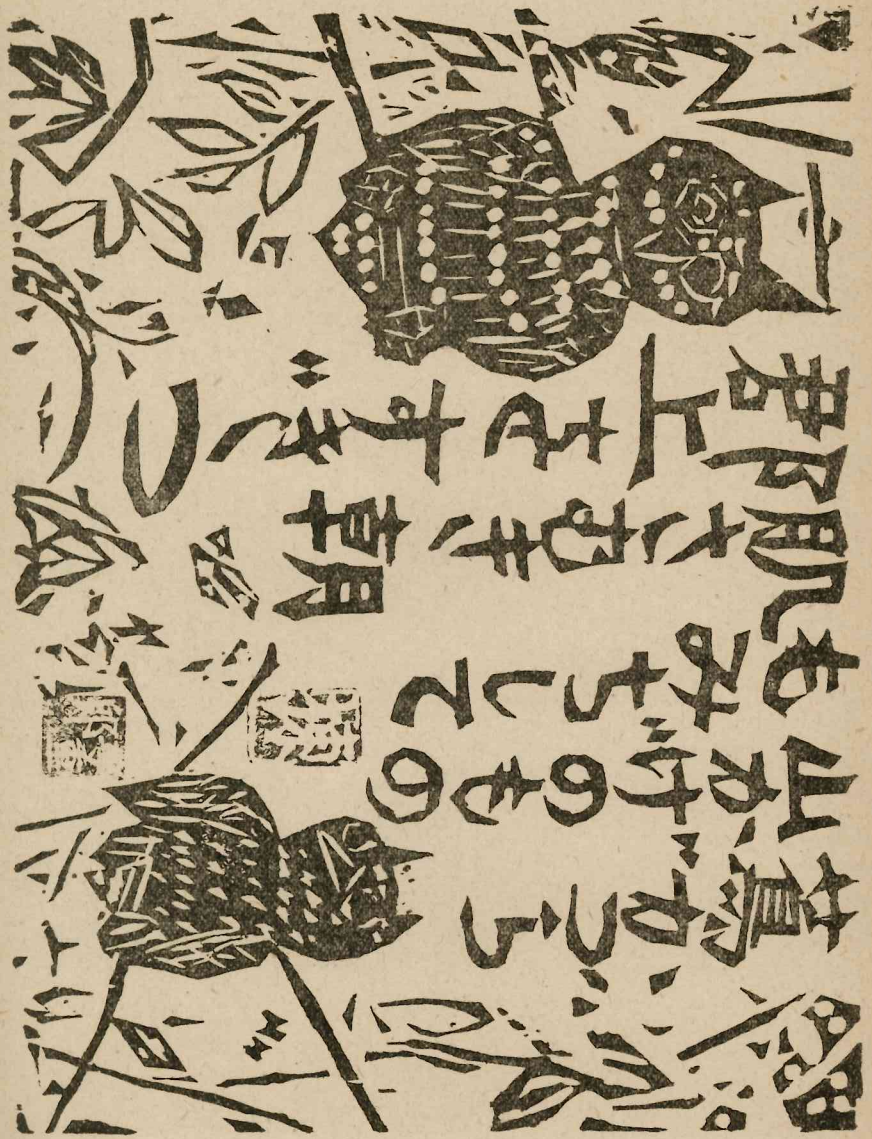
與重郎

これぞかの幸の
御井ぞと
吾子ならべ
額の汗をぬぐ
ひやりけり



葛かづら山かげのものもみぢして肌さむき朝郡上をすぎつ

與重郎





有頂天
た
そのみとき
あつきたま
みだ

のこぼ
かに

煉

歌の母正初吉

有頂天たゞそれのみときしときあつきたまみだのこぼれにしか
正



黨争中の蘇東坡

田中克己

熙寧二年（一〇六九）、東坡三十四歳。

蘇東坡は汴京に歸つて来て、官省院の監に任じられた。官省院とは文官武官の賞勳を司る役所であるが、王安石がもとから彼の議論のおのれと異なるのを憎んでゐたから、かゝる閑職につけたのだといふ。一方、弟の子由は、上呈した書が皇帝の心になつて、即日、延和殿に召されて御質問に答へ、三司條例司の檢詳文字といふ職につけられた。これは王安石が新法實施のために、あらたに設けた役所で、財政審議會ともいふべく、天子に直屬し、宰相といへどもこゝの審議に干渉することはできないのである。この役所の官になつたといふことは、彼が在來の論ずるところによつて、王安石から同志と見なされたために相違ない。

行はれた時（この年七月）には、子由は反對しなかつたが、その第二なる青苗法の案が立ち、關係官吏に審議を命じられると、彼はたちまち反對を表明した。その理由は、二割の利息で人民に錢を貸すことは、もと人民を救ふため、利のためにするのはないから、結構なことやうだが、出入の際に官吏が悪いことをするにきまつてゐる。また錢が手に入ると、良民でもついつまらないことに使用し、さて返納の時が来ると、富民でも期限におくられることがある。さうすると必ず鞭撻が用ひられ、州縣の手數も大變だといふにある。いかにもありさうなことだが反對の理由としては手ぬるい。そこへこれを既に實行してうまく行つたといふやうな官吏が現はれたので、反對者は多かつたが、この法は九月から施行されることになつた。これについて八人の官吏が、いろ／＼と富國の法をさがすた

めに地方に派遣されることとなつたので、子由はまたその人選に反對となへ、これが聴きいれられないと見ると、地方官に任じられんことを乞うた。

新法開始に當つて、重臣をはじめ方々からの反對にいきり立つてゐた王安石が、自己の同志と考へた人間の反對に會つて、絶大な不快を感じたのは當然である。願ひがきゝいれられて、河南府（洛陽）の官に任じられるとともに、王安石との縁は切れてしまつた。

さて兄の東坡は、このところ王安石の新法とは無關係で、閑職にあつて詩を作つてゐた。この年の作は、二月柳子玉の寄せた詩に和したもので、四月僧本鑿に與へた詩、八月王頤に與へた詩、同郷の任師中の地方赴任を送りかねてその兄任師平に寄せた詩、石蒼舒の醉墨堂を詠じた詩の五首である。みな彼の在京中の詩の例にもれず、おもしろくない。

熙寧三年（一〇七〇）、東坡三十五歳。

この年の作も送別の詩ばかりである。そのうち同じく唐宋八大家の一人に數へられる曾鞏を送別する詩は、次のごとくである。

醉翁門下士 醉翁歐陽修公の門下の士は

雜糲難爲賢 多くゐてだが賢いともいひがたい。

曾子獨留軼 しかし曾子だけはぬきん出てゐて

孤芳陋羣妍 すぐれた花が多く的美花を劣つてゐると思はせるが如しだ。

昔從南方來 むかし南方から来て

與翁兩聯翩 歐陽修公とならんで飛ばれた。

（送曾子獨留軼）

翁今自憔悴 翁はいまは體もやせおとろへられた
子去亦宜然 あなたが去られるのも當然だ。

賈誼窮適楚 賈誼はこまつて楚にゆき

樂生老思燕 樂生は老いて燕をこひしがつた。

那因江鱸美 江南のナマスがうまいからといつて

遽厭天庖羶 急になまのくさい肉をきらはれたわけではない。

但苦世論隘 たゞ世論の窮屈なのにはこまる

聒耳如蠅蟬 セミのこゑのやうにやかましい。

安得萬頃池 どこかに廣大な池を見つけて

養此橫海鱣 この海を自在にゆくフカを養ひたいものだが。

曾鞏を賈誼や樂毅にたとへてゐるのは、あまり當つてゐるやうには思はないが、とにかく都にはをれない人なのである。彼等の師たる歐陽修は、新法の實施に先だち、治平四年（一〇六七）から參知政事をやめて地方に出、この時は青州（山東省益都）の知事になつてゐたが、やはり青苗法に反對してゐた。してみると、蟬のごとくやかましいのは、新法黨の聲である。東坡がまもなく都にゐられなくなるであらうことも、たやすく察せられる。

錢藻を送る詩は、なほ一層このころの東坡の心境を明らかにする。

老手便劇郡 手腕があるので忙しい郡の官になるのに便りがあ

高懷厭承明 心が氣高いので承明廬にゐるのをいやがる。

聊紓東陽綬 いさゝか東陽郡太守の印綬をつけ

一濯滄浪纒 いちど滄浪の水で纒をすすぎなさい。

（送錢藻出守婺州）

東陽佳山水 東陽郡のよき景色には
未到意已清 ゆきつかないうちに心がもう清くなる。
過家父老喜 みちすがら故郷を通ると老人たちはよろこび
出郭壺漿迎 城郭を出て酒壺をたつさへて迎へやう。
子行得所願 あなたはゆくが願ふところを得られたのに
檜根居者情 とままるわれらの情のいたましいこと。
吾君方急賢 わが君はいま賢臣を求めに急ぐ
日旰坐邇英 日ぐれまで邇英閣にお出ましである。

黄金招樂毅 黄金臺を築いて樂毅を招かれ
白璧賜虞卿 白玉を虞卿に賜つておみである。
子不少自貶 あなたは少しもみづから卑屈にならないで
陳義空擘曉 正しいことをのべられたがその高大な議論もむだ
だった。

古稱爲郡樂 むかしは地方を治めるのはたのしいといつたが
漸恐煩敲撻 だんく／＼むちでた／＼くうるさまを心配するやうに
なった。

臨分敢不盡 お別れにのぞんで言をつくさぬが
醉語醒還驚 酔つていつたことをさめてからびつくりするだら
う。

東陽は錢藻の赴任する婺州（浙江省金華）のことで、劇郡といふ
ほどでもあるまいが、侍従の溜り間の承明廬にゐるよりはよからう
といひ、地方にゆく者に反し、都に残る者の不快をのべてゐる。次
には神宗皇帝の求賢のさまをのべてゐるが、君主批判の責めはまぬ
がれまい。昔は樂しかつた地方官が、いまでは鞭うちでうるさいと

熙寧四年（一〇七二）、東坡三十六歳。

この年の作は、劉恕^シ送劉道原歸觀雨康^カからはじま
る。劉恕、字は道原、史學者で、司馬光の下にあつて、資治通鑑の
編纂をたすけたが、新法を不可といつて王安石にくまれ、辭職し
て父のもとへ歸るのである。別れを告げに來た劉へのこの送別の詩
は、東坡の時局感を明瞭にあらはしてゐる

晏嬰不滿六尺長 齊の晏嬰は身長六尺に満たなかつたが
高節萬仞儼首陽 高節八萬尺で伯夷のみた首陽山より高かつ
た。

青衫白髮不自歎 青衫白髮のきみも嘆じない
富貴在天那得忙 富貴は天にありどうしてあくせくしようかと。
十年閉戶樂幽獨 十年も戸を閉ぢて幽獨をたのしみ
百金購書收散亡 百金もて書を買ひ散らばつたのを集めた。
場來東觀弄丹墨 東觀に出入して筆をとり

聊借舊史誅姦強 歴史の記述に筆をかりて惡臣をやつつけた。
孔融不肯下曹操 孔融は曹操のいふことをきかず
汲黯本足輕張湯 汲黯も役人の張湯をないがしろにした。
雖無尺釜與寸双 一尺の甕も一寸の双物ももたないが
口吻排擊含風霜 口舌で排撃して風霜のきびしきを含んだ。
自言靜中閑世俗 自分で静中閑世俗をみてゐる

有似不飲觀酒狂 酒をのまずに酒狂をみてゐるやうだ。
衣巾狼籍又屢舞 衣巾をみだしましたし／＼舞ひをどる
傍人大笑供千場 よこの者を笑はせ芝居をしてゐるやうだ。

七緒

いふのは、新法施行にともなふ苛酷な政治を誇張していつてゐるの
である。醉語と逃げてゐるが、かならず實際の感情である。東坡が
改革の反對者であることは、この一詩で明らかである。

改革に熱心な王安石は、反對者を續々と地方へ追ひ出した。まづ
去年の六月、地方に出された御夫中丞呂晦からはじまつて、同じく
八月には、劉琦・錢顛・范純仁・劉述と四人の諫官があひついで地
方に出され、十月には同中書門下平章事の富弼^{フツ}が免じられて、亳州
の知事にうつされた。同中書門下平章事といふのは首相なのであ
る。富弼はこの正月に就任したばかりだが、新法に反對のことがわ
かると、たゞちにこの處置にあつたのである。

年があらたまつて、正月には張方平が陳州^{河南}の知事に左遷
された。張方平は東坡兄弟と親しかつたので、子由はこのとき乞う
て、陳州の學官に轉任さしてもらつた。三月には孫覺がやめられ、
四月には呂公著・趙抃・李正嘗がやめられた。中でも九月に翰林學
士司馬光がやめられて、永興軍（長安いま西安）の知事とされたの
は、恩人歐陽修に對すると同じく、親友をも退けるといふ王安石の
大英斷で、私情にかゝはらず、新法に賛成しなければ容赦しないと
の方針が明らかになつた。これら罷められた者たちが、また野にあ
つておのづと黨をなしてゆくことは當然のことである。

十月に同じく地方に左遷された女同、呂希道には、東坡は詩をも
つて餞別してゐるが、後者に贈つた詩「送呂希道知和州」には、「我
生本是便江海、忍恥未去猶徬徨」の句が見える。都にひとり残つて
ゐられるのは、信念を披瀝しないおかげだと、みづから恥ぢてゐる
のである。

交朋翮翮去略盡

さてわが友どちはばら／＼とおほかた去りつ
くし

惟吾與子猶徬徨

僕と君とだけがまだうろつてゐた。

世人共棄君獨厚

世人はみな僕を棄てたが君だけは情があつて
の

豈敢自愛恐子傷

自分がかまはないが君がこまらないかと心配
した。

朝來告別驚何速

けさ來て別れを告げたのでなんと急だとびつ
くりした

歸意已逐征鴻翔

歸郷の意は決して南にける鴻をおひかける

匡廬先生古君子

父君の匡廬先生はむかしかたぎの君子で

掛冠兩紀鬢未蒼

掛冠して二十年になるがおつむはまだ白くな
られない。

定將文度置膝上

きつと王述のやうに愛子を膝にのせ

喜動鄰里烹豬羊

喜んで近所のもつと豚や羊を煮られやう。

君歸爲我道姓字

歸られたら僕の姓字を申しあげて

幅巾他日登堂堂

隱者の服を着ていつか堂にのぼる許しをお願
ひする。

この詩では、友を後漢の孔融や前漢の汲黯^シにたくへ、この二人が
あへて下らなかつた曹操と張湯とをもつて、王安石とその一派に比
してゐる。諸友がみな去つたのに、二人だけとままつてゐたのだ
が、いままた劉恕も去るのである。東坡の去就も、もはや定まつた
といつてよろしからう。

同志への申しわけもみごとに立つて、東坡はたちまち都から追放されるが、このとき東坡は、おそらく得々としてこの命を受けたことであらう。この機會とは、王安石が科擧、すなはち高等文官試験の科目を變更して、選出する人材の質をかへようとし、その案の可否を問うたのである。東坡は敢然これに反對の意見をのべた。

王安石の案は、從來の規定であつた詩・賦・雜文各一篇、策五道、帖經十條、墨義十條の試験問題を、詩賦をやめ、經書の解釋と論文のみにしよといふのである。この改革に詩人たる東坡が反對したのは、當然ともいへるが、反對の根據は、祖宗以來の法則を廢しても、實効は期し得られない、といふのみであり、保守的な意見にすぎない。しかし科擧とはもとゞり知識階級であるか否かを驗する法である。詩を課しやうが、時局策を課しやうが、優秀な答案を書いたものが、かならず行政の實際に適してゐるとは決らない。口と筆とに巧みにして、實際政治にうとい者を選び出す點では、むしろ從來のごとく詩賦に重きをおいた方が、弊害は少かつたかもしれない。それゆゑ東坡の反對も、必ず當つてゐないとはいへない。とまれ東坡の意見書がたてまつられると、皇帝は感心して、その日のうちに召し出され、現在の政治の得失を問はれた。この勅問に對し、東坡は、當今の患は治を求むること急にすぎ、言を聽くこと廣きにすぎ、人を進むること銳きにすぎることである。願はくは續むるに安靜をもつてし、物の來るのを待つて、しかるのちこれに應じたまはんことを、と言上した。神宗は悚然として「卿の言は朕まさにこれを熟思しよう」といはれたが、東坡退出後、王安石は悦ばず、これを吏館から退け、開封府の府官にした。いまだ都にはとゞ

陳州ではまた張方平に和して、「次韻張安道讀杜詩」を作り、李白と杜甫とを詠じて、このあとをつぐとの意をのべてゐる。陶淵明心醉に先だつて東坡の規範は、こゝにあつたのである。久しぶりて弟に逢つた時の感懷は、詩にのこつてゐないが、九月に陳州を去るとき、弟は兄を送つて潁州（安徽省阜陽）まで來た。ここには當時、歐陽修がゐたので、これとの會談も目的の一であつたらう。「陪歐陽公燕西湖」の詩の示すごとく、三人で潁州の西湖に遊んだあと、兄弟は南北に別れた。別れの詩は「潁州初別子由」と題する二首であるが、ともに良い。第二首を擧げると

近別不改容 近別では顔色をかへることがないが
遠別涕霑胸 遠別となるとなみだが胸をうるほす。
咫尺不相見 しかし咫尺のところにあても會へなければ
實與千里同 千里わかれてゐると同じだ。
人生無別離 人生に別離がなければ
誰知恩愛重 恩愛の大切なことをたれが知らう。
始我來宛邱 はじめて宛邱に來ると
牽衣舞兒童 甥たちは着物をひっぱつてをどつた。
便知有此恨 そのときからこの別の名残りをしきには氣ついて
ゐたが

留我過秋風 はなしてくれないで秋風に會はされた。
秋風亦已過 秋風もいつてしまつたが
別恨終無窮 別れのなごりはきまりない。
問我何年歸 「いつの年に歸つて來るか」と問はれたので
我言歲在東 歲星が東にある春にと答へた。

まりながら、地方官となつたわけである。

東坡はまた上書して新法の不當を述べた。これが効がないと知ると、開封府での進士の試験の問題として「晋の武帝は吳を平げるに獨斷をもつてして勝ち、符堅は晋を伐つに獨斷をもつてして亡ぶ。齊の桓公は管仲に専ら任じて霸たり、燕王噲は子之に専ら任じて敗れた。事同じうして功異なる」といふのを出した。王安石に對する諷刺としてであることは、明々白々である。これを知ると、安石は大いに怒り、御史をして彈劾せしめたが、これは罪にならないでしまつた。しかし東坡も都に留まることを欲しないで、地方への轉任を願ひ出、許されて杭州府の通判に任じられた。通判は太守の次官、副知事である。

杭州はのちの南宋の都の臨安で、元代の繁華はマルコ・ポーロなどの外人も感嘆してゐるが、このころからすでに汴京に劣らず繁榮してゐたのである。東坡も欣々然として赴任したと思はれる。途は舊法黨の一首領なる張方平と弟子由のゐる陳州（淮陽）をよぎる。「出都來陳所乘船上題小詩八首不知何人有感於餘心者聊爲和之」の序で、八首の五絶がのこつてゐる。その最後の一首は曰く
我詩雖云拙 わが詩は下手だといふが
心平聲韻和 心が平かだと聲韻は和する。
年來煩惱盡 としごろのなやみがなくなつて
古井無由波 心の古井戸には波の立つわけがない。
まんだらの負け惜しみでもないやうである。

この連作の第七首では、李白の「襄陽歌」を引いてゐるが、李白・杜甫は、彼がこのころもつとも尊敬した先輩であつた。それゆゑ
離合既循環 離れと合ひとはめぐりあふもの
憂喜逐相攻 憂ひと喜びとも攻めあふものだ。
語此長太息 かう語つて長いときをした
我生如飛蓬 わしの一生はとぶヨモギのやうだ。
多憂髮早白 憂ひが多ければ髪が早く白くなる
不見六一翁 六一翁のおつむを拜見したか
六一翁とは歐陽修で、この翌年には薨するので、もとよりこれが最後の面會だつたのである。

潁州から東坡は潁水をさらに下つて、その淮河に入る潁口に着き、こゝから淮河を下つて壽州をへて、濠州（鳳陽）に來る。こゝでは遊覽して塗山、彭祖廟、虞美人墓などの吟がのこつてゐる。さらに淮河を下ると、洪澤湖にさしかゝる。湖中では大風に遇つて引き返したが、その時の吟は佳作である。「發洪澤中途遇大風復還」。

風浪忽如此 風や浪はたちまちやうに烈しい
吾行欲安歸 わしの旅路はどこに歸着するつもりか
挂帆却西邁 帆をあげて反對に西に進んでみると
此計未爲非 この計畫は失敗ではなかつた。
洪澤三十里 洪澤湖の三十里は
安流去如飛 安らかな流れでとぶやうにゆけた。
店民見我還 住民はわしのかへつて來たのを見て
勞問亦依依 慰問することなつかしげだつた。
攜酒就船賣 酒を船にもつて來て賣るのもある
此意厚莫違 この氣持のあたゝかさはかはらないやうに。

醒來夜已半 酒がさめるともう夜なかで
岸木聲向微 岸の木のそよぎもかすかになつた。

明日淮陰市 明日は淮陰の市場にゆくが
白魚能許肥 白魚がよく肥えてのやう。

我行無南北 もとくわしの旅には南北のさだめなく
適意乃所祈 氣持にあふのが願ふところである。

何勞舞澎湃 風浪の澎湃と舞ふのをなぜ心配しやう
終夜搖窗扉 よつびて窓や扉をゆりうごかさうと。

妻孥無憂色 妻子どもも心配のいろなく
更典篋中衣 また衣裳箱の着物を質に入れた。

淮陰からは大運河を航行して山陽（江蘇省淮安）をへて、廣陵、
即ち揚州（いま江都縣）に來ると、前に東坡が詩を贈つて送別した
劉敞・孫洙・劉摯の三人が、太守錢公輔の設けた宴會に列席した。
三人ともに東坡と同時に進士となつたが、みな新法に賛成せず、地
方に轉出したものである。この席上の空氣は想像に難くないが、「劉
貢父」「孫巨源」「劉華老」とそれ々々を詠ずる詩があつて、これ
を明らかにしてゐる。

劉敞は王安石の友であつたが、新法に反對してこの時には海陵
（秦縣）の通判だつたので、近くだから訪ねて來たのであらう。孫
洙はこゝ揚州の生れで、諫院にあつたが、新法には心中不賛成なが
ら反對を表明せず、たゞ地方官を乞うて海州の知事となつたのであ
る。東坡の詩にもいくらかその生ぬるさをなじる氣配が見える。こ
れに對し劉摯は王安石に優待されて、監察御史に拔擢されたが、青
苗法のことで富強が左遷されやうとすると、敢然として反對の辭を

たてまつり、華南に放逐されることとなつたが、やつと助かつて衡
州（湖南省衡陽）鹽倉の監といふ小官に任じられたのである。この
三人を詠ずる詩の中で、彼に對するものが、最も讚辭に富んでを
り、彼を屈原にたとへてゐるのも當然であらう。

江陵から瓜州に來て、揚子江を渡ると、潤州（鎮江）である。こ
ゝには夜半の鐘聲で有名な金山寺が江中にある。東坡の「遊金山寺」
の詩はこの時に成り、唐宋詩醇の評によれば、金山寺を詠じた詩の
中の最傑作といふ。曰く

我家江水初發源 わが家は長江の水源にあるが

宦遊直送江入海 役人になつて江の海に入るところまで來た。

開道潮頭一丈高 開けば潮の高さが一丈になることもあると

天寒尙有沙痕在 いま寒空でも砂にあとがのこつてゐる。

中冷兩畔石盤陀 中冷泉の南の石盤陀は

古來出沒隨濤波 むかしから水の中に出没した。

試登絕頂望鄉國 いま試みに絶頂にのぼつてふるさとを眺める

江南江北青山多 江南江北ともに青山が多い。

羈愁畏晚尋歸棹 旅愁でおそくなるのをおそれて歸り舟をさが

山僧苦留看落日 山僧はねんごろに引きとめて落日を見させた

微風萬頃轉文細 そよ風に萬頃の水は皮のなめしに皺の寄つた

斷霞半空魚尾赤

是時江月初生魄 されぎれの霞は中空で魚の尾のやうに赤い。

このとき江月は光のない部分が出来かけ

二更月落天深黑 二更にはその月もおちてまつくらになつた。
江心似有炬火明 江の中心にはたいまつのように明るいのもの

飛焰照山棲鳥驚 飛ぶ焰は山をてらしてねぐらの鳥をおどろか

懐然歸臥心莫識 さいしく歸つてねたがわからぬ

非鬼非人竟何物 鬼でもない人でもない一體なものか。

江山如此不歸山 江山かくのごとくに山にかへらないので

江神見怪驚我頑 江神がふしぎを見せてわが頑固なのをびつ

りさせたか。

我謝江神豈得已 わしは江神にあやまつた「やむを得ないので

有田不歸如江水 田地があつて歸らないのなら江水と同じく御

心まかせ」と。

任地なる杭州へ着いた直後の感想は、弟に送つた二首が示してゐ
て、その第一首に曰く

眼看時事力難勝 目のあたりに見た時事には力がたらないが

貪戀君恩退未能 君恩をむさぼりこうて退職できなかつた。

遲鈍終須投劾去 遲鈍のわしは終には退職しなければならぬ

使君何日換豐丞 太守どのはいつこの豊丞をおかへだらう。

杭州も汴京と同じく、新法のことがかましくて、永くみられさ
うもない様子をのべてゐるのである。しかしやはり都よりはのんび
りしてあたらうし、名所舊蹟が多く、氣候の温和な江南は、蘇東坡
をいこはせたといはねばなるまい。

（蘇東坡傳の一章）

佐渡行・他

小原春太郎

鎌倉の主と見立てむ七浦の章魚坊うちて酸にて参ら
む

和田濱の深き入江の並木松夏はひそかに闌けにける
かな

ひねかぼちやゆら、葉うらに揺れてあり峽の水車を
風わたりゆく

山寺に友みつけたり青蛙卒塔婆の上に居眠りてをり

ふかぶかと楓若葉の影つくる常寂光院の古りし石段

蓮月の短冊ならむわれもまたみやび男さびて酒をく
みたり

本來無東西と笠に書き遍路の人の道ゆくにあふ

領、釜などに變化したが、それに代表されるかは、その陰に平音の鈍、鋳、鋳などが取り残されたものと想像することができる。

*たとへば、青州府壽光縣の古城が俗に牟城と稱されたが、王莽がこれを翼平亭と呼んだことについて、『續山東考古錄』(二六)の著者は、「牟は平の訛に似たり」と論じてゐる。周の平州(萊蕪縣附近)が古の牟國に當つてゐるのも、かういつた普通の結果にすぎないと云つてよい。『春秋』宣公九年の平州についての杜氏の註に、齊地、泰山牟縣にあり、と見え、また『魏志』にも牟縣に平州城があつたとしてあり、いづれも牟平牟の關係を暗示してゐる)。また、魯の煬公について『史記』の傳へる「築茅闕門」といふ記事に關して、徐廣は茅は「一に第に作り夷に作る」と記してゐるが、これによつて考へると、もともと夷に「茅」の音があり、後に第と誤記されたものであらう。茅は周の茅國すなはち今の濟寧州魚臺縣に當つてゐる。

*春秋の夷國が即墨や壯武(即墨縣の西)にあつたのは、夷を示す語がもともとさういつたサブとかソブに類する音をもつてゐたからであらう。

要するに、シブといふやうな原音が、華夏人によつてまづ Siet とか Siet といふふうにくひ取られ、やがて thiet から tiet に轉訛して發音されたのであらうといふことが、ここに推定される。つまり、鐵といふ語音は漠北の地から入つてきたものでなく、夷族が鐵を指した稱呼の華語化であつたと言ふことができる。これと同様に、游牧民たちの tenuir を timir といふ語も、Sil, Seb といつたやうな語の音訛であつたらしく、しかも華語のばあひよりもずつと原形に近いことがわかるのである。(未完)

後記

愈々數日にして昭和二十九年も暮れようとしてゐる。新年とともにわが国内外の情勢は一段と緊迫の二字を加へるものと推測され、その時にあたつて未だ國に眞正の言論の立たざるを憂ふのである。さきに新内閣が發足にあつて、官吏の麻痺、ゴルフを禁じたことが報道され、一部のチャーナリズムは新内閣の人心收攬策の一つと考へてゐるやうであるが、心ある多くの國民はこれを好感してゐる。戦後内閣によつて官吏の修身が唱へられたことは、これがはじめてであつて漸くわが國の道義が回復しつゝあることを示したものである。

儒教によつて説かれてきた修身、齊家、治國、平天下は、獨り支那の政治道徳であつたばかりでなく、汎くアジアの政治を一貫する思想であり、官吏の修身が政治への信につながり、政治の根本であることを、戦後の大多數の國民はその生活の實際に則して知つてきたのである。すでに修身がわが國の經濟的自立、ひいてはわが國の完全な獨立につながる問題であることも今日國民の多くは知つてゐるのである。

最近、日本浪漫派再建問題に關連して、戦後の對米協力者の戰犯問題が云々されたことは注目すべきことである。しかし對米協力の是否よりも、誰が日本の自主と自立に逆行する言論を指導し、また現に指導しつゝあるかである。戦後のチャーナリズムは概ねこの逆コースを指導してきたものであり、すでに今日の國民は彼等の退場を求めて居るのである。

(N)

祖國 宮崎兄弟特輯號

定價 百五拾圓
送料 拾六圓

宮崎兄弟の思ひ出

徳富蘇峯

陳中孚 山田純三郎 紫垣隆
柴田麟次郎 河本幸村 後藤是山

中國革命の同志宮崎滔天の事蹟 葛生能久

津久井龍雄 大森曹玄 白井爲雄
鈴木善一 糸屋壽雄 中山優

宮崎滔天と私 C・S・バビア

わが父のおもひで 宮崎世龍

宮崎八郎 荒木精之

狂人譚 小山寛二

宮崎滔天君の思出 薄田斬雲

偉かつた宮崎兄弟 末永節

三浦義一 スコット沼瀨女 柳井三千比呂

角田時雄 雪澤千代治 河上利治

阿刀土彦 奥西保 保田與重郎

硬石五拾年譜 故内田良平

「祖國」第六卷 十二月號

定價 五拾圓
送料 四圓

昭和廿九年十一月廿五日印刷
昭和廿九年十二月一日發行

編輯兼 玉井一郎
發行人

京都市下京區油小路
通り松原上ル

印刷所 松崎印刷株式會社
印刷人 松崎秀雄

京都市中京區御池通
兩替町角

發行所 まさき會祖國社

電話 本局 一四三〇
振替 京都 七〇一七

